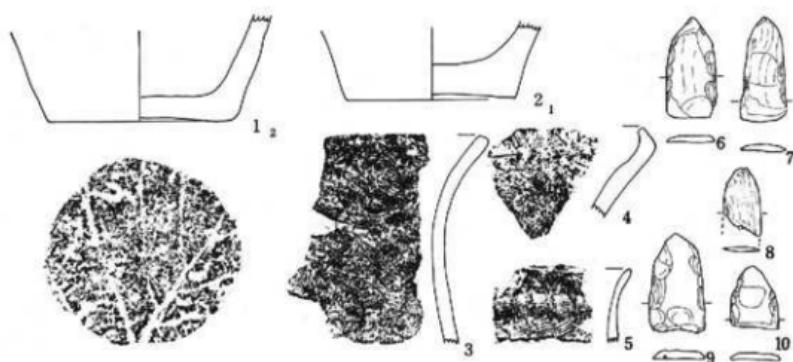


第440図 第18号・21号住居実測図 ($S = 1/80$)



第441図 第18号住居址出土遺物（1/3）

② 第18号住居址（第440、441図）

遺構 本住居址は第5号住居址の北に位置している。北東にて第26号・27号住居址を切ってい る。

南側に第21号住居址があり、同一床面にて重複する。炉を二つ持つ大形住居址とも考えられるが、北と南とでは柱の軸がずれることから、別々の住居址としたものである。北側を第18号住居址、南側を第21号住居址とした。

本址の規模は東西5.5m、南北は柱穴からして4.5mを測ると思われ、プランは隅丸長方形である。

壁高は10~15cmと浅いものである。床面は炉付近は固いが全体に軟弱である。炉は北側柱間中央よりやや西線上よりやや内にある。東と西に枕石を据えている。埋甕はみられない。

主柱穴はP₄・P₆、P₈、P₁₃、P₁₉の4本である。

東側床面上より甕の底部（1・2）が出土している。

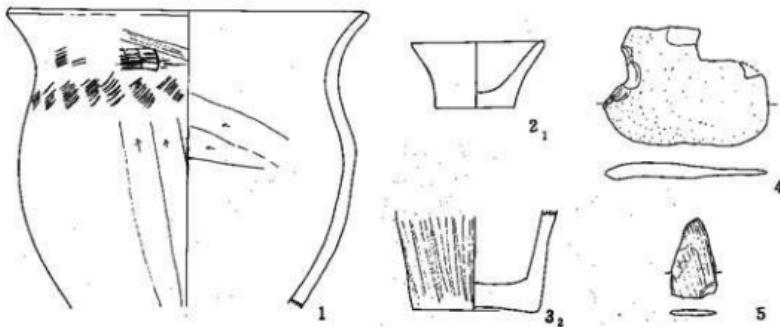
遺物 遺物は少ない。土器は1・2の甕の底部と少量の破片である。1は木葉痕を持つ。

3は甕の口縁部で無文である。4は壺で折立部は内屈する。

磨製石磧5点が出土している。8は孔を持つものである。他は調整中のものである。

外に打製石斧2点が出土している。

時期は後期である。



第442図 第21号住居址出土遺物（1は炉、1/3）

③ 第21号住居址（第440・442図）

遺構 本址は第18号住居址の南にあり同一床面にて重複する。

規模は東西に5.2m、南北は柱穴から推測するに5.2mを測ると思われ隅丸方形を呈す。

壁高は南で30cm西では15~20cmである。床面は中央部が固いが全体に軟弱である。

炉は南側P₁、P₂₃の中間よりやや東、柱穴線上に位置している。西と北に枕石を持っている。内部は甕（第442図-1）の胴部を半分割って埋設しており、西側は石を抱いている。口縁は内に落ち込んでいる。

主柱穴はP₁、P₂、P₂₀、P₂₃の4本である。

P₂₃の南東床面より手づくね土器（2）、P₁の南より甕の底部（3）が出土している。

遺物 土器は少ない。図示したもの以外は小破片である。1は炉の埋甕で胴下部を欠く。口縁の反りはやや強く頭部に斜走短線文が2段に施される。内外面はハケ目調整される。

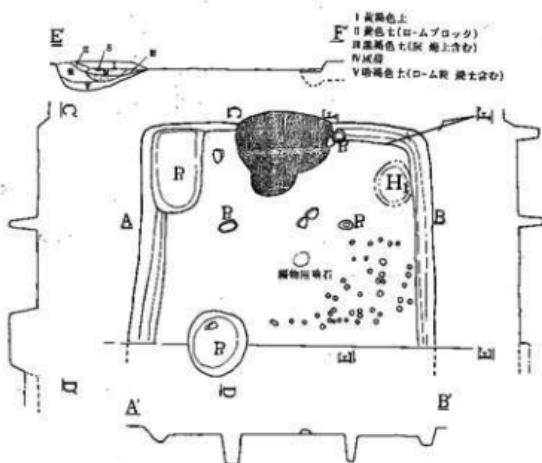
磨製石礫が1点（5）出土している。他に打製石斧3、磨製定角石斧1、大形粗製石匙（4）が1点出土している。石匙の外は欠損品である。

時期は後期である。

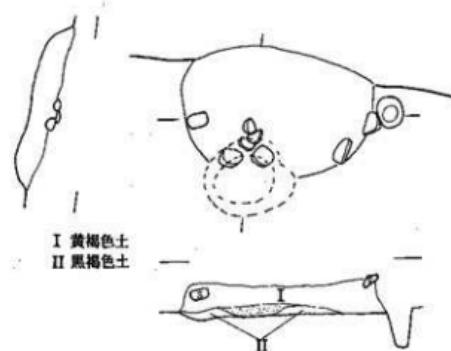
(3) 奈良・平安時代

① 第1号住居址（第443～445図）

遺構 本住居址は第2号住居址と第10号住居址の中間にあり、東側は開田時に削られている。プランは不明である。規模は南北4.3mを測るが東西は不明である。壁高は西で20cm、北と南は10cmである。周溝が一周していたものと思われる。床面は堅密である。カマドは西壁中央にあり、壁を若干削り込んでいる。被石はみられない。



第443図 第1号住居址実測図 (S = 1/80)



第444図 第1号住居址カマド実測図 (S = 1/40)

柱穴はP₂, P₄の2本が検出されている
東側の柱穴の検出を試みたが確認できなかつた。

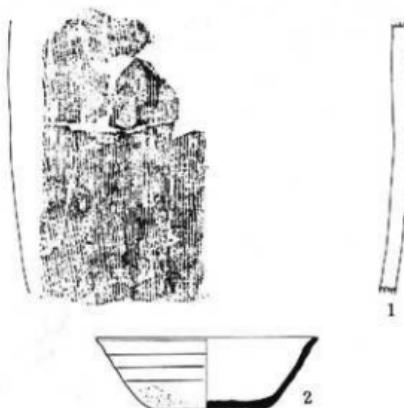
南東部に80×90cm、深さ35cm円形のピットがあり、中より土師器の甕が出土している。土壤の可能性もある。

カマドの内部より甕(第444図-1)が、カマドの手前床面より編物用錐石5個が集中して検出された。

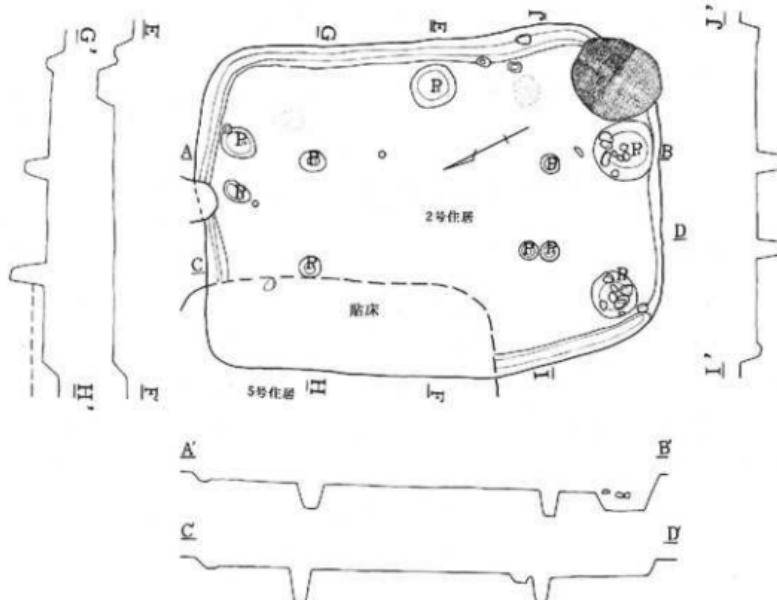
遺物 土器は少ない。土師器の甕が主体である。甕は3個体分くらいである。
他に須恵器の壺が2点出土するのみである。2の須恵は回転糸切りである。

編物用錐石が7点出土している。

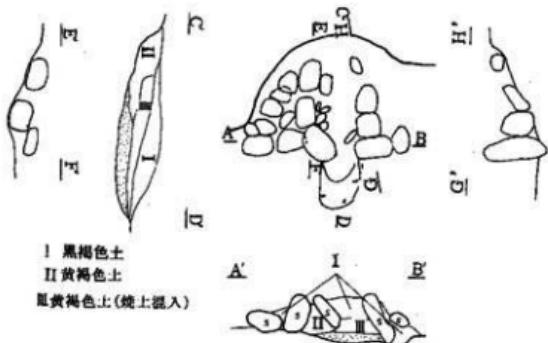
時期は奈良・平安Ⅰ期であろう。



第444図 第1号住居址出土遺物 (1/3)



第446図 第2号住居址実測図 (S = 1/80)



第447図 第2号住居址カマド実測図 ($S = 1/40$)

② 第2号住居址 (第446~448図)

遺構 本住居址は第1号住居址の南西に位置

し北西部は一部第5号住居址に貼床している。

プランは隅丸長方形で、規模は $6.5 \times 4.8\text{m}$ を測る。壁高は $25 \sim 30\text{cm}$ 、北側は低く 15cm ほどである。

周溝が南を除き一周するが貼床部では検出できなかった。貼床は第5号住居址の擾土をタタいた軟弱なものであった。貼床以外も堅さはやや軟弱なものである。

カマドは南東隅に位置し、壁を掘り込んで造られている。袖石を持つもので、左側は外側三角状に石組を行う特殊な例である。カマドの造り直しがあったのか、当初掘りすぎたものか良くわからない。P₁の東、P₃の東にわずかな焼土の堆積がみられた。

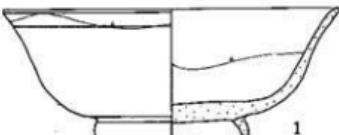
主柱穴はP₁、P₂、P₄、P₅の4本である。

カマドの右脇と南西隅に上部に石を持つ円形のピットがある。土壤の可能性もある。内部から遺物は出土していない。

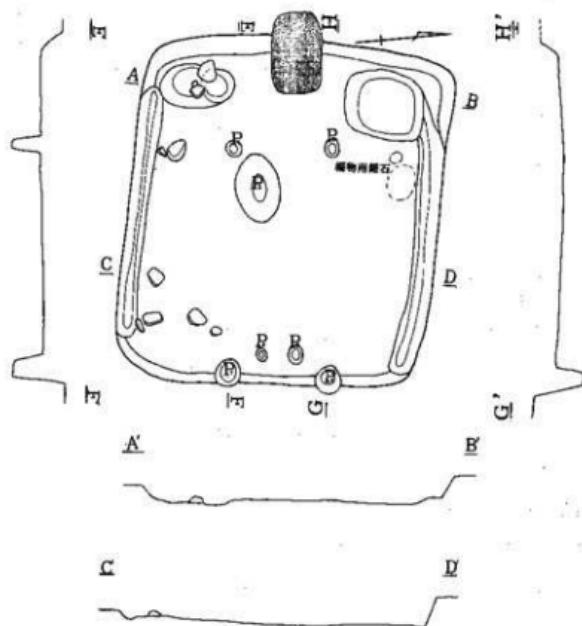
遺物 土器は少ない。図示した灰軸以外には、土師の壺と环、須恵が少量出土するのみである。

編物用鍔石5、敲打器・磨石が各1点ずつ出土している。

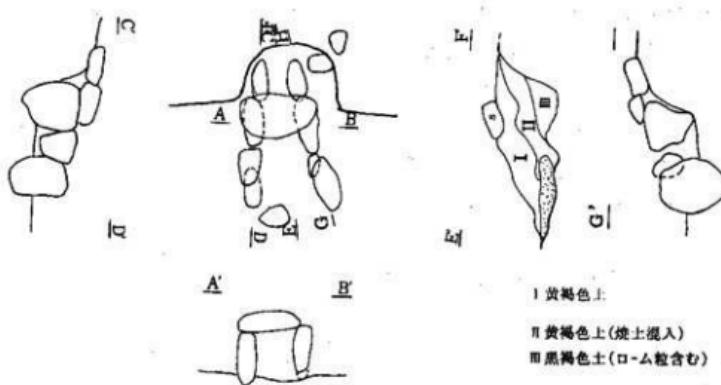
時期は奈良・平安VI期に属する。



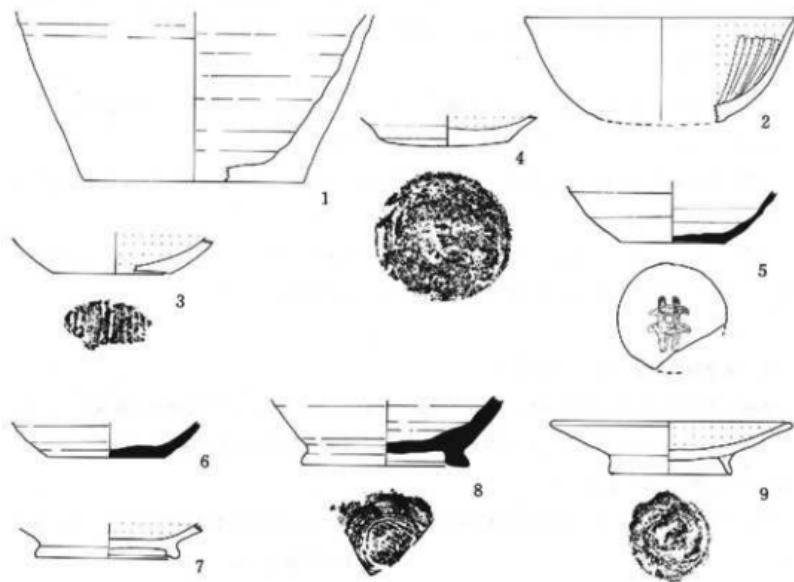
第448図 第2号住居址出土遺物 (1/3)



第449図 第4号住居址実測図 ($S = 1/80$)



第450図 第4号住居址カマド実測図 ($S = 1/40$)



第451図 第4号住居址出土遺物（1/3）

③ 第4号住居址（第449～451図）

遺構 本住居址は第2号住居址の南西に位置し、西と南は調査区域外となっている。

プランは隅丸長方形、規模は4.9×4.4mを測る。長軸方向はN-80°-Wである。壁高は北東部が最も高く40cm、南に行くに従い低くなる。

周溝は北と南にみられる。床面は中央部が回み固く堅緻である。

カマドは西壁中央にあり、壁を削って煙道部を造っている。袖石がよく残り天井石も残っている。支脚は検出されていない。封土はロームである。

主柱穴はP₁、P₂、P₄、P₇の4本でカマドの反対側2本は壁に掘られており、反目遺跡27号住居址例と同様である。P₅、P₆は入口施設柱穴である。

カマドの右に110×95cmの隅丸方形プラン、深さ40cmのピットがある。遊光遺跡第3号、8号住居址例と同様貯蔵用施設と考えたい。

北壁ぎわ西寄り床面上より編物用錐石が40個まとめて出土している。カマド内より9の皿とカマド右より1の甕が出土している。

遺物 土器は多いが完成に近いものは9の环のみである。灰釉は坏の小片が2点出土するのみである。土器の壺が主体で、ハケ目を持つ長胴壺もみられる。土器の壺・壠は内面黒色処理するものが主体である。

底部の切離し技法は3・8にみられる静止糸切り、4の回転ヘラ切りを持つものがある。

5は底外面に「井」の字が墨書きされている。薄くかすれがちである。

編物用錐石40個の外に打製石斧2、磨製の始刃石斧・乳棒状石斧各1、敲打器4点が出土している。

時期は3・4・8のように古い様相をみせるものがあるが、カマド内、付近より出土した壺・环からすると、奈良・平安IV期に属すると考えるのが妥当であろう。

④ 第9号住居址（第452・453図）

遺構 本住居址は第2号住居址の北西に位置しており、南東部は第6号住居址に貼床している。

プランは北西隅が内に入り込むが隅丸方形を呈す。規模は3.6×3.6mを測る。主軸（カマド）方向はN-68°-Wである。

壁高は10~15cmである。床面は全体に軟弱である。カマドは北西壁中央に造られている。幅広なもので袖石はない。

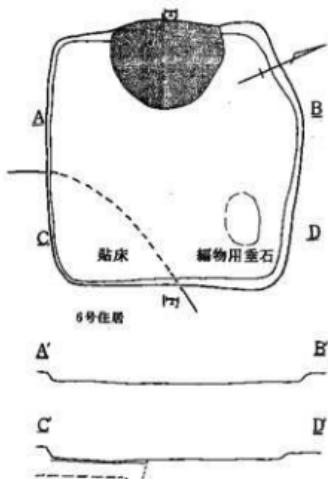
柱穴は検出されていない。

北東隅に近い床の床面より編物用錐石28個がまとめて出土している。その南床面より土器の壺（第453図-1）が出土している。

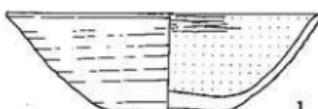
遺物 土器は少ない。1は土器の壺で内面黒色処理される。他にはハケ目を持つ土器の壺、ロクロ整形の壺、須恵の壺、壺が少量出土している。灰釉は壺の破片が1点のみ出土している。

編物用錐石は全部で30点出土している。

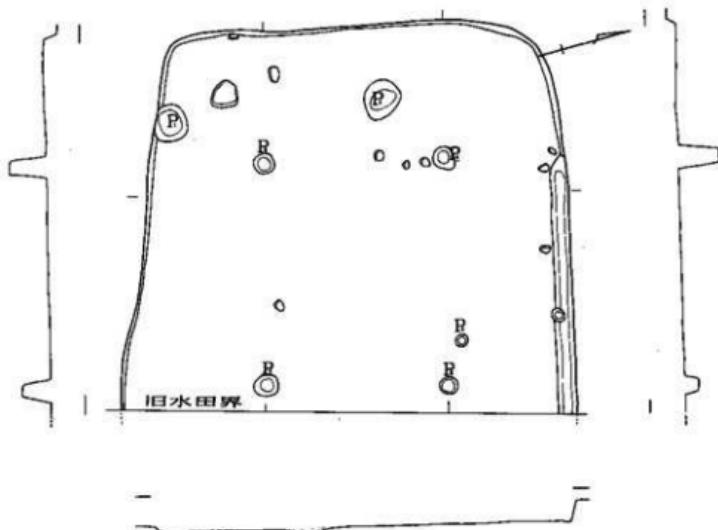
時期は奈良・平安IV~V期に属する。



第452図 第9号住居址実測図 (S = 1/80)



第453図 第9号住居址出土遺物 (1/3)



第454図 第10号住居址実測図 (S = 1/80)

⑤ 第10号住居址 (第454・455図)

遺構 本住居址は第1号住居址の北東にあり、東は調査区域外で未調査となっている。また東側は第13号住居址の上に全面貼床している。

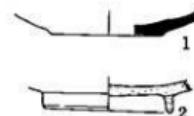
プランは隅丸形で東に行くに従い拡がりをみせ、台形状となるものである。規模は東西は不明であるが柱穴の関係からみるとかなり大きなものと考えられる。南北は東側現況6.5m、西側で5.5mである。北側には周溝がみられる。

壁高は北側で30cm、西では15cm、南は5cmとわずかである。床面は全体に固く堅緻である。

カマドは調査区内からは検出されていない。多分東壁に造られるものと思われる。主柱穴は4本である。

遺物 遺物は少ない。土師は壊の小片があるのみである。図示したもの以外、須恵は甕の破片灰軸では壊の破片がみられる。

縄物用鍬石6点の外に打製石斧3、磨製角石斧1点が出土している。



第455図 第10号住居址
出土遺物(1/3)

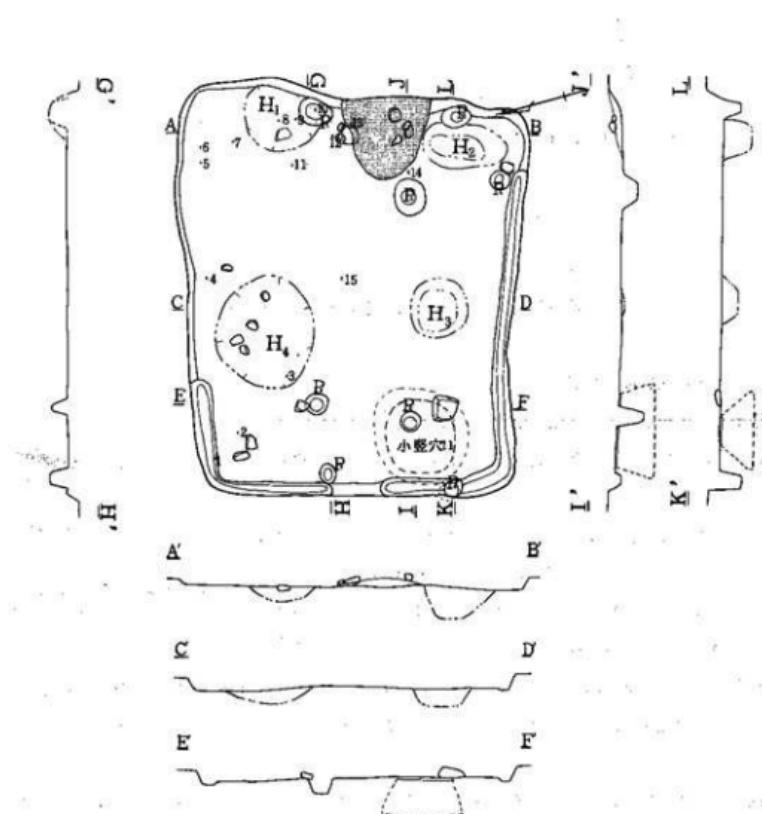
時期は遺物が少なく決め難いが、奈良・平安V期に属するであろう。

⑥ 第14号住居址（第456・457図）

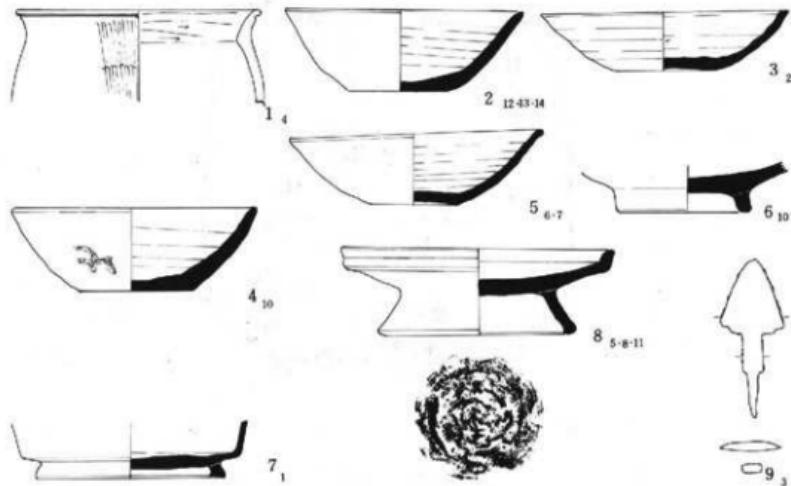
遺構 本住居址は第1号住居址の北西に位置し、北西には第22号住居址がある。南西隅には第1号小堅穴があり貼床をしている。

プランは西側がやや狭くなる隅丸長方形である。規模は東西5.6m、南北方向東側5.0m、東側で4.5mを測る。

壁高は20cm前後で床面は堅ぎわが凹くなり軟弱である。中央部は固く堅緻である。



第456図 第14号住居址実測図 (S = 1 / 80)



第457図 第14号住居址出土遺物（1/3）

カマドは東壁やや南に偏しており、くずれている。主柱穴はP₁、P₂、P₆、P₇の4本と考えられ、すべてが壁ぎわに寄っている。P₅、P₈は上層構造上注目される。

遺物はカマドの左側と北西側に集中してみられる。

遺物 土器は量の割に図示できるものが多い。

図示以外のものでは、土師の長胴壺がある。他に須恵の甕がある。6は砂粒が多量に含まれ露出してザラザラしている。下伊那の窯で焼かれたものである。

4の須恵環にはうすくかすれながら墨書が体部外面にみられる。「北」を判読できる。

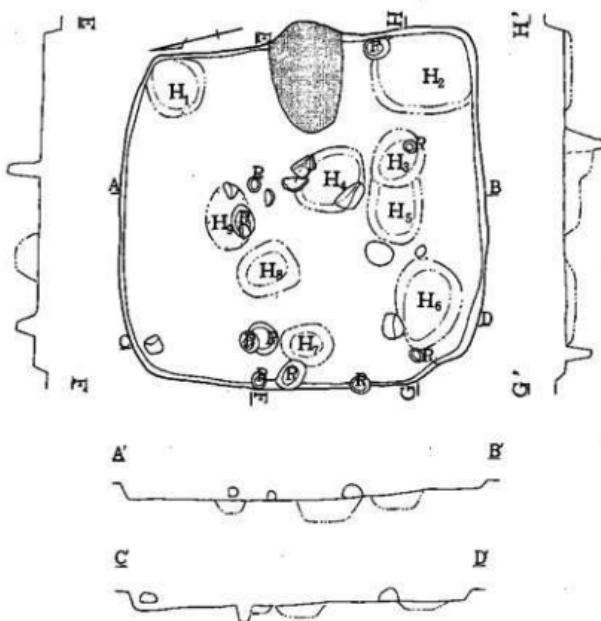
8は須恵の盤である。

第456図で示した位置番号の中で9は編物用錐石、15は須恵の甕の破片である。

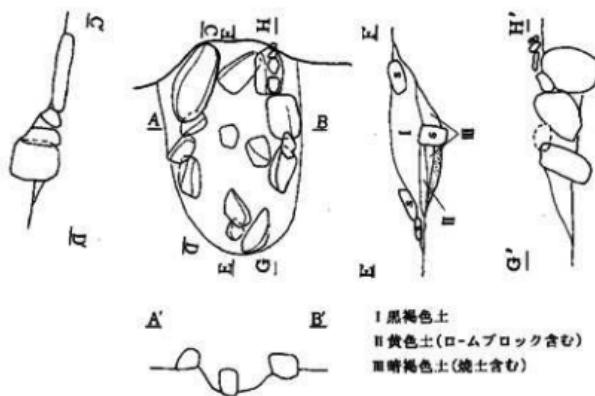
鉄器は9の鉄鋤が1点ある。

編物用錐石が2点出土している。

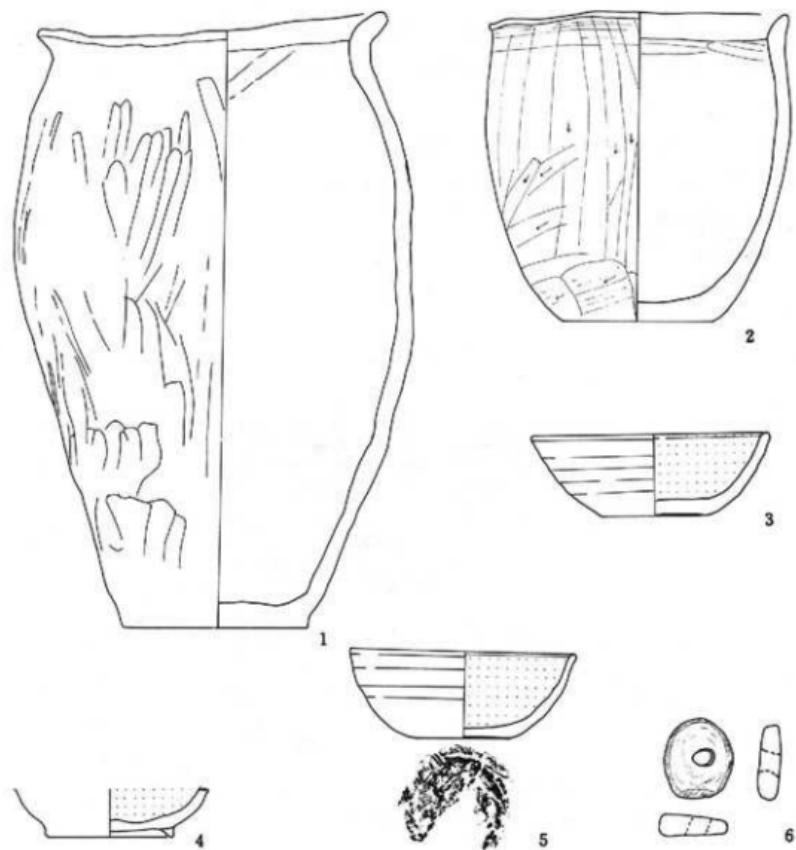
時期は奈良・平安II～III期に属する。



第458図 第17号住居址実測図 (S = 1/80)



第459図 第17号住居址カマド実測図 (S = 1/40)



第460図 第17号住居址出土遺物（1/3）

⑦ 第17号住居址（第458～460図）

遺構 本住居址は第22号・41号住居址の北西に位置している。

プランは隅丸方形で規模は $5.0 \times 5.2\text{m}$ を測る。主軸方向はS-78°-Eである。

壁高は北東で30cm、南西に行くに従い低くなり15cmほどである。床面は北に傾き全体に軟弱である。

灰だまりが多く掘られている。カマドは東壁中央に造られている。袖石がしっかりと組まれている。支脚石が残されている。

主柱穴は内部の4本なのか、壁ぎわのP₁、P₄、P₅がそうなのかはっきりしない。

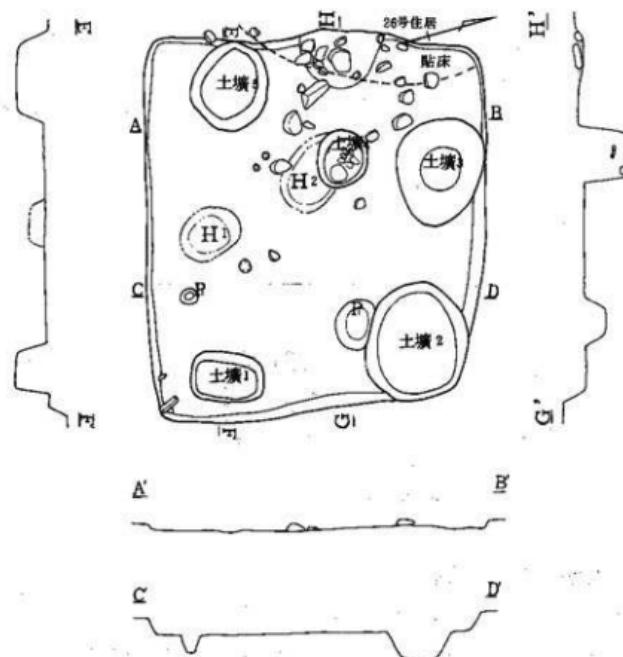
遺物 土器は図示したもの以外、須恵の甕・壺、灰釉の壺がわずかに出土するのみで、土師が主体である。

土師の壺は内面黒色処理されるが研磨は顕著でない。

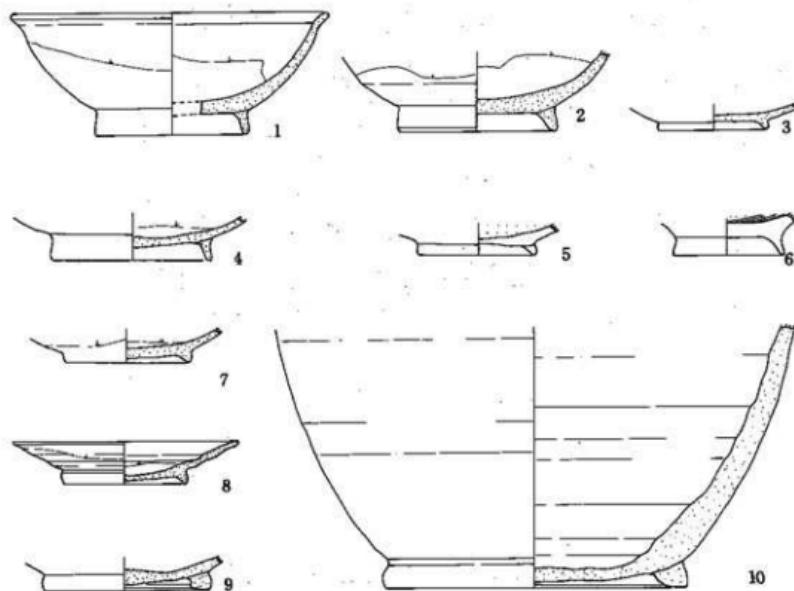
6は安岩製の環石である。孔は斜めに両側からあけられている。

石器は磨製石礫の半折が1点出土している。

時期は奈良・平安IV期である。



第461図 第19号住居址実測図 (S = 1/80)



第462図 第19号住居址出土遺物（1/3）

⑧ 第19号住居址（第461・462図）

遺構 本住居址は第22号・41号住居址の北東に位置し、西は第26号住居址に貼床したカマドを造っている。

プランは北壁が短くなるが基本的には隅丸方形を呈すものである。規模は南壁5.4m、北壁5.0m、南北方向4.8mを測る。主軸方向はN-75°-Wである。土壤が5基据られている。

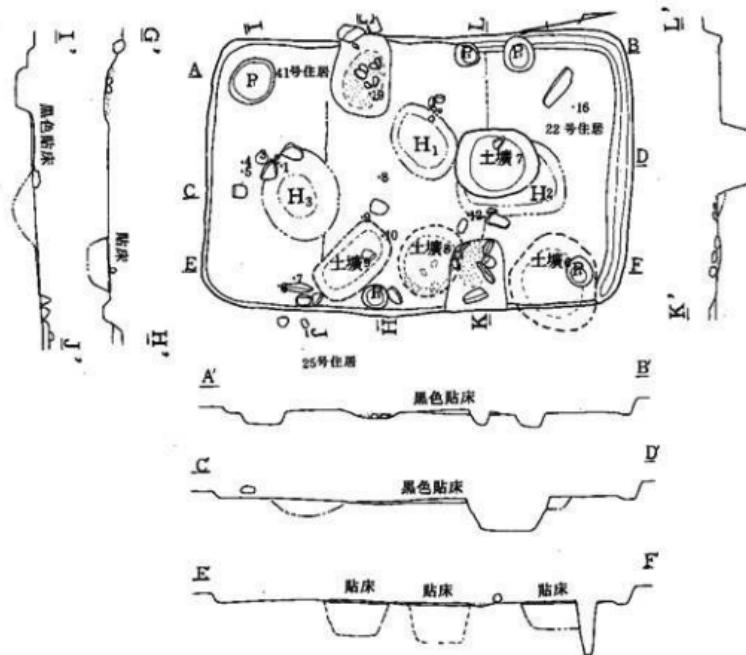
壁高は東側は25cm、南西側では10cm前後である。床面は全体に軟弱である。

カマドは西壁中央に造られている。くずれて焼土を残すのみである。カマド手前床面上には礫が多くみられる。

遺物 灰釉が主体で土器は5、6の壺以外に小形甕と壺が2個体ずつ、須恵は甕2個体の破片のみである。

編物用錐石1、轍打器2、磨製始刀石斧1点が出土している。

時期は奈良・平安VI期である。



第463図 第22号・41号住居址実測図 (S = 1/80)

⑤ 第22号・41号住居址 (第463・464図)

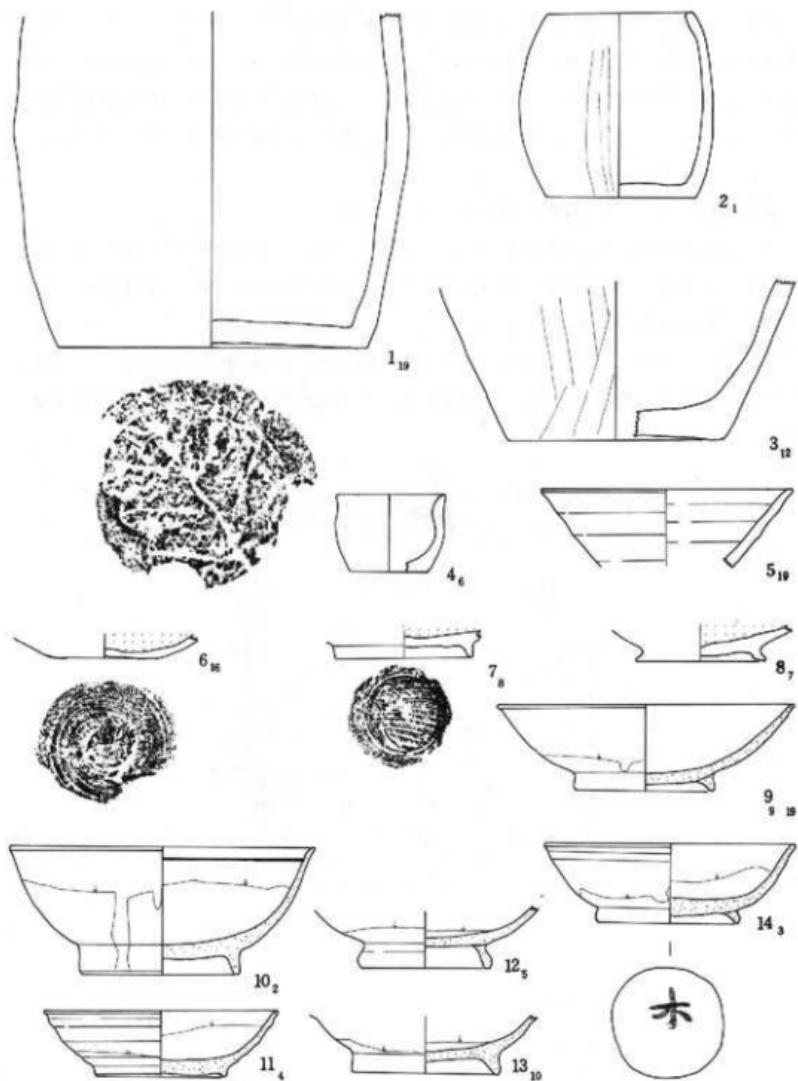
遺構 本住居址は第14号住居址の北西に検出されたものである。

南北6.0m、北西4.0mの隅丸長方形でカマドを西と東に持つ家として調査していたが、土壤、灰だまりを掘り下げていると、中央部分が5cmほどに黒色土がはげることがわかり、黒色土の貼床の存在から2軒の住居址と断定したものである。

東にカマドを持つ家を第22号住居址、西のものを第41号住居とした。カマドが中央にあると仮定すれば第18号住居址は4×4m、第41号住居址も4×4mほぼ同規模の隅丸方形と考えられる。

灰だまりや土壤がありはっきりとした床面差がみられず重複関係は不明である。そのため一括して報告することとする。

壁高は北で20cm、南で10cmである。第18号住居址には北から西にL字形に周溝がみられる。カマドは両住居址ともくずれている。



第464図 第22号・41号住居址出土遺物 (1 / 3)

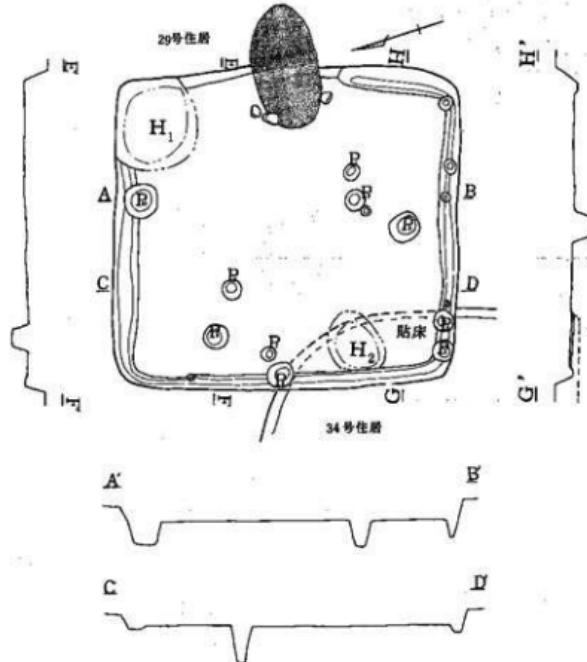
柱穴は5本が検出されているが組合せははっきりしない。

南側中央部から土師の甕（第464図-2）、灰釉の壺（10～12、14）が出土している。さらに中央部より土師の壺（8）、灰釉の壺（9、13）、土壇9南東壁ぎわより土師の小形甕（4）、灰釉の壺（13）、第18号住居址のカマド前より土師の甕（3）、北西隅より土師の壺（6）が検出されている。第41号住居址のカマドからは土師の壺（5）、甕（1）、灰釉の壺（9）が出土している。9の壺は接合資料である。

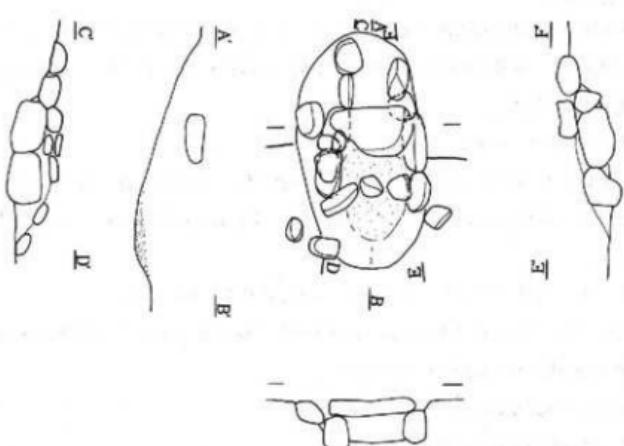
遺物 遺物は多い。須恵は甕の破片があるのみである。

6、7は土師の壺で内面黒色処理される。6は回転ヘラ切り、7は静止糸切り技法を持つもので、他のものに比べて古い時期に属するものである。14の底外面には「木」の墨書きがある。敲打器2、打製石斧1点が出土している。

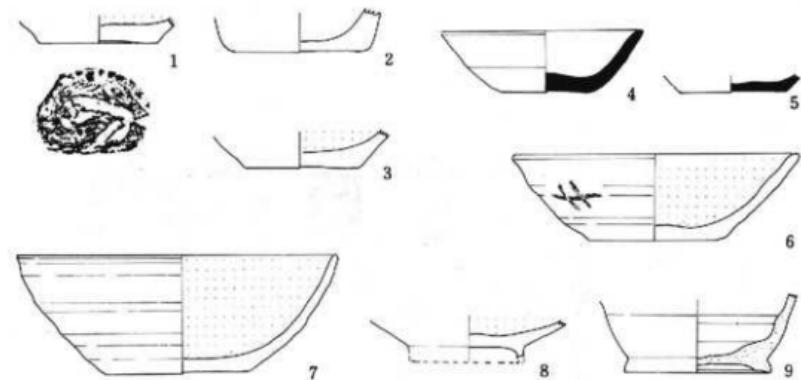
時期は6、7を別にすればおおむね奈良・平安VI期に属し、遺物の出土状況からして、第41号住居に所属するものと思われる。古い様相を持つ6、7を第22号住居址とすれば奈良・平安I期であろう。



第465図 第30号住居址実測図 (S = 1/80)



第466図 第30号住居址カマド実測図 ($S = 1/40$)



第467図 第30号住居址出土遺物 (1/3)

⑩ 第30号住居址 (第465~467図)

遺構 本住居址は第19号住居址の北に検出されている。南西部は第34号住居址に貼床している。

プランは隅丸方形で規模 $4.9 \times 4.6\text{m}$ を測る。主軸方向はN- 21° -Eである。壁高は $25\sim 30\text{cm}$ を測る。周溝がほぼ一周する。

床面はほぼ平坦で固く堅緻である。

カマドは東壁中央に造られており、煙道部まで完全に残り、良好な残存状態で検出されている。全長 170cm を測り、袖石はしっかりとした石組がされ、支脚石、天井石も残っている。封土はロームである。

主柱はP₂、P₃の2本が考えられるが、他にも多くの柱穴がみられる。

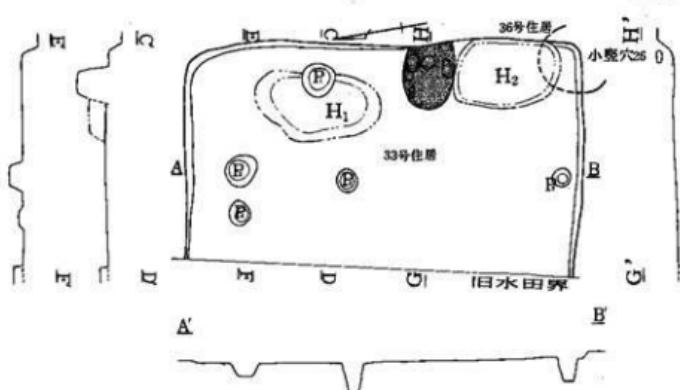
遺物 土師の甕、壺が主体である。図示以外須恵では他に甕の破片、灰釉は壺がある。

土師の甕は長胴甕でハケ目を持つものである。

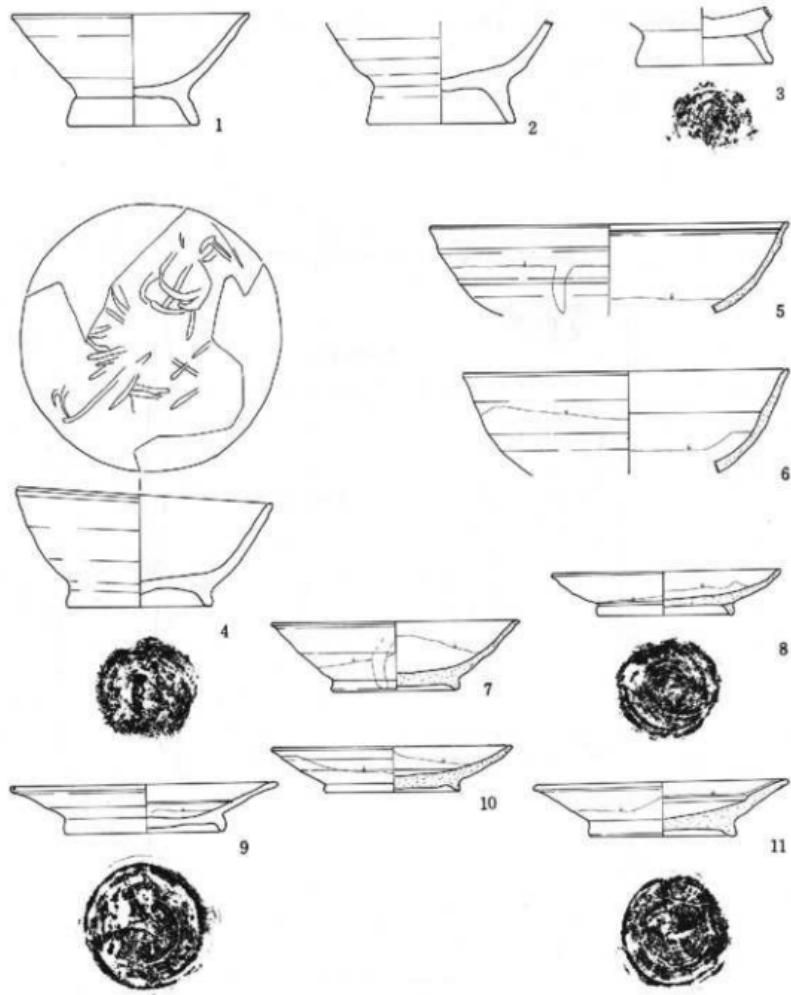
6の土師の壺の体部外面には「+」の墨書がある。

打製石斧・敲打器が1点ずつ出土している。

時期は奈良・平安IV~V期である。



第468図 第33号住居址実測図 (S = 1/80)



第469図 第33号住居址出土遺物（1/3）

⑪ 第33号住居址（第468・469図）

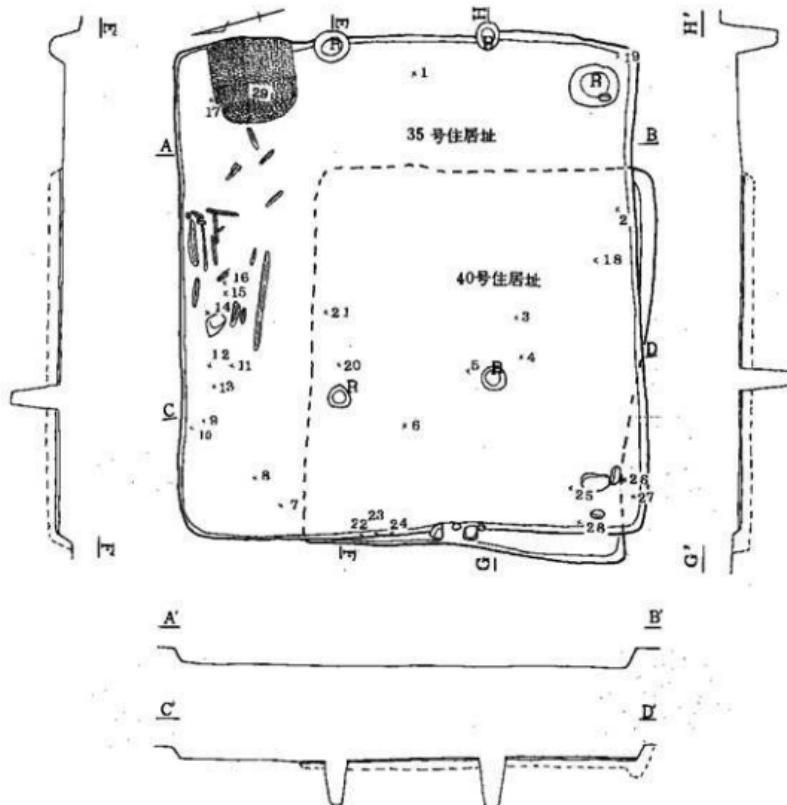
遺構 本住居址は第30号住居址の北に位置している。西側は開田時に削られている。

プランは不明で、規模は南北5.6m東西は不明である。壁高は東で20cm前後を測る。

床面は固く堅緻である。カマドは東壁中央よりやや南に造られており、焼土を残すのみである。

主柱穴はP₂, P₅の2本が検出されている。

遺物はカマドの両脇と灰だまりから出土している。



第470図 第35号住居址実測図 (S = 1/80)

遺物 調査面積の割には土器が多い。土師と灰釉が出土しており、須恵は出土していない。

図示以外には土師の甕が3個ほどある。ともにハケ目調整のものである。

土師の甕は足高高台を持つものが多く内面が黒色処理されるものは少ない。

打製石斧、磨製定角石斧、敲打器が1点ずつ出土している。

時期は奈良・平安VI期である。

⑫ 第35号住居址（第470～473図）

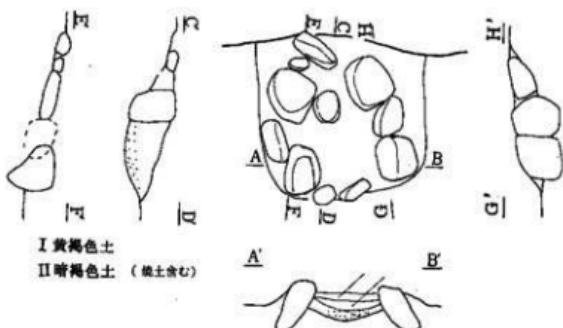
遺構 本住居址は第22号住居址の北に検出されている。住居址の南西部は壁をわずかにずらして第40号住居址があり貼床している。貼床はロームをうすく敷きタタキを加えている。

プランは隅丸方形で規模は7.0×6.6mを測る。長軸方向はN-74°-Wである。壁高は20cm前後を測る。北側床面上に炭化材が検出されており焼失家屋である。

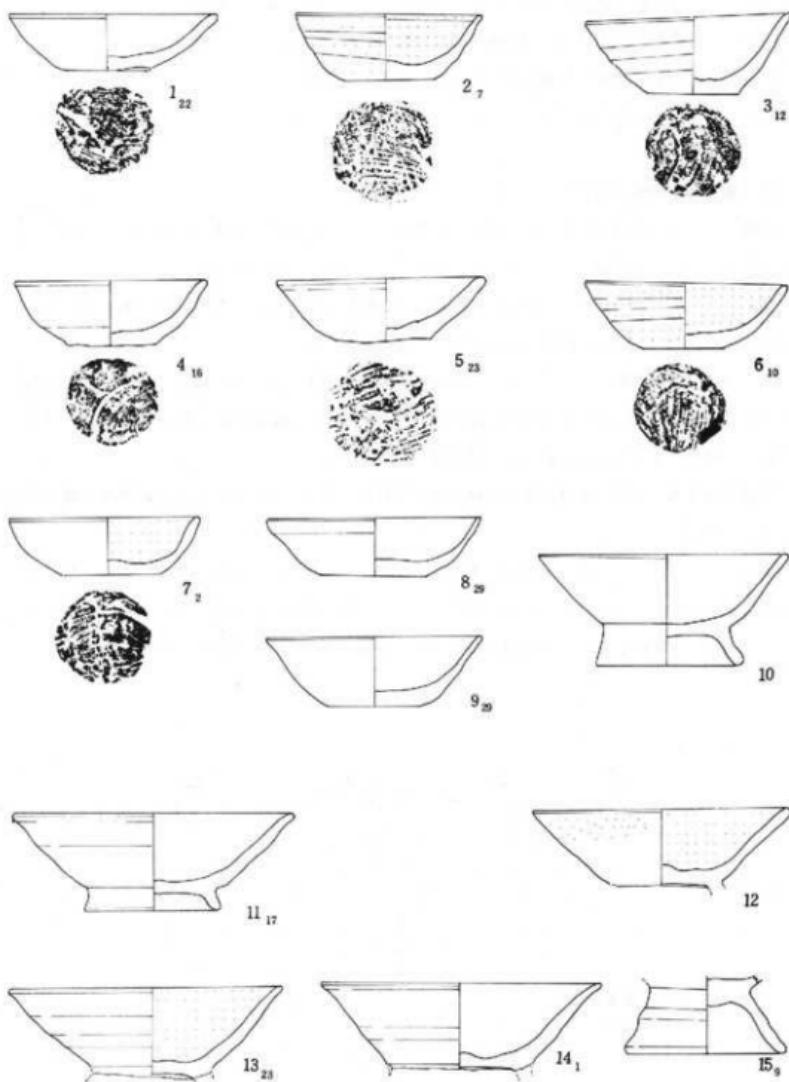
カマドは東壁北に偏している。カマドの位置は隅に近いが、隅に造られるものが焚口を中心部に向けるのに反し壁に対している点異なるものである。奥行120cmを測り良好な残存状態である。支脚石は残るが天井石はみられない。封土はロームである。

主柱穴は4本である。本址はカマド側の2本が壁にくるもので、反目・本遺跡含めて例を見ないものである。

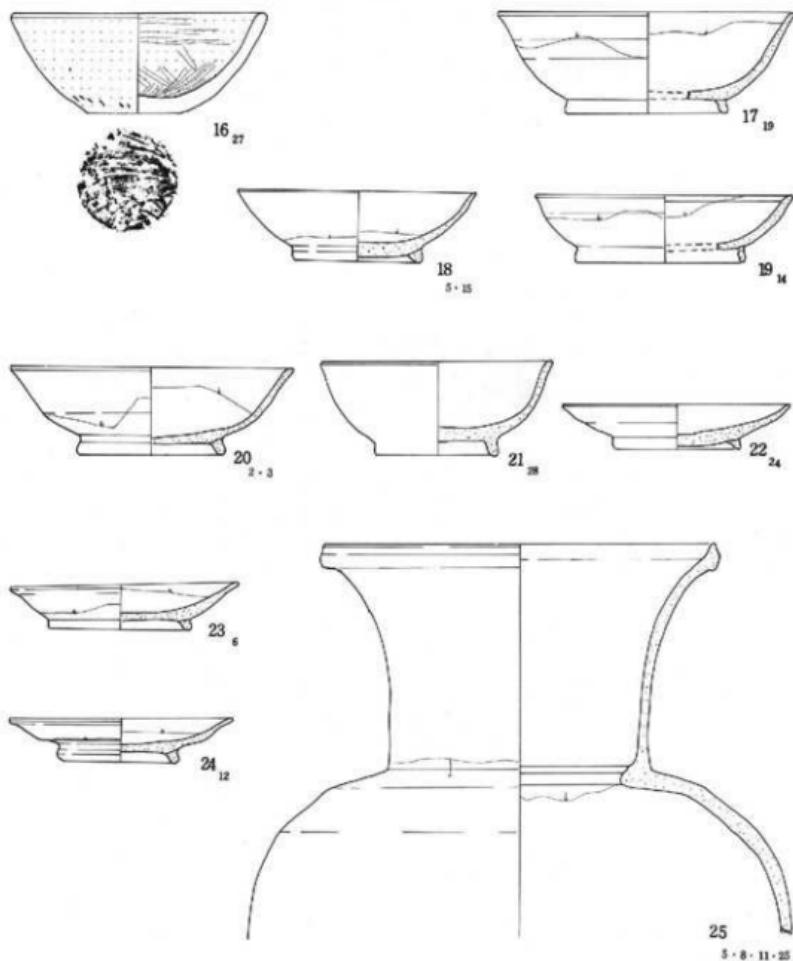
遺物は多く出土している。北西部の壁ぎわに集中、さらに南西隅に多く出土している。23の地点からは第472図-5・13が入子となって出土している。出土状態は上を向くものが多く壁から落ちたというより床面におかれていた可能性が強い。綠釉の壺(21)が南西隅から割れた状態で、22



第471図 第35号住居址カマド実測図 (S = 1/40)



第472図 第35号住居址出土遺物（1 / 3）



第473圖 第35號住居址出土遺物（1/3）

の縁軸の皿が中央西壁ぎわから出土している。

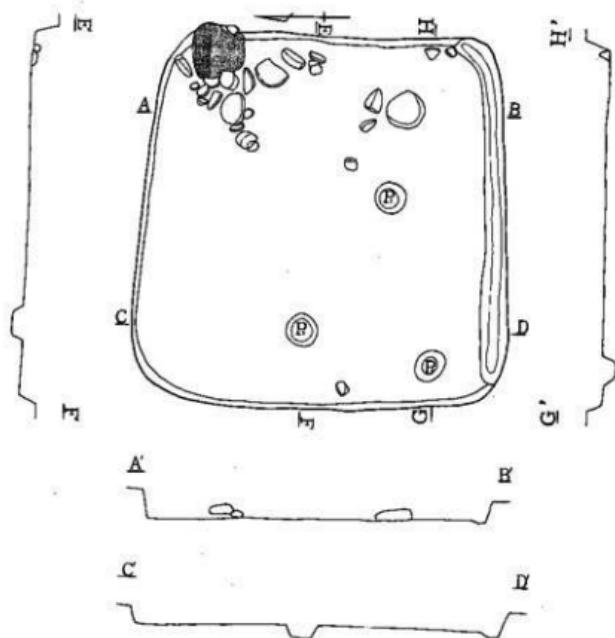
遺物 すでに述べたように遺物は極めて多く出土している。土師の壺は1個体みられるのみである。須恵は壺が少量みられる。

土師の壺、壺はロクロ成形痕を内面底に良く残している。

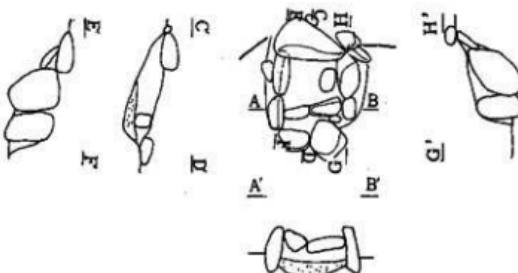
21の縁軸の壺は割れており、片側は火事の2次焼成によって釉がはげ落ちている。

敲打器1点が出土している。

時期は奈良・平安V～VI期に属する。



第474図 第37号住居址実測図 (S = 1/80)



第475図 第37号住居址カマド実測図 ($S = 1/40$)

⑬ 第37号住居址 (第474~476図)

遺構 本住居址は第35号・40号住居址の北にあり、第38号住居址が北に近接する。

プランは西側が広くなるが一応隅丸方形である。規模は東西方向5.3m、東壁4.8m、西壁5.3mを測る。

壁高は北東部で40cm、南西部は20cmである。周溝は南側にみられる。床面は全体に固く堅緻である。

カマドは東壁、北東隅による。焚口方向は第35号住居址と同じで壁に対している。奥行1mを測り、残存状態は極めて良い。

天井石を前と後の2箇所に持っている。封土はロームである。

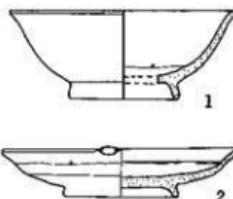
柱穴は3本検出されているが主柱穴がどれかは定かでない。

遺物 土器は少ない。灰釉の外には、土師と須恵が斐が少量出土しているのみである。

灰釉は図示した壺(1)と輪花折縁皿(2)の外に壺3個体、段皿1個体が出土している。

打製石斧5、敲打器2、磨製定角石斧・磨石各1点が出土している。

時期は奈良・平安V~VI期に属する。



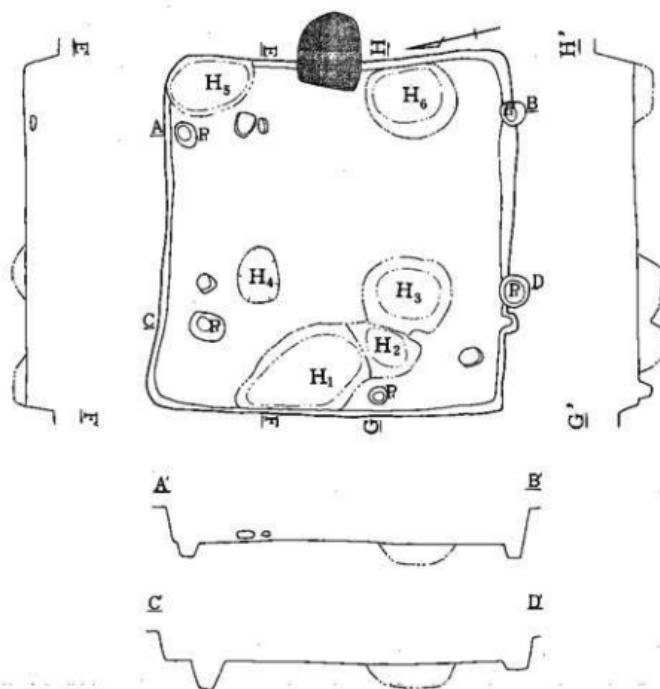
第476図 第37号住居址出土
遺物 (1/3)

⑭ 第38号住居址

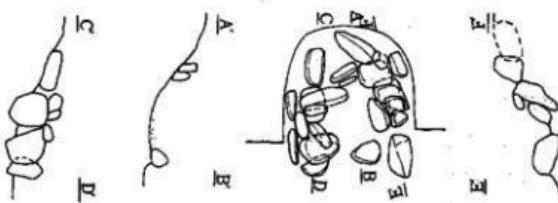
遺構 本住居址は第37号住居址の北に検出されたものである。

プランは隅丸方形で規模は5.0×5.0mを測る。主軸方向はN-77°-Wである。

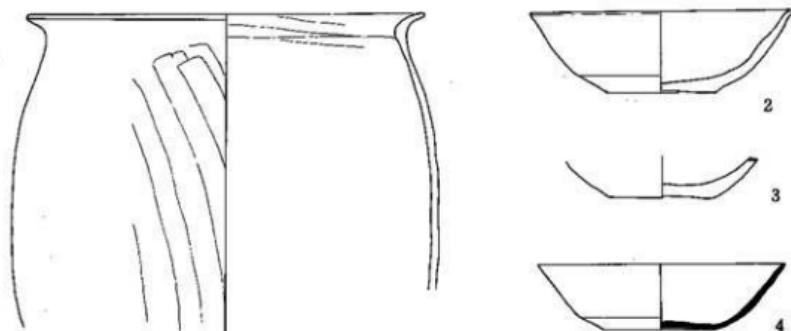
壁高は50cm前後で床面は南にやや傾いている。全面に良くタタキが行われ、堅緻である。カマドの両脇と東壁には灰だまりが掘られている。



第477図 第38号住居址実測図 (S = 1/80)



第478図 第38号住居址カマド実測図 (S = 1/80)



第479図 第38号住居址出土遺物（1/3）

カマドは東壁中央にあり壁を削って造っている。残存状態は良いが天井石、支脚はみられない。封土はロームである。

主柱穴は4本であるが、カマドに対する壁でない南壁ぎわに2本掘られており例をみないものである。

遺物 土器は少なく灰釉はまったく出土していない。図示したもの以外では須恵の壺がある。

打製石斧3、敲打器・石錐各1点が出土している。

時期は奈良・平安Ⅲ期に属する。

⑯ 第40号住居址（第480・481図）

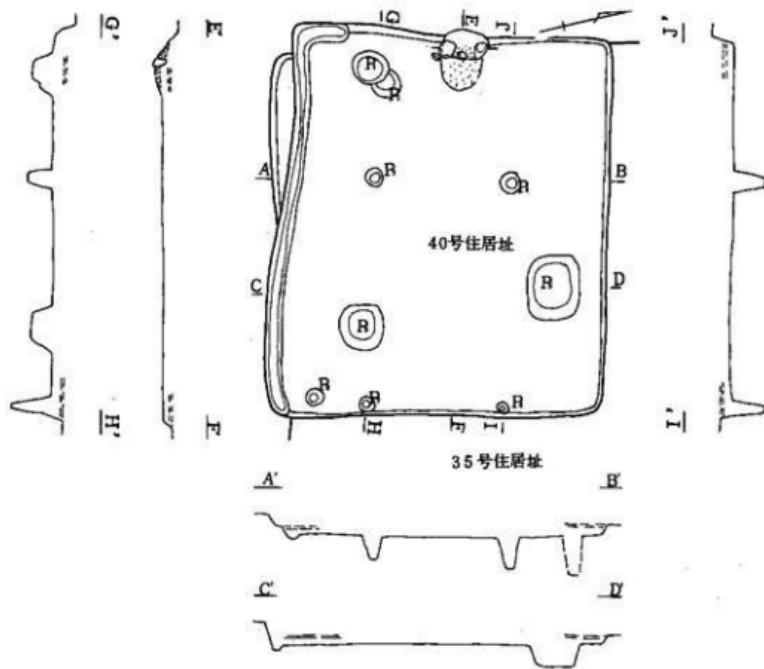
遺構 本住居址は第35号住居址の南西部貼床下に検出されたものである。

プランは隅丸方形で規模 $5.2 \times 4.8m$ を測る。長軸方向はN-76°-Wである。壁高は南で30cmを測り、第35号住居址との床面は10cmである。床面は固く堅緻である。

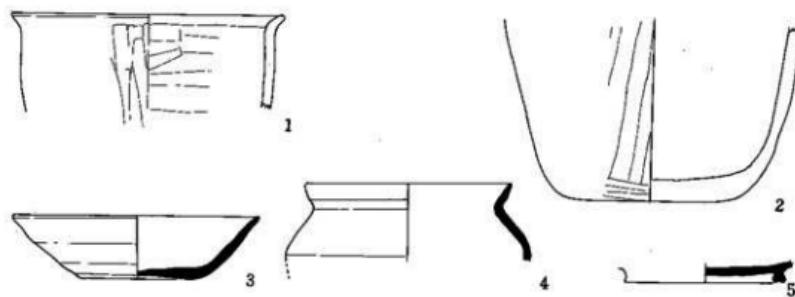
カマドは西壁中央に造られずれて焼土を残すのみである。主柱穴はP₃、P₄、P₆、P₇の4本である。

遺物 遺物は少ない。図示したもの以外では土師の壺がある。

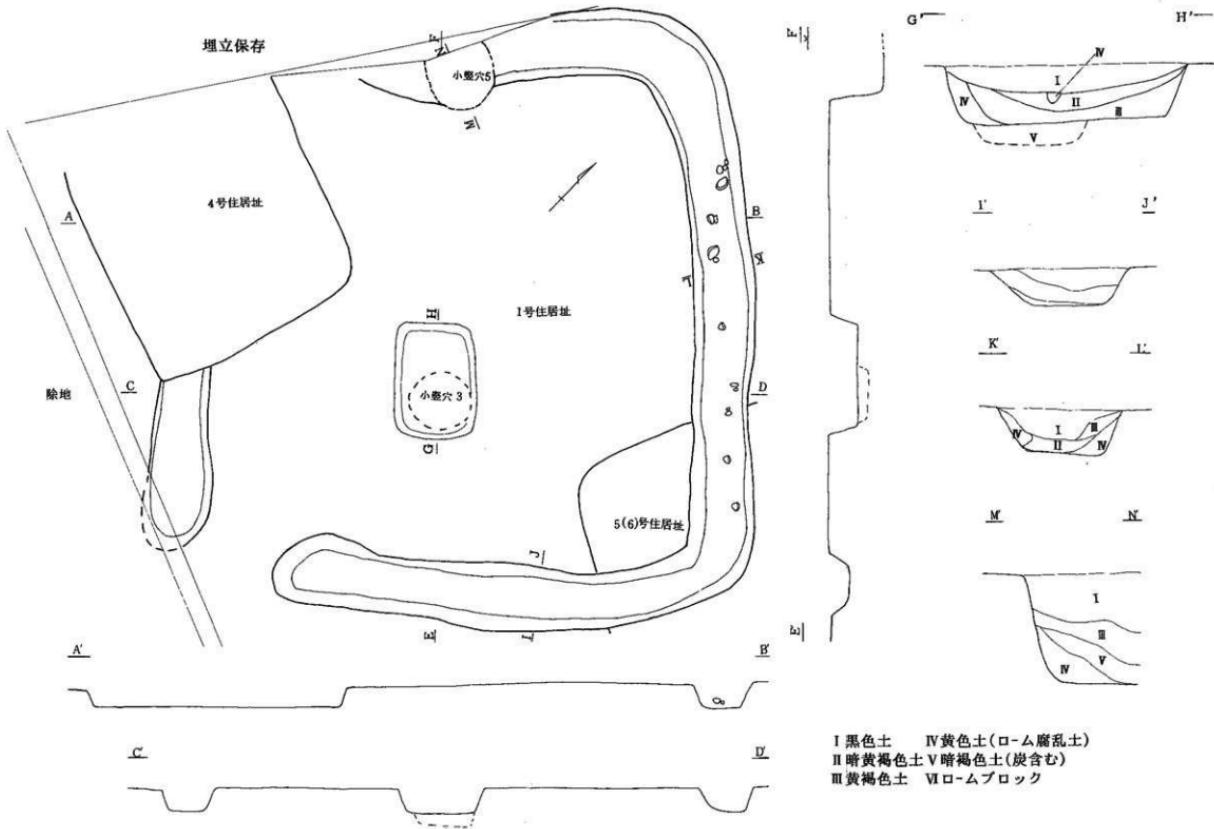
時期は奈良・平安Ⅲ期に属する。



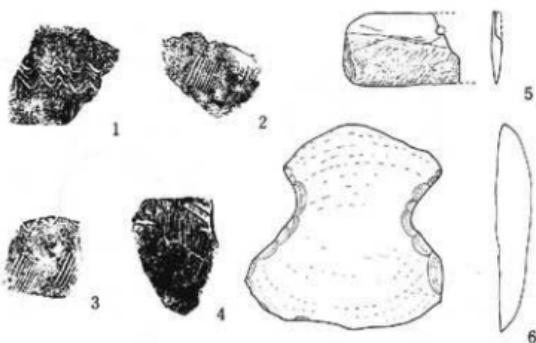
第480図 第40号住居址実測図 ($S = 1/80$)



第481図 第40号住居址出土遺物 (1/3)



第482図 第1号方形周溝墓実測図
(S = 1/80, G'-H'~M'-N'は1/40)



第483図 第1号方形周溝墓出土遺物（1/3）

2) 方形周溝墓（第482・483図）

発掘調査区の南西寄りに方形周溝墓が1基検出された。北東部は第5号、6号住居址を切り、南西部は第4号住居址に切られている。西側と南側の一部は未調査となっている。

大きさは推定 $11.9 \times 12.3\text{m}$ の方形を呈す。内側の大きさは $9.8 \times 9.6\text{m}$ を測る。コーナ部は丸味を持つ。開口部は南隅にある。

溝は上幅 $1.2 \sim 1.4\text{m}$ で底幅は $70 \sim 90\text{cm}$ 断面はU字状を呈する。覆土は黒色土が厚く落ち込んでいる。

主体部は中央南東寄りにあり、 $2.3 \times 1.6\text{m}$ の長方形を呈す。深さは 55cm を測る。内部には小堅穴3がある。内部より弥生後期の土器がわずかに出土しているのみである。

遺物は少ない。土器は弥生後期の破片のみで器形を知り得るものはない。

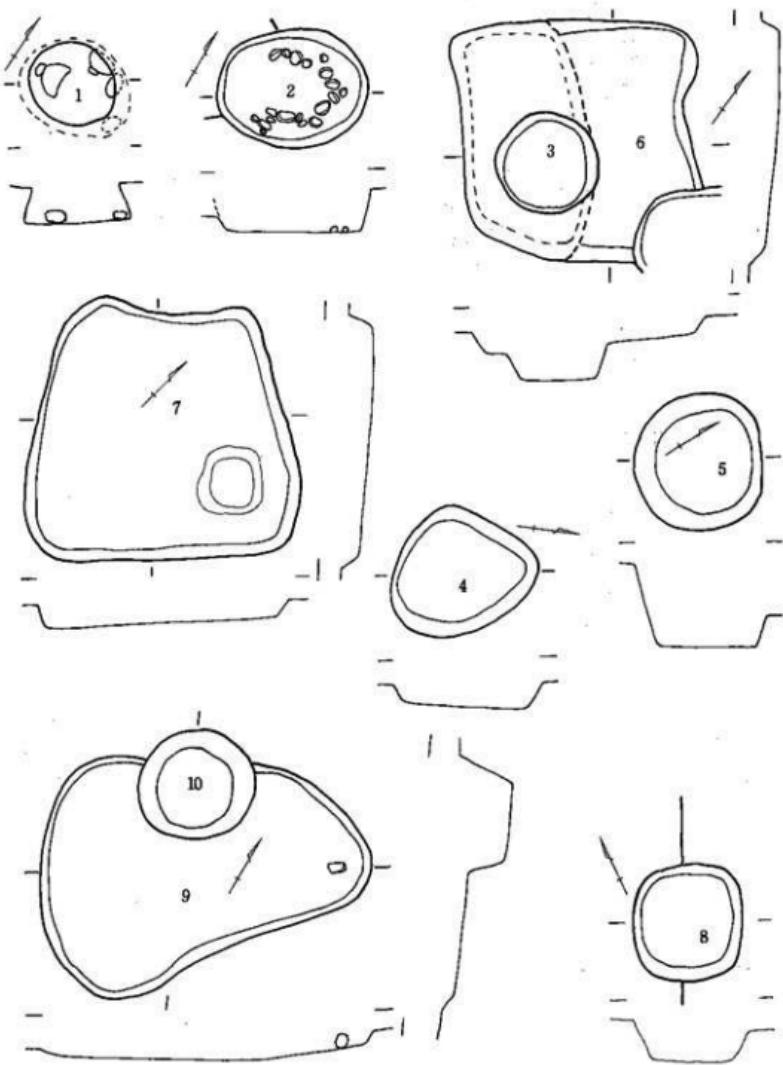
石器は半折の石包丁（5）と有肩石斧（6）が1点ずつ出土している。

3) 小堅穴址（第484～487図）

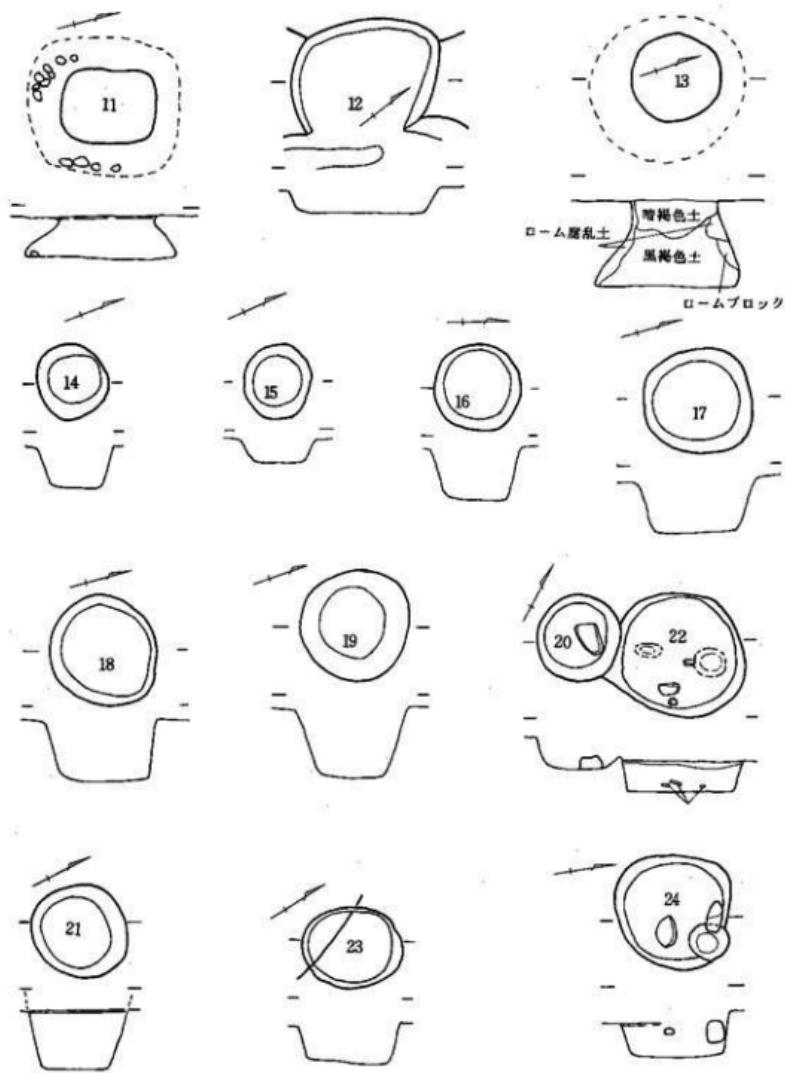
遺構 住居址の外に円形・椭円形等の堅穴址が検出されている。当遺跡では、縄文早期から前期にかけてのものを小堅穴址、奈良・平安時代のものを土塘と区別して報告することとする。

小堅穴址は一覧表に示すとおり24基検出されおり、南西部にみられ、縄文時代前期の集落立地と符号している。

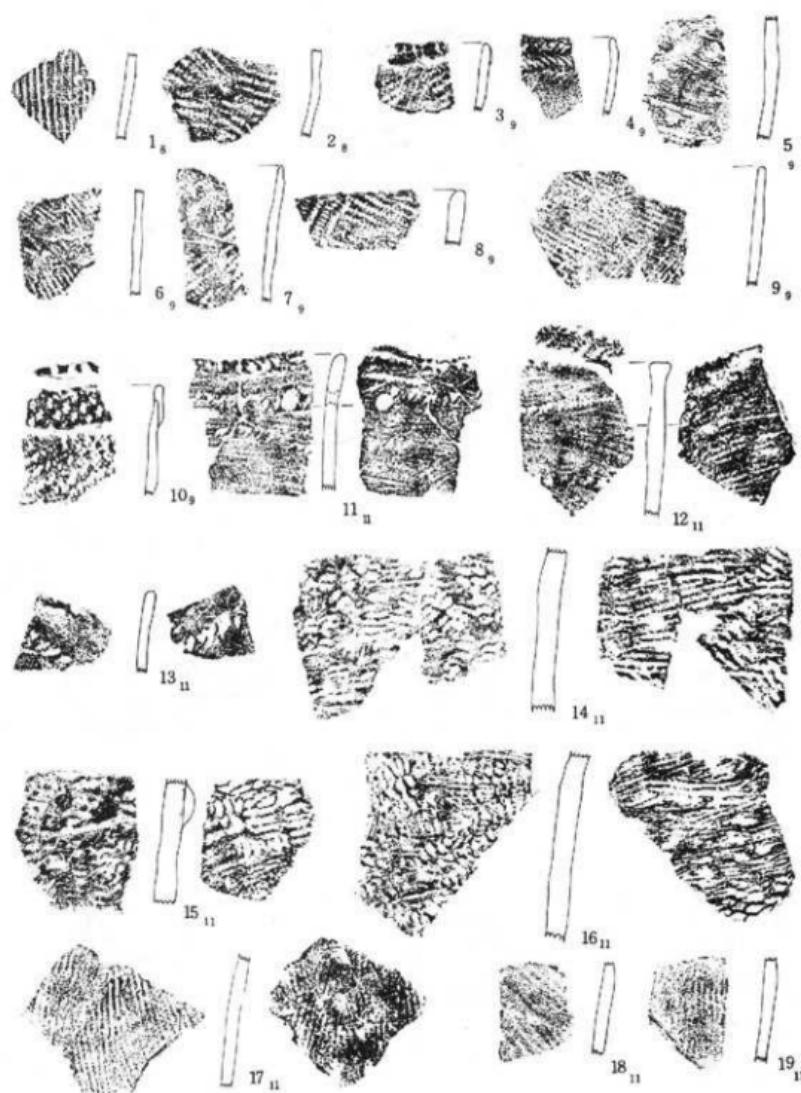
プランは、円形に近いものが多く、三角形状（4・9）、台形（7）のものもあり、これらは浅



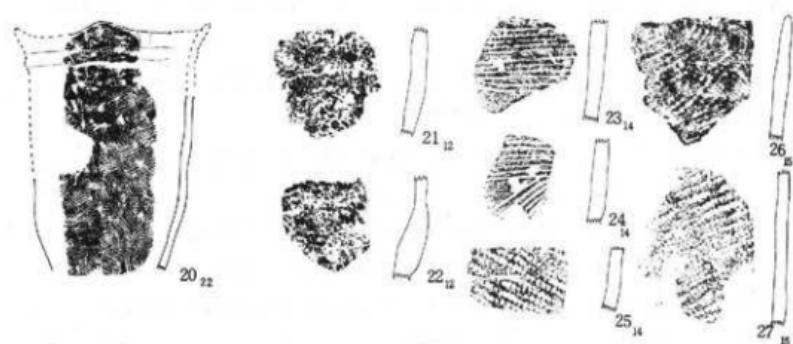
第484図 小竪穴址実測図 ($S = 1/60$)



第485図 小堅穴址実測図 ($S = 1/60$)



第486図 小竪穴址出土遺物 (S = 1 / 3)



第487図 小豎穴址出土遺物 (1/3)

小豎穴址一覧表

番号	平面形	断面形	規模 cm	深さ cm	遺物等	番号	平面形	断面形	規模	深さ	遺物
1	円形	袋状	90×85	40	底に石あり III類細片小量	13	円形	袋状	95×90	92	II類細片わずか
2	椭円形	タライ状	160×125	44	底に小礫の集石 VII類細片小量	14	円形	ドラム缶	80×75	45	VI・VII類
3	円形	ドラム缶	110×110	55	方形頭撲主体部に施 される。皿細片わずか	15	円形	タライ状	78×70	22	VII類主体、III-d類もある
4	三角形	皿形	155×140	15	II類細片わずか	16	円形	ドラム缶	95×90	58	VII類
5	円形	ドラム缶	143×138	88	III類わずか	17	円形	ドラム缶	115×112	52	III・VII類
6	不明	皿形	248×?	20	3との重複關係不明 方形頭撲主部に施される	18	不整円形	ドラム缶	118×115	68	III・VII類 中期・土師も混在
7	台形	皿形	295×282 (213)	33	I・II類細片の み	19	円形	ドラム缶	118×115	72	III・VII類 中期も混在する
8	隅丸方形	タライ状	122×118	42	II・VII類	20	円形	タライ状	90×90	40	底に自然石あり III類細片わずか
9	三角形	皿状	350×240	20	I, III, IV, V, VI類 II類わずか、質變多	21	円形	ドラム缶	110×96	85	I類
10	円形	タライ	125×115	55	III-, VII類	22	円形	タライ状	145×130	55	II類半完形品
11	隅丸長方形	袋状	100×75	45	底に小礫あり I, II類、大形破片あり	23	椭円形	タライ状	108×86	42	II類細片わずか
12	椭円形	タライ (?)	155×130	38	II-, III-, VII類 類主体	24	隅丸方形	ドラム缶	120×120	50	I, II類 覆土中に礫あり

いものである。

断面形は袋状となるもの(1, 11, 13号)もみられる。内部に小礫が集中するもの(2, 11号)、礫が底に見られるもの(1号)もあり性格上他と違う可能性もある。

22号を除き土器は破片が覆土中より散在状態で出土している。22号からは底面よりやや浮いて、深鉢が横倒しの状態で出土している。

遺物 各遺構からの土器の出土状況は一覧表に示してある。以下拓影・図化できる代表的なものについてふれることとする。

1・2は第8号出土のものである。1はわずかに胎土に纖維を混入し貝殻条痕がみられる。内面は擦痕が施される。第II類である。2は第VII類。

3~10は第9号から出土するものである。4は第III-C類、3、10は神の木式である。5は黒褐色堅敏、表裏面に擦痕あり第IV類であろう。6~9は第VII類である。

11~19は第11号出土のものである。11~13は暗褐色ないし黒褐色を呈し堅敏に焼かれている。胎土には纖維をわずかに混入する。11、12は表裏面に条痕を持ち、口唇に刻みと口唇下に爪形文を持つ。13は外外面に擦痕があり刺突により爪形文を施す。11~13は東海地方粕畠式土器である。

14~16は同一個体と考えられる。厚手で纖維を束状に混入する。胎土には長石細粒を含み暗褐色固く焼かれる。表裏面とも地文は条痕である。14は貝殻条痕と思えるが、16は貝殻条痕の上に絡状体条痕を重ねたものと考えられる。地文の上に絡状体圧痕文を施文するものである。15は隆帯を持ち絡状体圧痕が施されている。絡状体圧痕を持つ土器は近年多く資料がみられるようになりその編年研究も盛んに行われてきており、縄文前期初頭まで時期が下ることが知られている。

当資料に類似するものは、近くでは、箕輪町萱野遺跡例が著明でやはり隆帯が施されおり、萱野遺跡では子母口式土器と報告されている。

18・19は中厚手黒褐色堅敏でわずかに纖維を混入している。内外面とも貝殻条痕が施される。

第11号小堅穴址からは以上3種の土器のみであり、4~19は11~13の粕畠式に併行するものである。

21・22は第12号出土のもので、胎土中に多量に纖維を混入し、黄褐色を呈す。本址よりは他に第III類VII類が共存する。

23~25は第14号出土のものである。23・24は竹管による平行沈線を持ち有尾式土器である。

26・27は第15号出土の第VII類土器である。

20は第22号出土のもので、小堅穴址出土のものでは唯一器形を知り得るものである。口縁は約半分、胴部はほぼ周るが、底部を欠損する。多分尖底と思われる。口径20.5cmを測り、器厚6~8mmである。器内外面はナデがみられ、胎土には纖維を混入する。長石を含み上部黒褐色、下部明褐色堅敏に焼かれる。

口縁はゆるい山形状突起を4箇所に持ち、口唇下に横走する隆帯が施される。口唇から隆帯下直下には絡状体圧痕文が施される。そのため隆帯はねじれ状となっている。下部は撚糸文が施文される。

長門町平沢遺跡出土例（児玉卓文1989）が器形・施文とも非常に類似している。絡状体圧痕文土器はすでに述べたように縄文前期初頭までみられることが知られており、本資料はこの種の土

器の最終末に位置づけられ、花積下層式初期と考えられる。本址からは他に共伴遺物がない。

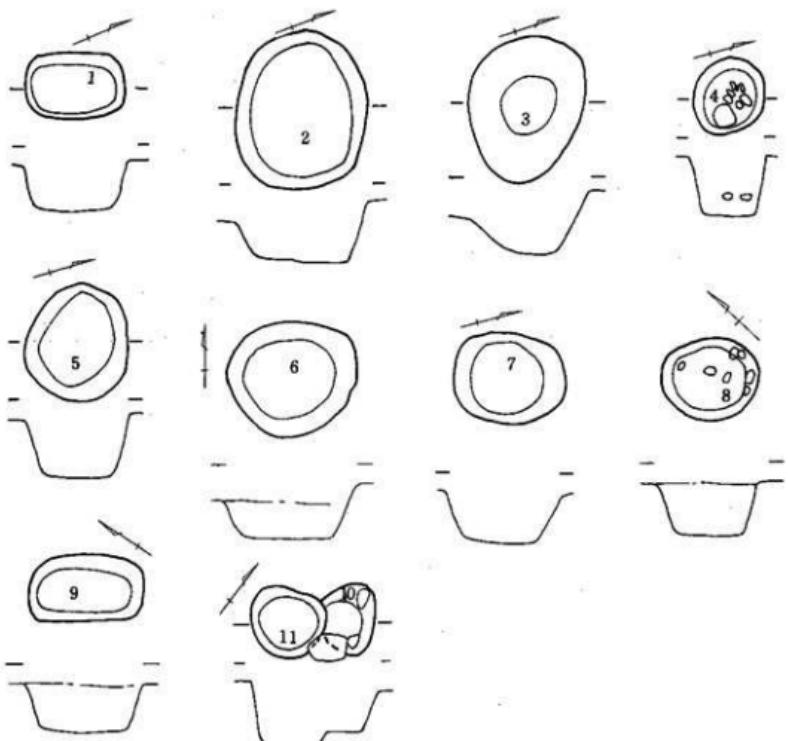
4) 土壙 (第488・489図)

遺構 奈良・平安時代の遺物を出土する土壙は11基検出されている。第19号・22号住居址内に集中している。

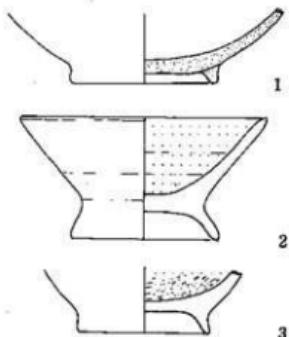
プランは円形ないし、梢円形を呈すものである。深さ40~70cmで、大部分は断面ドラム缶状をなしている。

遺物 土壙出土の土器の量は少ない。完形品の出土はみられない。図示できたものは第489図に示した

1は5号出土の灰釉壺で、口縁部を欠く破片である。



第488図 土壙実測図 (S = 1/60)



第489図 土壌出土遺物（1/3）

土壤一覧表

番号	平面形	断面形	規模cm	深さcm	遺物等
1	楕円形	ドラム缶	105×68	52	須恵環、土師環少量
2	円形	ドラム缶	168×142	62	灰釉塊、段皿、土師環
3	楕円形	薬研状	155×75	68	土師環
4	円形	ドラム缶	85×78	62	土師甕・环
5	不整円形	ドラム缶	120×110	70	灰釉塊4個分
6	円形	タライ状	140×128	58	土師環 須恵環 灰釉皿
7	楕円形	タライ状	120×98	52	土師甕
8	円形	ドラム缶	105×88	55	土師甕・环・灰釉皿
9	楕円形	タライ状	120×70	50	土師甕・环・須恵環
10	不整円形	タライ状	75 × 60 (?)	40	11号に切られる。土師甕・环
11	円形	ドラム缶	80×70	65	土師甕

2、3は8号出土の土師の环で、内面黒色処理されている。ともにつけ高台である。

1～3とも奈良・平安V～VI期の所産と考えられる。

5) 表面採集の青磁片（図版211）

造構に伴わないものである。2片とも3cm前後の少破片で、内面に画花文と櫛目文があり、外面に猫獛文様が施してある青磁である。全体が薄づくりで、現存する部分も0.3mmから0.4mmで口端部より推定するに15cm前後の茶碗の破片と考えられる。この青磁は伊那谷では余り出土しておらず、少ない遺物である。今後この跡を考る上で貴重な遺物である。13世紀頃の中国同安窯系の焼造と考えられる。

6) 表面採集の瀬戸瓶子片（図版211）

6cm×4.5cmの三角形状の破片で、厚さ1cmを計り、外面に灰釉が施されており、黄緑色と灰青色に発色しており、浅い波線で画花文が描かれている。内側は荒い仕上で無釉である。15世紀初頭頃の瀬戸産と考えられる。（木下平八郎）

5 縄文時代早期・前期の土器について

縄文時代早期・前期の土器については、各造構の中で論じてきたが、ここで改めてまとめ、若干の問題点を指摘することとする。

先述した該期の土器の区分について今一度述べておく。

第I類 縄文早期（当遺跡では押型文以降）に属するものを一括した。本類の中に格状体压痕文を持つ一群も含めてある。個々の土器型式名を述べてあるが小分類はしていない。

第II類 胎土中に纖維の混入が見られる花積下層式に比定されるものである。

第III類 広義の「薄手細線指痕文土器」を示す。型式名でいえば木島式土器、清水の上式土器を含むものである。

本類を文様施文状から a～d 類に分類した。

a 類 集合細線等によって格子目状の文様を持つもの

b 類 貝殻腹縫文を施すもの

c 類 刺突文を持つもの

d 類 縄文施文されるもの

これをさらに胎土の面から a、b の 2 種に分けてある。

a 種 胎土中に長石・石英粒・雲母を含むもの

b 種 精練された胎土を持つもの

第IV類 胎土中に長石・石英粒・雲母を含むが纖維の混入はみられない無文土器

第V類 神の木式土器に相当するもの

第VI類 有尾式土器に相当するもの

第VII類 胎土に纖維の混入がみられず、縄文施文を持つものを一括してある。大方は第V、VI 類に含まれるものである。特に特定できたものは該当するものに含めてある。

第VIII類 以上の土器に混じって出土した関西系の土器（北白川下層・羽島下層式土器）に比定されるもの。

これらの中から第III、V、VI 類の在り方について述べることとする。

1) 第III類土器

本類土器は広義の「薄手細線指痕文土器」、いわゆる「オセンベイ土器」と呼ばれる一群を一括したものである。該期の編年的研究は渋谷昌彦氏等により木島式土器の細分が意欲的に行われるとともに、知多半島においては、清水の上貝塚出土の土器を持って刻期後半の土器として清水の上式が設定される等、渾沌とした状態である。

本遺跡から出土した第III類土器はほとんどが、木島VII式以降ないし、清水の上式のものである。

出土土器は胎土に長石・石英粒、雲母を含む a 種と洗練された b 種の二者があり、明らかにその違いは色別できるものである。a 種は木島系土器、b 種は清水の上系土器として良いであろう。当遺跡においてこの両者が混在しており、そのこと自身に意味のあるもので、文化交流の証でもある。両土器型式の併行関係は今後さらに詰められる必要があるが、安易に他のものまで含めた型式設定は慎む必要がある。

本類 d 類とした清水の上貝塚出土土器に類似する縄文施文される土器については今後より一層注意して行く必要がある。

2) 第V・VI類土器

第V類神の木式土器の出土例は伊那谷においても良く知られるが、第VI類有尾式土器の発掘例は上伊那では初見と思われる。

第6号住居址出土の第VI類土器は塩尻市舅屋敷遺跡第11号住居址出土のものに類似するもので、第15号住居址の有尾式土器に比較すれば前期神の木式の影響を残したものである。神の木式から有尾式への変化を追認する好資料である。

当遺跡第III～VI類土器を主体的に出土する遺跡として、上伊那では中越遺跡が著明である。

本遺跡とは天竜川をはさんだ近距離に位置している。

「中越式土器」と呼ばれて久しいが、その実態は未だ明らかとはなっていない。とりわけ共伴遺物との関係が明確となっておらず、これが本報告においてあえて「中越式土器」の名称を用いなかった大きな理由である。

中越土器の特徴とされる土器の一つである口縁部から刻みを持った組帶が垂下する一群の土器が本当遺跡において、一片しかみられなかった点は注目したい。第IV類とした土器がその範疇に含まれると思われるが、この出土量も少ない点非常に興味のある点である。

幸いにも、本報告書と時を同じして中越遺跡の正式報告書が刊行される運びとなっている。本遺跡資料も含め再度検討する機会を持ちたいと思うものである。

6 まとめ

今回の調査は限定された範囲の調査であり、残りは一応現状保存できたことは喜ばしいことである。

縄文時代の前期の住居址は調査区の南に寄っており、残された段丘突端部にかけて集落を形成していたと考えられる。それに反し中期の住居址は台地の奥に立地する傾向がみられ調査区の北東から北にかけて展開するものであろう。今回の調査では、中期後葉の住居址のみであり、反目遺跡では検出されなかった後葉末に位置する住居址がほとんどである点は集落の移動も考えられ興味深い。

弥生時代は3軒の住居址と方形周溝墓が検出されているが、集落としては大きなものとは考えにくい。東段丘上に該期の大集落がある点、方形周溝墓との関係から注目される。反目遺跡の段丘下反目南遺跡から3基の方形周溝墓が確認されたが、該期の住居址は2軒のみであった。当遺跡の有り方と非常に類似している。

奈良・平安時代は15基の住居址が検出され、遺跡の全域に立地しており、大規模な集落が予想される。住居址形態には反目遺跡にみられないものもあり、今後両者の検討をして行く必要がある。

本遺跡から反目遺跡を経て火山峠を越えれば、伊那市富県福地、さらに三峰川の対岸は伊那市手良に至る。この両者とも古代から知られた郷名であり、その通過地として奈良・平安時代に集落が造られていったものと考えられる。

殿村遺跡縄文時代住居址一覧表

番号	平面形	主軸	規模	炉	柱穴	埋甕	時期	備考
3	円形か 楕円形	N-52° -W	5.7×?	地床炉	他柱 穴		前期 前半	入口部あり 南側未調査
6	楕円形	N-4° -E	8.2×6.0	地床炉	4		"	建替住居の可 あり
8	不明	不明	不明	地床炉	4		"	大半壊されてい る
11	円形?	不明	不明	地床炉	1		"	西は12号住に南 は10号に切られ る
12	楕円形	N-65° -E	3.9×5.0	地床炉	4		"	東に11号住を切 り南西は10号住 に貼床される
13	円形?	不明	4.0×?	不明	1		"	第10号住居に貼 床され、東側は 除地
15	楕円形	N-8° -E	6.2×5.0	地床炉	多柱 穴		"	
16	隅丸方形	N-20° -E	4.3×4.6	掘炬壺状石圓炉 (炉石すべて抜 かれている)	4	正位(石なし) 入口左	中期 後II	南の20号住を切 る 入口施設あり
20	楕円形	N-18° -W	4.8(?)× 6.0	地床炉	6		前期 前葉	16号住に切られ る
23	不明	不明	不明	不明	不明		"	
24	楕円形	S-20° -W	3.8×4.5	地床炉	4		"	
25	楕円形(?)	不明	不明	地床炉(炉石持 つ可あり)	2		"	西22号住に切ら れ、北東は同一 床面にて重複
26	楕円形	N-24° -E	4.2×?	地床炉	1		"	北西は27号住に 西は18号住切ら れる。東は19号 住に貼床される
27	円形	S-85° -E	5.2×5.5	掘炬壺状石圓炉 (炉石一部除い て抜かれてい る)	4		中期 後葉 IV	東26号を切る。 入口施設あり

番号	平面形	主軸	規模	炉	柱穴	埋甕	時期	備考
28	不明		不明	方形石組炉 南側2重となる	不明		中期後II	19号住に切られる。壁検出できず
29	不明		不明	地床炉か石組炉	3		前期か中期	西36号住に切られる。
31	隅丸方形	N-67°-W	5.2×5.2	石組炉か掘炬鍵状石圍炉(炉石すべて抜かれる)	4		中期後IV	東32号住と同一床面にて重複建替の可能性あり
32	隅丸方形	N-52°-E	5.6×5.6	掘炬鍵状石圍炉	6		中期後III~VI	西にて31号住と同一床面にて重複
34	隅丸方形	N-57°-W	5.7×5.3	掘炬鍵状石圍炉(炉石すべて抜かれる)	3		中期IV~V	北側擾乱
36	不明	不明	不明	不明	不明		中期後葉	床面のみ 33号住に切られる
39	隅丸方形	N-80°-E	5.9×6.3	掘炬鍵状石圍炉(炉石一部除いて抜かれる)	4		中期後葉IV	入口施設あり

殿村遺跡縄文時代住居址別石器集計表

種別 住居址	打製 石斧	磨製石斧			大型被 石器	小形 石器	石錐	裁 打器	特 殊 被石	磨 擦 石	凹石	石皿	横 刃 石器	石錐	石錐	削器 及び 擦器	その他	計
		定角	船刃	乳棒														
3	床面					2		1		1		1			2	1	3	11
	フク土							4		3	3			1	7		1	19
	計					2		5		4	3	1		1	9	1	4	30
6	床面					8		15		7	5		1		61	3	39	139
	フク土					3		11		2	3				27	3	18	67
	計					11		26		9	8		1		88	6	57	206
8	床面														2	1	4	7
	フク土									2	1				2		2	7
	計									2	1				4	1	6	14
11	床面	1	1		1		1	4			9				10	3	12	41
	フク土										2					1		3
	計	1	1		1		1	4			11				10	4	12	44
12	床面	1					1	4							4		10	20
	フク土																	
	計	1					1	4							4		10	20
13	床面							2		2	3				3		6	16
	フク土														4		1	5
	計									2	2	3			7		7	21
15	床面	1	1	1	4			15			2				17	2	4	46
	フク土									1		3			11	2	6	23
	計	1	1	1	4			16			5				28	4	10	69
16	床面	3					1	7		1	7				2	4	1	1
	フク土							2			3				3		1	9
	計	3					1	9		1	10				2	7	1	2
20	床面						1		7	1	3	2			3		4	21
	フク土																	
	計						1		7	1	3	2			3		4	21
23	床面						5	2			2				56	5	27	99
	フク土																	
	計						5	2			2				58	5	27	99
24	床面	1								3	2	2						8
	フク土																	
	計	1								3	2	2						8
25	床面		1	1				2		1	1		1		1			7
	フク土																	
	計		1	1				2		1	1		1		1			7

種別 住居地	打製 石斧	磨製石斧				小形 石器	石錐	裁打 器	特種 磨石	圓石	石鳥	横刃 形石斧	石錐	削器 及び 器	その他	計	
		定角	始刃	乳棒	計												
26	床面	1													3	4	8
	フク土																
	計	1													3	4	8
27	床面	3						8			1	1			2		15
	フク土	5				1		4		1	1				5	10	27
	計	8				1		12		1	2	1			7	10	42
28	床面							2			2				8	12	24
	フク土																
	計							2			2				8	12	24
29	床面	1						1		2							4
	フク土																
	計	1						1		2							4
31	床面	2				1		2						2	5	9	21
	フク土														1	4	5
	計	2				1		2						2	6	13	26
32	床面	2	1	3				1							4	4	12
	フク土	6						6		3	6				2		25
	計	6	2	1	3			7		3	6				6		37
34	床面	1	1		1									2	2	2	8
	フク土	2															2
	計	3	1		1									2	2	2	10
36	床面	1						2		1					1		5
	フク土																
	計	1						2		1					1		5
39	床面	15	1	1	1			4		2					6		29
	フク土																
	計	15	1	1	1			4		2					6		29

殿村遺跡奈良・平安時代住居址一覧表

番号	平面形	長軸方向	規 模	入口	カマド	柱穴	時 期	備 考
1	隅丸形	不明	4.3×?		西中央	2	奈・平II	東は開田時削 られている
2	隅丸長方形	S-26°-W	6.5×4.8		南東隅	4	奈・平VI	5号住に貼床 する
4	隅丸長方形	N-80°-W	4.9×4.4	東	西中央	4	奈・平IV	入口施設あり
9	隅丸方形	N-68°-W	3.6×3.6		北西中央		奈・平IV～ V	南東部6号住 に貼床
10	隅丸形	不明	6.5(5.5) ×?		東壁?	4	奈・平V	東は区域外未 調査
14	隅丸長方形	S-75°-E	5.6×5.0 (4.5)		東壁南より	4	奈平II～III	
17	隅丸方形	S-78°-E	5.0×5.2	東		3	奈・平IV	
19	隅丸方形	N-75°-W	5.4(5.0) ×4.8		西中央	1	奈・平VI	26号住に貼床
22	隅丸方形?	S-80°-E	4.0× 4.0?		東中央?		奈・平I?	41号住と重複
30	隅丸方形	N-21°-E	4.9×4.6		東中央	2	奈・平IV～ V	34号住に貼床
33	不明	不明	5.6×?		東やや南寄 り	2	奈・平VI	西開田時に削 られる
35	隅丸方形	N-74°-W	7.0×6.6		東壁北に偏 す	4	奈・平V～ VI	40号住に貼床 する
37	隅丸方形	N-90°-E	5.3×5.3 (4.8)		東壁北に偏 す	1	奈・平V～ VI	
38	隅丸方形	N-77°-W	5.0×5.0	東中央		4	奈・平III	
40	隅丸方形	N-76°-W	5.2×4.8	西中央		4	奈・平	
41	隅丸方形?	N-80°-W	4.0× 4.0?		西中央?		奈・平VI?	21号住と重複

殿村遺跡 土師器・須恵器・灰釉陶器観察表

出土場	辨認番号	器種	重量	容量	現存状態	器形の特徴	調査	胎土外
1号住	-1	壺	() () 14.5		腹のみ残 長柄壺	外面 タテ のハケ 内面 ナデ	暗褐色 長石わずか含む 燃成良好	
	-2	壺 (3)	(12.0) 6.1 3.8		底残 体部残 体部直線的	ロクロナデ 底回転糸切	青褐色 長石多く含む	
2号住	-1	壺 (火)	(18.0) (8.2) 6.8		%	口縁わずか外反する	ロクロナデ 底高台縁辺部回転ヘラ ケズリ	乳白色 粉白色
4号住	-1	壺	() 11.6 (9.0)		底部削下部残 前に破片ある 復元できず	長柄壺	ロクロナデ 底ハケ	黄褐色 砂粒含む 燃成良好
	-2	壺	(14.5) (6.7) (5.6)		底欠け	底丸底に近いか?	ロクロナデ 底回転ヘラ切りの可能性ある 内面 黒色研磨	赤褐色 砂粒わずか含む 燃成良好
	-3	壺	() (6.3) (1.8)		口縁欠け		ロクロナデ 底静止糸切 黑色研磨	赤褐色 脱土無 燃成良好
	-4	壺	() (6.7) (1.3)		底のみ	丸底	ロクロナデ 底 回転ヘラ切りの後ハケ 黑色研磨	赤褐色 脱土無 燃成良好
	-5	壺 (深)	() 5.7 (2.7)		底一部欠 体 部分口縁欠	体部丸味持つ 底外延量者あり	ロクロナデ 底回転糸切	白灰色 砂粒含む 軟質
	-6	壺 (深)	() 6.3 (1.8)		口縁欠け		ロクロナデ 底回転糸切	灰白色 捱かいい 砂粒含む 軟質
	-7	壺	() 2.6 (1.6)		底のみ残	付け高台	ロクロナデ 高台台形 外反する 底 内側する 底 回転糸切 高台内辺部ロクロ ナデ 内面 黑色研磨	赤褐色 脱土無 燃成良好
	-8	瓶 (?) (深)	() (9.0) (3.3)		胸下部残	付け高台	ロクロナデ 高静止 系切 高台内 辺部 回転ヘラケズリ	灰白色 脱土無 内面底自然 融あり
	-9	壺	13.0 6.4 2.8	89.90	口縁一部欠	付け高台、高台高く薄く外反する	ロクロナデ 全面回転ヘラケズリ 内面 黑色処理 内面あばた状のはく離あり	赤褐色 霧母多く含む 燃成普通
9号住	-1	壺	16.8 6.3 5.2	594.44	口縁一部欠	口縁わずか外反する	ロクロナデ 底回転糸切り 内面 黑色研磨	赤褐色 外面 口縁一部黒色 口縁わずか長石含む 燃成良好
10号住	-1	壺 (深)	() 6.0 (1.2)		口縁欠	体部強く外傾する	ロクロナデ 底回転糸切り	灰白色 長石わずか含む
	-2	壺 (?)	() 6.8 (1.2)		底のみ残	付け高台 高台直立する	ロクロナデ 底回転ヘラケズリ	乳白色 粉現脱 なし
14号住	-1	壺	(13.0) () 5.0		胸上部残	口縁わずかに外反する	外面 タテのハケ 内面 口縁ヨコのハケ 剥離 ナデ	暗褐色 脱土無 燃成良好
	-2	壺 (深)	12.6 5.4 4.3	246.06	底	体部直線的	ロクロナデ 底回転糸切り	白灰色 長石わずか含む 軟質
	-3	壺 (深)	(13.2) 6.0 3.1		体部残	体部丸味持つ	ロクロナデ 底回転糸切り	青褐色 脱土無 軟質

出土地	辨 別 番 号	器 種	法 量	容 量	残 存 状 態	器形の特徴	調 査	地 土 外
14号住	-4	环 (38)	12.9 6.1 4.4	271.45	口唇一部欠 体部や丸味持つ 厚手 体部 外面墨書きあり	ロクロナデ 底回転糸切り	白灰色 肩土微 密 軟質	
	-5	环 (39)	13.4 4.7 3.9 (3.5)	242.65	口唇一部欠 口唇わずか外反する	ロクロナデ 底回転糸切り	青黒色 砂粒含 む	
	-6	盤(?) () 7.0 (2.3)			口縁欠 付け高台 高台外反する	ロクロナデ 底全面ロクロナデ	青墨色 細かい 長石多く含む	
	-7	环 () 10.0 (2.2)			底部凹 体部1部	付け高台 台形の高台は外反し、 底面は内傾する	ロクロナデ 底全面回転ヘラケズリ	青黒色 長石多 く含む
	-8	盤	14.6 10.6 4.6	175.90	完	付け高台 高い高台は強く外傾 する	ロクロナデ 底全面回転ヘラケズリ	青黒色 長石含 む
17号住	-1	甌	18.4 9.7 32.5 (31.2)		肩部一部欠 美濃窯	外面 タテのヘラケズリ一部ナデ 内面 はく落のため不明 断面にヘ ラケズリあり	暗褐色 砂多く 含む 摩成良好	
	-2	甌	16.0 8.0 16.4		口縁一部欠 口縁わずかに外反する	外面 タテのハケ 下部ヨコのハケ 頭部ヨコのハケ 底ヘラケ ズリ 内面 ナデ 頭部ヨコのヘラケズリ	赤褐色 長石混 合含む 摩成普通	
	-3	环	12.6 5.8 4.3	289.24	体部凹 体部丸味持つ	ロクロナデ 底回転糸切り 内面 黒色処理	赤褐色 肩土微 密 摩成普通	
	-4	环 () 6.7 (2.7)			底と体部一部 付け高台 高台内そぎ三角形状	ロクロナデ 底回転糸切り 高台内 近部回転ヘラケズリ	白黄褐色 細長 石含む 摩成普通	
	-5	环	11.8 5.2 4.6	289.24	体部凹 体部丸味持つ	ロクロナデ 底回転糸切り 手持ち ヘラケズリ 内面 黒色研磨	白黄褐色 砂粒 多く含む 摩成 普通	
19号住	-1	甌 (灰)	(16.9) (8.0) 6.5	%	体部丸味持ち、口唇外反する 付け高台 高台高くわずか外傾す る	ロクロナデ 底全面回転ヘラケズリ	白黄褐色 色白色	
	-2	甌 (灰)	() 8.5 (4.3)		口縁欠% 付け高台 高台高くわずか外反 する	ロクロナデ 底回転糸切り 高台内 近部ロクロナデ	白黄色 色白色	
	-3	皿 (縦輪)	() 5.8 (1.3)	体下部(%)	付け高台 高台内そぎ三角形状	ロクロナデ 底回転糸切り 内辺部 回転ヘラケズリ	乳白色	
	-4	甌 (灰)	() 8.4 (2.3)	体下部	付け高台 高台高く外反する	ロクロナデ 底全面回転ヘラケズリ	白灰色 色白色	
	-5	皿	() 6.2 (1.0)	底部	付け高台 高台強く外傾する	ロクロナデ 底回転糸切り 高台内 辺部ロクロナデ 内面 黒色処理	赤褐色 肩土微 密 摩成良好	
	-6	环	() 6.0 (1.7)	底部	付け高台 高台高く強外反する	ロクロナデ 底全面回転ヘラケズリ 内面 黑色研磨 放射状暗文	黄褐色 肩土微 密 摩成良好	
	-7	甌 (灰)	() 6.5 1.3	体下部	付け高台 高台内そぎ三角形状	ロクロナデ 底全面回転ヘラケズリ	白灰色 色白色	
	-8	浅皿	(12.0) (6.2) 2.3	%	付け高台 高台内そぎ三角形状	ロクロナデ 底全面回転ヘラケズリ	乳白色 色白色	
	-9	甌	() 9.0 (1.6)	底のみ	付け高台 高台台形で底面内傾 する	ロクロナデ 底回転糸切り 高台内 辺部回転ヘラケズリ	白灰色 色透明 質	

出土地	標識番号	群種	法量	容量	残存状態	图形の特徴	調査	胎土外
19号住	-10	広口瓶	() 16.2 (13.9)		体下部% 付け高台 高台台形で底面内傾する	ロクロナデ 底全面削輪ヘラケズリ	白黄色 細透明質 一部緑色おびる	
22号 41号	464-1	甌	() 16.7 (17.8)		腹下部% 長脚甌	内外 タテのナデ 底 木葉底 ナデ	赤褐色 砂粒含む 焼成良好	
	-2	甌	7.3 8.0 9.8		口縁% 口縁内鉢する	外面 タテのハケ 内面 ヨコナデ 底 ナデ	暗褐色 砂粒含む 焼成良好	
	-3	甌	() 11.4 (8.1)		腹下部% に破片あるも復元できず	外面 タテのハケ 内面 ヨコナデ 底 ハケ	黄褐色 長石含む 焼成普通	
	-4	甌	5.7 4.1 4.3		% 口縁わずか外反する	ロクロナデ 底回転糸切り (?)	赤褐色 長石わずか含む 焼成不良	
	-5	甌	13.6 () (4.3)		底部欠% 体部直線的	ロクロナデ	赤褐色 粘土無し 塗膜	
	-6	甌	() 6.0 (1.0)		底	ロクロナデ 底回転ヘラ切り 内面 黒色研磨	赤褐色 黒色含む 焼成普通	
	-7	甌	() 7.4 (1.0)		底	付け高台 高台内モザ三角形状	ロクロナデ 静止糸切り 高台内辺部回転ヘラケズリ 内面 黒色研磨	赤褐色 黒色含む 焼成良好
	-8	甌	() 6.8 (1.5)		底% 付け高台 高台台形外反し、底面内傾する	ロクロナデ 回転ヘラ切りの辺 底内辺部ナデツク 内面 黒色研磨	白黄色 粘土無し 焼成普通	
	-9	甌	(15.8) 7.3 4.5		体部%	付け高台 高台内モザ三角形状	ロクロナデ 回転糸切り 高台内辺部ヘラケズリ	乳白色 細白色
	-10	甌	16.2 8.3 6.7	充	付け高台 高台高く外面直立する	ロクロナデ 回転糸切り 高台内辺部回転ヘラケズリ	乳白色 細白色 黄色をおびる	
	-11	甌	(12.0) 7.0 3.5		底% 体部%	付け高台 高台低く台形	ロクロナデ 回転糸切り 高台内辺部回転ヘラケズリ	乳白色 細白色
	-12	甌	() 6.9 (3.0)		口縁欠	付け高台 高台高く外反する	ロクロナデ 底全面ロクロナデ	乳白色 細白色 内面 淡緑色
	-13	甌	() 7.8 (3.0)		口縁欠%	付け高台 高台高く内モザ三角形狀	ロクロナデ 底回転糸切り 高台内辺部回転ヘラケズリ	白灰色 細白色
	-14	甌	13.2 7.6 4.3	276.40	充	付け高台 高台内モザ三角形状 底外面 黑色あり	ロクロナデ 底回転糸切り 高台内辺部回転ヘラケズリ	白灰色 細白色 黄色をおびる
30号住	467-1	甌	() 6.3 (1.1)		底		ロクロナデ 底回転糸切り ヘラ記 内面 黑色研磨	赤褐色 胎土無し 焼成良好
	-2	甌	() 7.2 (1.9)		底		外面部ナデ 内面 ハケ	黒褐色 必粘合む 焼成普通
	-3	甌	() 6.0 (1.6)		底		ロクロナデ 底回転糸切り 内面黒色研磨	非褐色 胎土無し 焼成良好
	-4	甌 (灰)	10.8 4.7 3.3		% 体部直線的	ロクロナデ 底回転糸切り	非褐色ないし白 黄褐色 胎土無し 焼成	

出土地	辨	器	種	法量	容	量	残存状態	器形の特徴	調	査	胎	土外
30号住	467-5	环	() (30) 5.8 (0.8)			底			ロクロナデ 底回転糸切り		青白色	胎土鐵
	-6	環	15.2 6.9 4.6	390.63	口縁一部欠		体部直巻的 体部外直巻者あり		ロクロナデ 底回転糸切り 内面 黒色處理 研磨顯著でない	赤褐色	砂粒、 雲母含む	燒成普通
	-7	環	16.9 7.7 6.2	757.68	口縁一部欠		体部丸味持つ		ロクロナデ 底回転糸切り 内面 黑色處理 内面あばた状のはく落あり	赤褐色	長石含む	燒成普通
	-8	环	() 6.0 (2.0)		底、高台一部		付け高台		ロクロナデ 底回転糸切り	黄褐色	砂粒含む	燒成普通
	-9	瓶	() 7.8 (3.7)		底と胴下部分		付け高台		ロクロナデ 底回転糸切り 高台内 邊部回転へラケズリ	白灰色	胎赤黃色	
33号住	469-1	环	(12.6) 6.8 5.9		体部54		足高 高台 体部直巻的 付け高台		ロクロナデ 底回転糸切り 高台及 び内辺部ロクロナデ	赤褐色	胎土鐵	燒成良好
	-2	環	() 7.8 (5.3)		口縁欠		足高高台 付け高台		ロクロナデ 底回転糸切り 高台及 び内辺部ロクロナデ	白黃褐色	胎土鐵	燒成普通
	-3	环(?)	() 7.3 (2.3)		底のみ56		足高高台 付け高台		ロクロナデ 高台及び内辺部ロクロ ナデ	白黃褐色	砂粒含む	燒成普通
	-4	环	13.5 7.6 6.4 (5.4)	442.44	口縁56		付け高台		ロクロナデ 底回転へラ切りか全面 ロクロナデ 内面 黑色研磨 瓦内系堆文のくずれ	赤褐色	砂粒含む	燒成普通
	-5	瓶 (灰)	(19.0) () (4.7)		底部欠56				ロクロナデ 口唇下に沈線持つ	白灰色	胎白色	
	-6	環 (灰)	17.3 ()		底部欠56				ロクロナデ	乳白色	胎白黃色	
	-7	環 (灰)	(13.5) 6.8 3.7		体部56		付け高台		ロクロナデ 底回転へラケズリ	白黃色	胎白色	
	-8	皿	12.1 7.3 2.3		充		付け高台 口縁内湾する		ロクロナデ 底回転へラケズリ	白灰色	胎白色 内面綠色おびる	
	-9	設置	14.0 8.4 2.7		口縁56欠		付け高台 口縁わずか外反する		ロクロナデ	白黃色	胎淡綠色	
	-10	皿	12.8 7.2 2.4		充		付け高台 高台底外反する		ロクロナデ 高台内辺部ロクロナデ	白黃色	胎白色	
	-11	設置	13.6 7.8 9.0		口縁56欠		付け高台 高台わずか外反する		ロクロナデ 底部ロクロナデ	白灰色	胎白色	
35号住	472-1	环	10.9 4.7 3.0	120.06	充		ゆがみひどい		ロクロナデ 底静止糸切りの後手持 ちへラケズリ 底部 ロクロ直巻者	黄褐色	大粒な 砂粒含む	燒成 良好
	-2	环	9.9 4.8 3.7 (3.4)	124.84	充		ゆがむ 体部ほぼ直巻的		ロクロナデ 底静止糸切りの後、手持 ちへクラズリ 内外面(底外曲線く) 黑色處理 研磨顯著でない 底 ロクロ直巻者	白黃褐色	大粒 な砂粒含む	燒成良好

出土地	探査番号	器種	法量	容積	残存状態	器形の特徴	調整	胎土外
35号住	472-3	环	11.0 4.9 4.4 (4.0)	172.66	充	体部直錐的	ロクロナダ 底回転糸切り後ナダ底ロクロ板模	赤褐色 大粒な砂粒含む 燃成良好
	-4	环	10.2 4.6 3.4	130.27	充	体部わざか丸味持つ	ロクロナダ 底静止糸切り後ナダ底 ロクロ板模	白黄褐色 砂粒含む 燃成普通
	-5	环	11.0 5.9 3.3	105.09	充	体部直錐的 ゆがみひどい	ロクロナダ底切り離し不明 手持ちヘラケズリ	暗褐色 砂粒わずか含む 塑造
	-6	环	10.8 4.3 3.4	135.21	充	体下部にてわずか屈曲する。わざかくゆがむ	ロクロナダ 底静止糸切り後手持ちヘラケズリ 内外面 底部付近を除き黒色処理 断面墨書きでない	白黄褐色 胎土良好 塑造
	-7	环	10.2 5.2 3.0	口縁汚欠	体部丸味持ちゆがみひどい	ロクロナダ 底静止糸切り (?) 内面 外面底墨色処理 底 ロクロ板模	白黄色 胎土良好 燃成良好	
	-8	环	11.4 5.7 3.0	口縁汚欠			ロクロナダ 底回転糸切り	赤褐色 胎土良好 燃成普通
	-9	环	11.6 5.0 3.7	口縁汚欠	体部直錐的	ロクロナダ 底切り離し不明 全面ナダ	暗褐色 胎土良好 燃成普通	
	-10	环	13.2 7.7 5.9		付け高台、底高台で外反する	ロクロナダ 底切り離し不明 手持ちヘラケズリ 高台及び内辺部ロクロナダ	白黄褐色 石英大粒含む 燃成普通	
	-11	环	(14.9) 7.2 5.2	体部%	付け高台 高台外反する	ロクロナダ 底切り離し不明	赤褐色 胎土良好 塑造	
	-12	环	13.5 () (4.1)	257.44	高台欠	付け高台 ゆがみがひどい	ロクロナダ 底高台内辺部ロクロナダ 内面 風化延縫 外面一部黒色底 ロクロ板模	白黄褐色 胎土良好 塑造
	-13	环	14.4 () (4.7)	高台欠%	付け高台	ロクロナダ 底全面 手持ちヘラケズリ 高台内辺部ロクロナダ 内面 黒色研磨	白黄褐色 胎土良好 塑造	
	-14	环	(15.2) () (4.7)	高台欠%	付け高台 口縁わずか外反する	ロクロナダ 底全面 回転ヘラケズリ	白黄褐色 胎土良好 塑造	
	-15	环	(?) 8.4 (3.7)	高台のみ	付け高台 底高	ロクロナダ	暗褐色 黒色含む 燃成普通	
	-16	环	13.5 4.9 5.3	341.87	充	体部丸味持つ	ロクロナダ 底静止糸切り後手持ちヘラケズリ 外面 体下部に刻みがある 内外油 (外側) 黒色研磨	暗褐色 胎土良好 塑造
	-17	瓶 (环)	15.8 8.7 5.4	底一部のみ 体部一部欠	口縁わずか外反する 付け高台 高台 有形でわずか外傾する	ロクロナダ		白灰色 軸白色
	-18	瓶 (环)	12.8 6.9 3.7	口縁汚欠	付け高台 高台 逆台形で外側に傾持つ	ロクロナダ 底回転糸切り 高台 内辺部ロクロナダ	白灰色 軸白色	
	-19	瓶 (环)	(13.7) (9.0) 3.5	%	付け高台 高台高くわずか外反する	ロクロナダ 底全面回転ヘラケズリ	乳白色 軸白色	
	-20	瓶 (环)	(15.0) (7.8) 4.7	%	付け高台 高台外反する	ロクロナダ 底回転糸切り 高台内辺部ロクロナダ	白灰色 軸横緑色	
	-21	瓶 (縁輪)	12.4 6.5 5.0	口縁汚欠	付け高台 口縁外反する	ロクロナダ 底全面回転ヘラケズリ	釉は二次焼成のため はく落及び赤褐色に 変色する所あり	

出土地	標 団 番 号	器 種	法 量	容 量	残存状態	器形の特徴	調 整	胎 上 外
35号住	472-22	皿 (縦)	12.1 6.8 2.8		底外 口縁一部	付け高台 高台底く外反する	ロクロナデ 底回転糸切り	輪廻緑色
	-23	皿 (仄)	12.2 7.5 2.5		体部残欠	付け高台 高台外反する	ロクロナデ 底全面回転ヘラケズリ	白灰色 輪白色
	-24	皿 (仄)	11.9 6.0 3.5		口縁残	付け高台 高台外反する	ロクロナデ 底回転糸切り	灰白色 輪白色
	-25	広口盤 (仄)	20.8 () 20.8		口縁残 肩部 一部のみ	口唇は内傾し、わざか受け口状 となる	ロクロナデ	乳白色 輪白色 外面無釉
37号住	476-1	壺 (仄)	(12.0) (5.5) 4.8	%		口唇わずか外反する 付け高台 外反する	ロクロナデ	白灰色 輪白色
	-2	折縁壺 (縦化)	(12.7) 6.0 2.5		体部残	付け高台 高台 外反する	ロクロナデ 底全面回転ヘラケズリ	灰白色 輪白色
38号住	479-1	甕	(21.2) () (17.2)		胴土削残	長胴甕 口縁強く外反する	外面 口縁ヨコナデ 脇部斜位のハ ケ 内面 口縁ヨコのハケ 脇部ナデ	白黄色 砂粒わ ずか 焼成普通
	-2	壺	(19.0) 5.9 4.5		底外 体部一部		ロクロナデ 底回転糸切り	白黄褐色 糙か い表石含む 焼 成普通
	-3	环	() 5.7 (1.8)		口縁残		ロクロナデ 底回転糸切り	白黄褐色 長石 含む 焼成普通
	-4	环 (頸)	(13.1) 6.2 3.6		体部一部	体下部に変換点持つ	ロクロナデ 底回転糸切り	墨青色 胎土致 密
40号住	481-1	甕	(14.6) () (4.8)		口縁部残	口唇外反する	外面 タテのハケ 内面 ヨコのハケ	暗褐色 胎土良 好 焼成普通
	-2	甕	() 8.8 (9.8)		胴下部		外面 タテのハケ 内面 ナデ 底 ハケ	黒褐色 胎土良 好 焼成普通
	-3	壺 (頸)	13.2 6.0 3.4		体部残欠		ロクロナデ 底回転糸切り	灰白色 長石含 む
	-4	短頸甕	11.0 () 4.2		口縁部残	口唇そぎ状	ロクロナデ	灰白色 長石わ ずか含む
	-5	环	() 8.5 (0.8)		底部	付け高台 高台台形状	ロクロナデ 底回転糸切り 底部回転ヘラケズリ	墨青色 胎土致 密

(主要参考文献)

- 桑山龍進 「菊名貝塚の研究」 1980年
- 「清水ノ上貝塚」 南知多町教育委員会 1978年
- 「先刈貝塚」 南知多町教育委員会 1980年
- 「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—原村その5(阿久遺跡)」 長野県教育委員会
1982年
- 「長門町六反田」 長門町教育委員会 1983年
- 「高風呂遺跡」 茅野市教育委員会 1986年
- 「梨久保遺跡」 岡谷市教育委員会 1986年
- 「長野県史 考古資料編 主要遺跡(中・南信)」 長野県史刊行会 1983年
- 神奈川県考古同人会縄文研究グループ 「縄文時代早期末・前期初頭の諸問題」 神奈川県考古
第17号 1983年
- 「舅星敷」 塩尻市教育委員会 1982年
- 「里木貝塚」 倉敷考古館研究集報 第7号 倉敷考古館
- 「島浜貝塚—縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査1—」 福井県教育委員会 1979年
- 紅村弘 「東海の先史遺跡総括編」 1963年
- 中山英司 「入海貝塚」 愛知県知多郡東浦町文化財保存会 1955年
- 渋谷昌彦 「木島式土器の研究「木島式土器の型式細分について」 静岡県考古学研究11
1982年
- 渋谷昌彦 「神の木台・下吉井式土器の研究—その型式内容と縦年の位置について」
- 小田原考古学研究会会報11 1983年
- 「木島 静岡県富士川町木島遺跡第4次調査報告書」 富士川町教育委員会 1981年
- 戸田哲也・大矢昌彦 「神之木式・有尾式土器の研究(前)」 長野県考古学会誌34号 1979年
- 児玉卓文 「長門町平沢遺跡出土の尖底土器二例」 長野県考古学会誌58号 1989年

第4節 小林遺跡

1 位置と地形（第1・490図）

1) 位置

小林遺跡は、長野県駒ヶ根市中沢本曾倉区小字小林11925番地から11929番地に所在する。

駒ヶ根市元標から東方へ直線距離で4.5km、新宮川右岸の河岸段丘南端にあり、中位段丘に相当する。小さなテラス状地形で古くから耕地として利用されていた。遺跡はこの段丘面全面に所在する。標高は614mを示し、新宮川との比高20m、水平距離150mを測る地点である。

2 地形及び地質（第1・490図）

中沢段丘は、大地溝帯の内帶側に形成された伊那山地の西側において、伊那盆地本谷側に向かって形成された扇状地形を、伊那山地から西流する新宮川・下間川の二川によって北側及び南側を深く開析され、さらに洪積世の後末期に御岳火山の噴出による降灰が8m余堆積し地表はテフラ層が全面を覆った。さらに洪積世前期からの天竜川・大田切川の流量の消長により、5段の河岸段丘を形成し、東西2,500m、南北600mの台地状段丘地形が形成されたのである。

当地域の地質的基盤は、領家変成岩と領家花崗岩の接触地帯で複雑な様相を呈する。この上部は厚い段丘礫層で、片麻岩、花崗岩、砂岩、変成輝緑岩、頁岩、泥岩等で構成される。

本地点は、新宮川川床から数えて、2段目の低位段丘であるが、比高約40mと高く川床に臨接する台地状地形で、段丘崖は急峻である。小林遺跡は片麻岩煤乱土が1mほど堆積しており、その下は厚い段丘礫層である。東西60m、新宮川に沿って南北180mの狭い平地段丘面を形成し、本遺跡はこの南端部に位置する。

ここでは段丘幅はやや狭くなり横長台地を形成し比高15mを以って、段丘崖下を西流する新宮川の渓谷に臨む位置に占地している。

2 歴史的環境

中沢台地一帯および南側の下間左岸、新宮川右岸には縄文時代から中世に至る遺跡が30箇所近く存在するので時代の推移に伴ってその概略を紹介したい。

旧石器時代は今の處発見されていないが、洪積世の段丘地形と地層で構成されている台地の各所に自然湧水地点があるのでその付近で、近い将来発見される可能性が高い。

縄文時代の遺跡は、中沢台地の下位段丘から高位に向かって述べるとまず第2段丘に古城南遺跡（21・中期）があり、続いて新宮川沿岸に柴遺跡（32・後期）、第3段丘には高見原遺跡に西接する東原（5・中期）、久保垣外（6・中期）、日向（4・中期）、下間（24・中期）、持木平遺跡



第490図 小林遺跡概況図 ($S = 1 : 3,000$ ●は埋立保存箇所)

(35・中期)が高見原遺跡の衛星的地位を保つように所在している。高位の第四段丘面では高見原の東方500mに的場遺跡(11・早期・中期)、門前・荒井遺跡(12・中期・後期)、上垣外遺跡(9・中期)が高見原丘陵の基部的位置に群集している。

本台地の南側対岸の下間川流域には、下流から梨の木平(17・中期)、細久保(16・中期)、小



1. 古城南 2. 横山A 3. 横山B 4. 日向 5. 東原 6. 久保垣外 7. 町
 8. 高見坪ノ内 9. 上垣外 10. 門前 11. 的場 12. 高見城址 13. 小山 14. 羽前場
 15. ごみ垣外 16. 細久保 17. 梨ノ木平 18. 菅沼 19. 菅沼城址 20. 常秀院 21. 高見原
 22. 古城址 23. 五郎垣外 24. 太座垣外 25. 小林 26. 徳光地 27. 下間 28. 香花社
 29. 白山城 30. 一本柿 31. 小山 32. 柴 33. 原城址 34. 曾倉館址 35. 持木平
 36. 狐くぼ 37. 犬村 38. 菅沼の宝鏡印塔

第491図 中沢台地及び周辺遺跡分布図 (S = 1 : 20,000)

山Ⅲ（31・後期）が狭い山麓線に並列している。

本台地の北側の新宮川をへだてた対岸の本曾倉地区には、下流から山麓の小規模な台地上に五郎垣外（23・中期）、太座垣外（24・早期）、河岸に近い中位段丘上に本遺跡（25・中期・後期）が所在している。

以上のように中沢台地面は縄文時代人の生活痕跡がいたる所に遺存している。

弥生時代の遺跡は、前代に比べ急激に衰退し、わずかに菅沼の上の原（後期）中割の久保垣外（6・後期）、下間川の南岸の羽前場（14・後期）に遺物が散見する程度である。稻作農耕を中心とした弥生人の生活条件には適さないことは、中沢台地面は高燥で水が少なく、段丘地形のため傾斜面が多いことなどを原因としてよいであろう。

古墳時代も、農耕生活を中心であったため弥生時代と同じく発展していない。東原（5）の旧中沢小学校敷地に明治年代には数基の小さな墳丘があったことを伝承しているのみであり、遺物としては、古式須恵器が菅沼細久保から出土している。

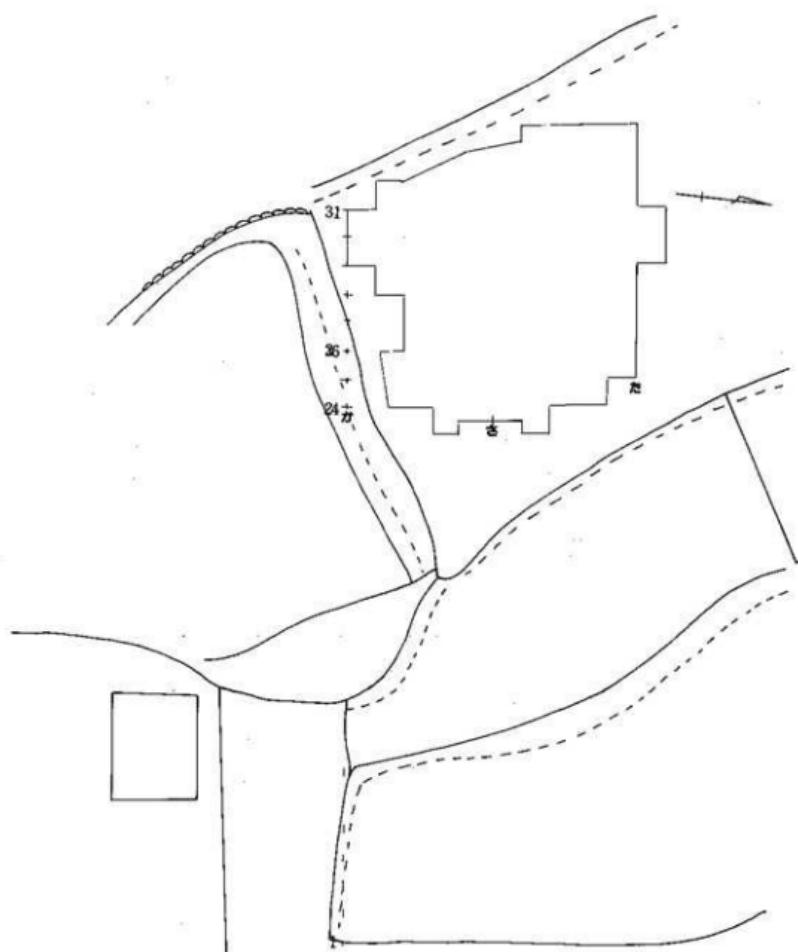
奈良・平安時代の遺跡は、高見原丘陵の周辺に急に増加してくる。中沢台地の内央部の西部から東原遺跡（5・平安）、久保垣外遺跡（6・平安）、徳光地（26・平安）と東方に連なり新宮川の低位面にある坪の内遺跡（26・平安）に続き、更に台地上の的場（11・平安）、門前（10・平安）、一本柿（30・平安）と続き、さらに台地の南対岸の山麓にごみがいと遺跡（15・小山第Ⅱ・平安）その下間川下流に梨の木平（17・平安）等それぞれ灰釉陶器・須恵器・土師器を伴出する遺跡10遺跡が台地の周縁に沿って展開している。奈良時代の遺物は今のところ見当たらぬ。

鎌倉・室町時代になると、中沢台地の中心部に数多くの遺跡が集中する。まず台地の基部、的場（11）、一本柿（30）、白山城（29）、坪の内（8）、香花社（28）、高見城址（12）、町（7）、日向（4）、高見原（21）、横山（2）とほぼ台地の中軸線にそっておよそ1kmほどの長さに展開している。

また台地の南対岸に小山Ⅰ遺跡（13）がある。これは昭和59年10月、発掘調査により発見された室町時代中期に造営された単郭方形居館址であった。また高見原遺跡第VII地点から、昭和61年夏、中世館址とおぼしき建物3棟、近世初頭の建物3棟等が発掘調査の結果検出された。

また、中沢台地の基部の北側、新宮川沿岸の低位段丘面に坪の内遺跡（8）が、昭和60年10月発見された。地表下2mの層位に掘立柱式建物があり、12世紀末の館跡と考えられる。

この時代の地上の遺構として現存するものも、この台地上に数が多い。まず坪の内遺跡の西方100mにある香花社（28）は新宮川谷に突出する円形の残丘上にあるが、この円丘をめぐる周濠跡が、昭和60年10月、土地改良事業により発見され、古瀬戸灰釉陶器が出土していて、古式城郭と認められた。また坪の内遺跡の南方の50mの高位段丘上に白山城址（29）があり、単郭長方形の郭が遺存し古瀬戸灰釉陶片等が出土している。その西南方に高見城址（12）があり西城郭、外城



第492図 小林遺跡発掘概況図 ($S = 1/200$)

郭を遺存し、西部の稜線上に「ますがた」と直線道路と町屋割を残す町遺跡（7）が現存している。

本遺跡の所在する本曾倉区には曾倉居館址（34）が現存し、その西北原区地籍の第3段丘上の突角に原城址（32）が郭跡を遺存している。また高見城址の東方1kmの山麓に佐越城址が位置する。

以上の城郭跡は、戦国時代の甲斐武田氏統治以前の構築と目され、この中で古形式をとどめるものは古城址・香花社城址と考えられ、他は14世紀から16世紀前半期のものと考えられる。

また菅沼大業寺跡に、「明徳三年」銘の宝蓋印塔（38）が現存する。

以上のように中沢台地上には、縄文時代遺跡について中世の遺跡が多い点を注目したい。

3 調査概要（第490・492・493図）

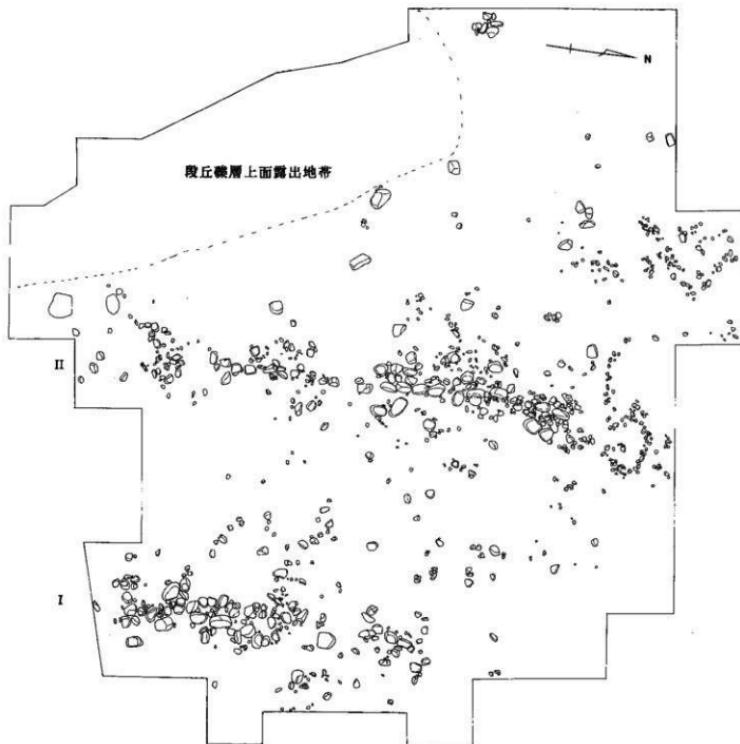
本遺跡は今回の発掘箇所の南の宅地及び養鯉池まで含んだもので狭い段丘上に位置している。大正年間の宅地造成の折、石匂炉と縄文中期後葉の土器が多量に出土した（駒ヶ根市立東中学校保管）。宅地の西は養鯉池のために深く掘られ壠されている。

調査はグリッド調査とし、水田の南東隅を基点に南北方向に「か」から始まる50音順、東西方向に算用数字を付した2m×2mのグリッドを設定し、遺構検出をもって拡張する方法を探った。

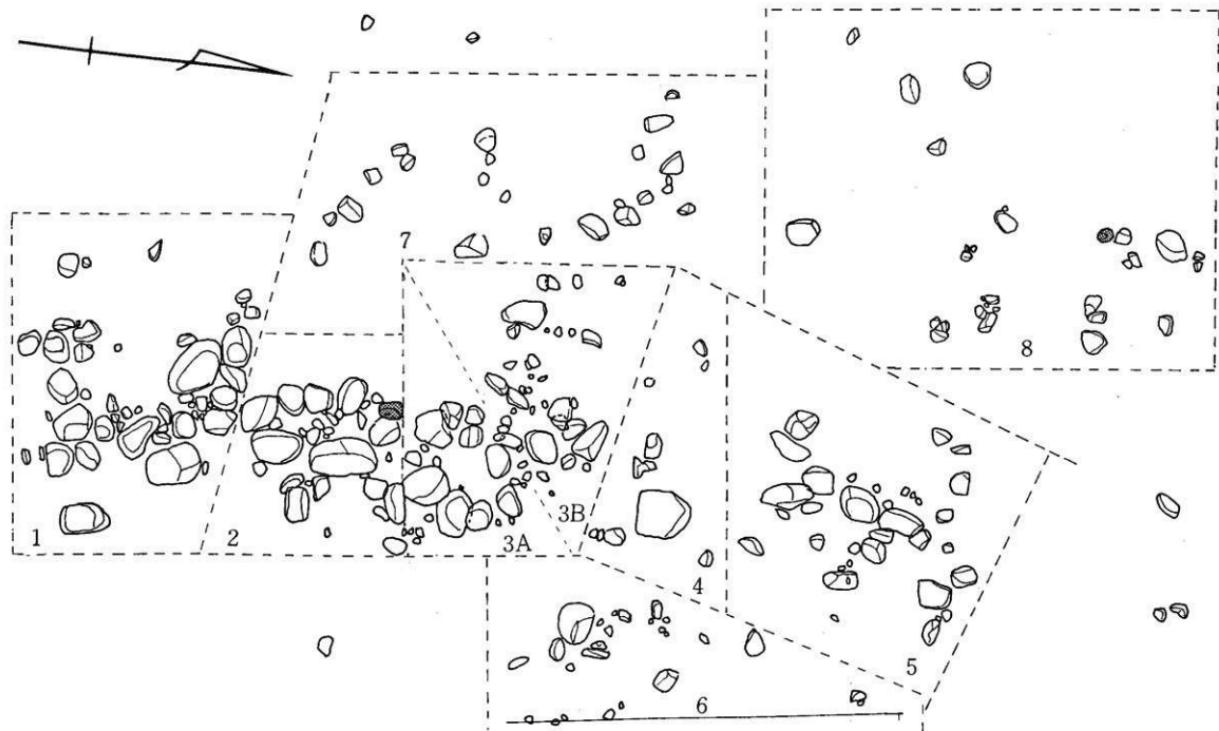
発掘作業は第一段階として、水田面の盛土と地床の人工層を耕土する作業を実施した。第Ⅰ層は水田耕土層厚さ40cm、第Ⅱ層は水田地床層厚さ10cmを示し、これを約300m²全面剥取すると、水田造成前の原地表であった第Ⅲ層が露呈された。遺物は若干の土器、陶器、磁器であった。

第二段階として、第Ⅲ層の厚さ60cm～40cmの黒ボク層の精査にかかる。第Ⅲ層上面には所々に自然石状石塊が露出していたが、水田地床面より高い石は耕作中に相当量抜き出したとの話しであった。発掘の進展に伴い自然石は配石遺構であることが判明すると共に発掘区の東端の土手下縁グリッド25列に沿って帯状の配石列が検出されたので「第Ⅰ配石帯」と命名する。更にこの配石帯から6m西側に平行して帯状配石が露呈されたので「第Ⅱ配石帯」とした。グリッド29列の線上である。統いてこれより6m西部の段丘縁に近い位置に、大石や礫、砂層の堆積が出土してきた。第Ⅲの配石帯かと思われたが、精査の結果段丘疊層と判明し、遺物の出土も認められないでの発掘対象から除外した。

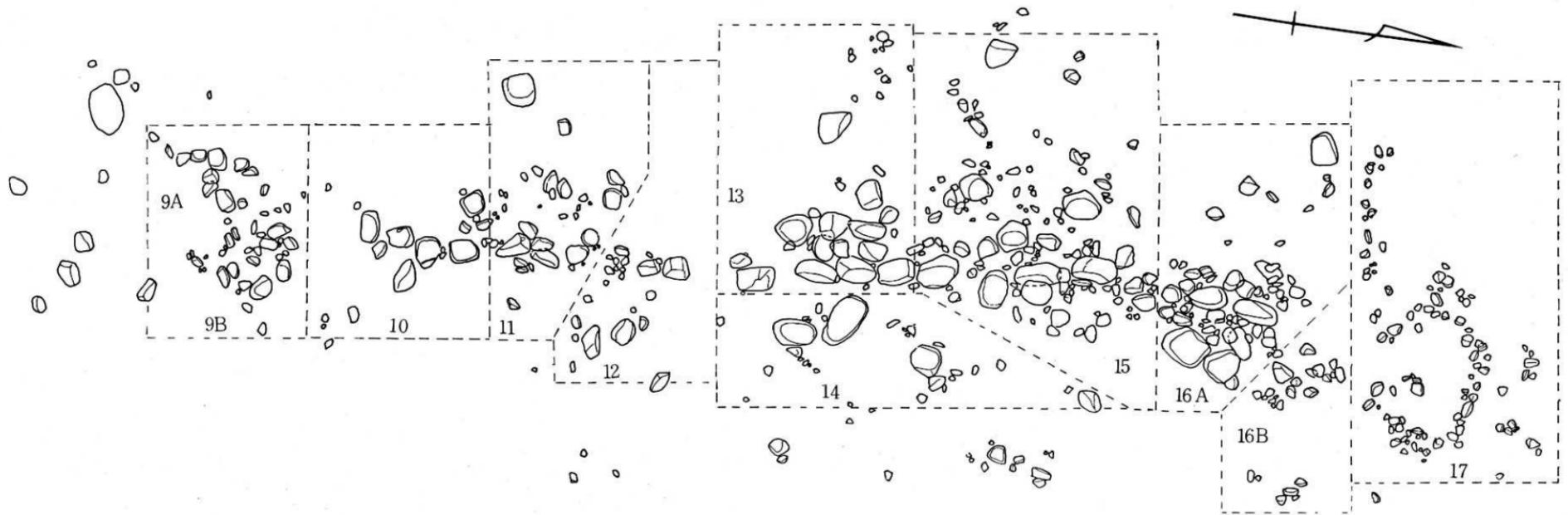
第Ⅰおよび第Ⅱ配石帯、その中間帯から縄文中期土器片、石器が多量に検出された。最終段階で第Ⅱ配石帯の中央の第15配石址の下部に土壤の存在が確認され精査の結果埋納遺構であることが判明した。配石帯の南限は工区外のため調査が限定されたが西・南・北の限界も確認できたので、清掃の後のバルーン撮影、測量を実施し、発掘作業が終了した。



第493図 配石造構実測図 ($S = 1/120$) Iは第Ⅰ配石帶・IIは第Ⅱ配石帶



第494図 第1配石帯実測図 ($S = 1/40$) 数字は配石址の個有番号を示す。◎は立石



第495図 第II配石帯実測図 ($S = 1/40$) 数字は配石址個有番号を示す。

4 造構

1) 配石造構の概況 (第493図 図版217)

発掘調査対象とされた狭いテラス状地形の中央部約440m² (22m × 20m) を、ほぼ正方形に全面発掘した結果、第Ⅲ層内に包含されていた配石造構を検出することができた。

配石造構は、大、小の石を素材として配列してある。その配列形態を概観すると並行する二列の配石が帯状に段丘縁に沿って南北方向に続いている。尚東側は比高2mの小段丘崖となっている。

東側の1列目の配石列を「第Ⅰ配石帶」とし、およそ6mの間隔をおいて西側に並行する第2列目を「第Ⅱ配石帶」と称することにする。なお素材の石の大きさについての名称は、枕大もしくは人頭大のものを「石」、それ以下は拳大のものを基準として「礫」と称する。

第Ⅰ配石帶 東側の小段丘崖下に、崖線に並行して幅約2mの配石帯が10mのほぼ直線状に展開されている。この配列線は厳密に見る時、僅か弧状を呈す。配石帯はおよそ円形の配石単位の連続からなり、南部から配石第1号址から配石第5号址（以下第〇号址と記す）の順に直列し、この帶の東側に接し第6号址、西に接して第7号址、第8号址が密接に並列している。配石帯の主軸を形成する配石単位は主として「配石址」で、主軸線から外側に位置するのは「配礫址」であった。

第Ⅱ配石帶 第Ⅰ配石帶の西側に幅約6mの間隔をおいて、これに並行する幅2m内外の配石帯が長さ17mほど北方に展開している。南端の第9号址から第17号址まで9単位が直列状にほぼ密接しながら続いている。またこの配石帶の中央部の東側に接して第12号址、第14号址が配され、北端部の西側には南に第18号址、第19号址が位置する。これらはいずれも配礫址である。

この配石帶の中軸線は、第Ⅰ配石帶と同じく東に向かって若干弧状を描くが、視覚的には直線状に見える。これは直列する各円形（環状または盤状）配石址の組石部分が直列状に配置されているからである。即ち東から第10号址の西側部、第11号址の東側部、第12号址の南側部、第14号址の南側部、第13号址の東側部、第15号址の東側部、第16号址南側部の配石が大きく互いに直列状になるよう構成され、配石帶主軸線を形成しているからである。

第Ⅱ配石帶の中央北寄り西方8mの段丘縁に接した地点に第20号址が位置するが小規模な集石である。

遺物の出土状況 配石帶を形成する各配石址の内部及び周辺に多く出土した。また造構外からも出土が認められた。

土器としては、縄文時代中期初頭、中期後葉の所産が量的に多く、若干の縄文前期末及び晚期所属土器、古代の灰釉陶器、中世の青磁器、陶器、土器を出土した。

石器としては、横刃、石斧、黒耀石製石器・同剥片が圧倒的に多く、若干の磨石、石鏟、敲石

が出土し、石皿、凹石、砥石、石棒の断片が各1点のみであった。

また遺構として、第15号配石址直下に土壤が設けられており、多くの遺物が埋納されていた。

以上の遺物は、共伴した若干の石器を除いていずれも、断片で、完型に復元でき得るものは皆無である。遺跡の性格を物語るものであろうか。

以下項を改めて、各配石址について詳しく述べてみたいがその前に用語について規定しておきたい。

環状配石……石をリング状にめぐらして配置したもの。リングの一部が欠けたものは半環状。

盤状配石……環状配石の中空を石で充填したもの。充填が完全でないものを半盤状と謂う。

円形配石……環状、盤状とともに周縁が円形もしくは梢円形を呈するので、これを総称する。

配石単位……本遺構例では、狭義の意味で、配石帯を形成する最小単位のものを謂う。

「石」と「礫」……本例では、単位集石の素材の大きさに、枕大もしくは人頭大のものと、拳大以下の小さな石が使用されている。前者を「石」、後者を「礫」と謂い、分別する。

配石頭部……配石単位の主体部を謂う。

配石尾部……配石単位の主体部に付加されている突出状の配石、列石、点石を謂う。

巴文形配石……環状または盤状の配石址に尾部が付加されると、曲玉状または、巴文の形状となるので便宜上、巴（ともえ）文と仮称する。本例においては、第II配石帶北端部の第17号址（第495図）が、アラビア数字「6」の形をした配石址であり、これを基本形とした。

右巴文………巴文の尾部は、円周に並行して線状に回旋するが、その回旋方向が時計回りになるものを謂う。その反対は「右巴文」と称する。

2) 第I配石帶（第494図 図版211下・222下）

① **配石第1号址**（半環状配石、左巴文型）。第I配石帶の最南端に位置し、頭部は、一辺2.2mの方形に近い形で、西部開口し、コ字形を呈する形に、石13個、礫25個で構成される。尾部は礫5個で開口部の外周を左巻きする。共伴遺物は、中期初頭土器片、同復元土器片30片、横刃2点、黒縞石製石錐1点、同石礫1点、同剥片64点を数えた。

② **配石第2号址**（盤状環石・右巴文型）。配石第1号址（以下「第〇号址」という）に北接した径1.7mの梢円形に組石され、頭部は石8個、礫20個で密接して構成される。尾部は0.8m、東側に伸びる。頭部中央に打製石斧（No21 図版228上）がおかれ、周辺から縄文中期初頭の土器が出土した。角柱状の立石（図版228左）がある。

③ 配石第3号址（環状配石・左右巴文型。A、B2基密接）、第2号址の北に密接した頭部は径2.0mあるが、小規模な粗石状の環形が背中合わせに密接しているので分離できない故AとBに分ける。A址は10個の石を組み、20個の礫で間を充填する。A址の尾部は128個の礫で東側に、Bの尾部は石1個、礫6個で西に短く突出するが、Aは左、Bは右巻き巴文となる。伴出遺物は中期初頭の土器片、打斧3点（No18・20・22）蔽石1点、横刃1点（No18）黒耀石片8である。

④ 配石第4号址（三角状配石。右巴文型） 第3号址の北に40cmの間隔をもって位置し、頭部は大石2個、礫6個で三角形に構成され、尾部は2個で短い。石斧3点（No23）で内2点は断欠している。また中期初頭土器片15片が出土した。

⑤ 配石第5号址（不正長円形半環状配石。左、右巴文型） 長径2.5mの長梢円形を呈するが、半周を共有する左巻き、右巻きが密接したもので、左右並列密接していることからA、Bに分けた。尾部は共に西側に短く突出し、左巻き、右巻きである。遺物は、石斧3点、横刃2点を伴っている。頭部は石10個、礫27個で構成され、尾部はA、B共に礫3個で作られる。

⑥ 配石第6号址（環状配礫址 右巴文型） 配石列の東側に突出して設けられ、石1個、礫27個で構成される。黒耀石礫1点、中期初頭土器片5、晚期土器2片を出土した。

⑦ 配石第7号址（半環状配礫址。左巴文型） 第I配石帶の西側前庭部と目される位置、即ち配石第2号第3号址の近くに設けられた配礫址で、頭部は16個の小礫を配し、尾部は7個の小礫の点列で構成される。中期初頭土器片、同後葉の土器片16点を伴い、石礫1点、小形両極石核1点が出土した。

⑧ 配石第8号址（環状配礫址、右巴文型） 第7号址と同様に、しかも、これと対置する位置にその北側、即ち第5号址の西側に設けられた大型の配礫址で、頭部は長径3mの梢円形を呈する環状に石3個、礫24個で構成され、尾部は3個の礫で西に伸び、右巻き巴文を形成する。巴文の中心的位置の石棒状石は立石である。石斧（No26）1点、横刃4点（No28）黒耀石製小形搔器2点、石礫1点、黒耀石剥片52点を伴った。

3) 第II配石帶（第495・496図 図版221上・222上）

① 配石9号址（環状配礫。左巴文型）。第II配石帶の南端部に位置する長径2mの梢円形を呈する頭部は、二基の頭部が密接しているので、AとBとに分けられる。Aの頭部は石2個、礫7個で径0.8m、尾部は4個の礫列で長さ0.8mの環状、Bは径1mの半環状で頭部は石3個、礫35個で構成され、尾部は5個の点列で長さ0.8m、Bのそれと反対の北方に突出する。遺物は打斧4点（No18ほか）、石皿破片1点、黒耀石製爪形搔器、同削器各1点を伴い、黒耀石剥片60点がBの尾部周辺から出土した。尚土器片は、中期初頭及び同後葉のものが若干出土した。

② 配石第10号址（半環状配石・左巴文型） 第9号址Aの頭部北側に1mの間隔をおいて位置し、長径1.5mの半楕円状の頭部は、大石6個、礫10個で構成されコの字形を呈し、尾部は小礫3個でわずかに南へ伸びる。石斧2点（No16、No19）と黒耀石搔器及び細石刃状剥片を伴った。1号配石址の形と同じである。

③ 配石第11号址（半環状配石。左巴文型） 第10号址の北縁に密接した径1.6mの頭部で東側周縁を6個の大石を組み、他の周縁は20個の礫で構成する。尾部は1個の大石4個の大礫で長さ2.5m南に伸びる。中期初頭土器片若干、横刃2点、黒耀石製搔器と若干の同剥片を伴った。

④ 配石第12号址（環状配石。右巴文型） 第11号址の北東側にやや離れた位置にあり7号配石址と対置する。頭部は長径1.6mの長円形を呈し石4個、礫18個で構成される。尾部は礫5個の直列で南東に伸び、長さ5mを測る。石斧2、黒耀石製細石刃状剥片が出土した。

⑤ 配石第13号址（盤状配石。左巴文型） 第12号址の北に50cm幅の間隔をおいて位置する。頭部は、矩形（1.7m×0.9m）の石組で、大石9個、礫10個で組み、尾部は2個、礫5個の点列で、南西に1.6m伸びる。石斧2点、横刃3点（No15）黒耀石剥片15点を伴出。

⑥ 配石第14号址（環状配石。左巴文型） 第13号址の東側に20cmの間隔をおいて位置する環状配石址であるが、頭部は石3個、礫22個で長径2mの環状に構成され、尾部は左巻きで北方にめぐり伸びて5mの点縁で形成される。頭部の第13号址に相対する大石は長さ70cmを測る石斧形を呈し、火熱による剥落が顕著で、本配石造構中、最大の石であり、第Ⅱ配石帯の中央に位置することから、原況は立石と考えられる。石斧2点、黒耀石剥片を共伴した。

⑦ 配石第15号址（盤状配石。右巴文型） 第13号址の北側に密接して位置する。長径3.2mを測る楕円形頭部で、中心より東縁は大石10個で組石状配石で、西半は礫60個、石2個で構成され本造構中最大の規模をもつ単位配石である。尾部は石1個、礫12個で構成され、西側から北方に伸びる。遺物は石斧6点が尾部付近から出土し、周辺から石礫3点、圓石1点、黒耀石剥片類70点、中期初頭土器片331点が共伴した。なおこの下部に平面同一規模の土壙（第1号）が埋存した。本配石造構中最も中心的位置を占める配石址として注目される。

⑧ 第16号址（盤状配石。右巴文型） 第15号址の北に連接する長径1.7mの楕円状の配石で、大石4個を四隅に配置し、2個の石、50数個の礫をもって周縁および内部を配石している。尾部は西方へ2.5m突出し、石1個礫6個が点列されている。（図版224の上）。遺物は、縄文中期初頭の土器片50点余、石斧4点（No14ほか）、石礫、石錐、搔器各1点、東側に黒耀石剥片40点余が出土した。

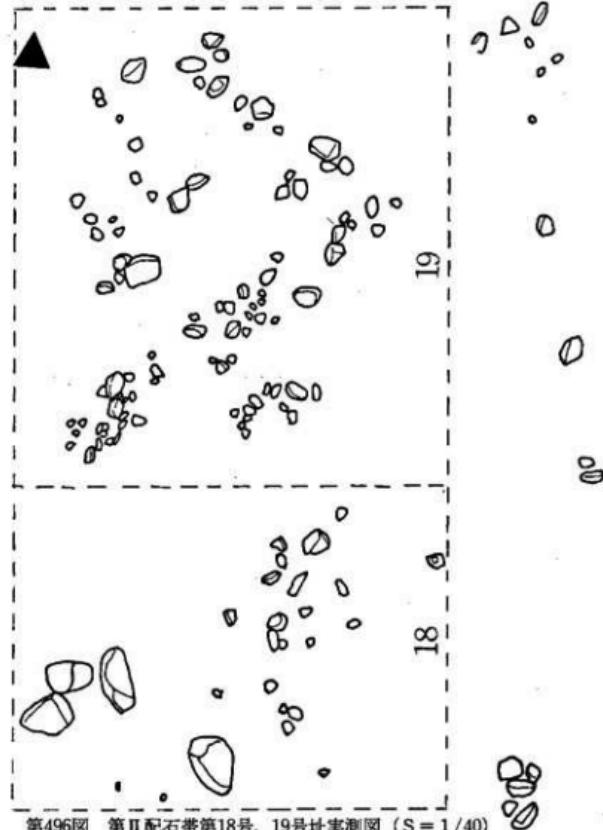
以上をA址とするが、北部周縁に接する小さな配石があり、これをB址とする。B址は長径70cm内外の長楕円形に、18個の礫を密集させてあり、尾部は東方に3m、12個の礫の点列である。頭部に対して尾部が長いことが他の配石址と同傾向をもつ。左巻きと思われる。遺物は、尾部周辺

から石斧3点、横刃1点が出土した。

⑨ 第17号址（環状配礫。右巴文型） 第15号B址の北に20cmの間隔をおいて位置する。（図版221の下、222） 頭部は長径2.4mの長円形を小礫70余個を配列し、尾部は西方に伸び北に旋回する。長さ2.5mで礫21個の点列である。全形はアラビア数字の6の形に似る。

遺物は、頭部から搔器2点、尾部から石斧3点（No.12）、横刃1点（No.13）、縄文中期初頭の土器片20余片を伴った。環状配礫址の一単位として最も典型的な形状を保っている。

⑩ 第18号址（第496図 図版223の上）（環状配礫址。左巴文型） 第16号址の西側に、頭部の位置間約3mの間をおいて位置する不整形の環状配礫址である。頭部は石4個礫3個で長径1.3mの長円形を作り、尾部は北方に2m余伸びやや幅広く、礫20個が配される。全体に不整形であるが後世の搅乱が及んでいると思われる。

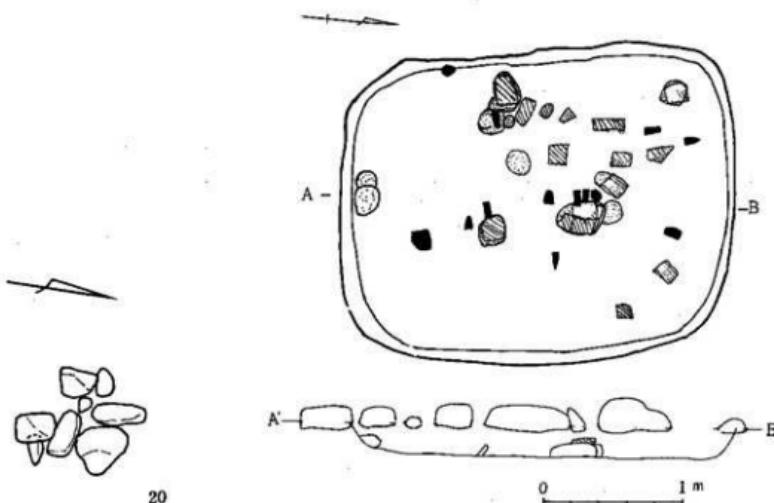


第496図 第II配石帶第18号、19号址実測図 (S = 1/40)

遺物は、石斧4点（No.8、No.7）、内2点は断製品である。また、横刃4点（No.10）及び縄文中期初頭及び後葉の土器17片が伴った。

⑪ （第19号址）（第469図 図版223の上）（環状配礫址、右巴文型）第18号址の北に1mの間隔をおいて並列するやや不整形の配礫址である。頭部は長径1.5mの楕円で礫27個の環状配列、尾部は南西に3m伸び60個近い礫でやや幅広く構成される。遺物は縄文中期初頭の土器片46片、同中期後葉土器片35片が出土したが、前者は配礫面のレベルに、後者は配礫より上層に包含されていた。石器は石斧2点、横刃3点（No.10）が伴った。

4) 第20号址（第497図）（円形集石） 第II配石帯から8m西方の段丘縁に近い位置に検出された集石で、石5個、礫3個の集合体である。尾部はない。周辺から縄文中期後葉の土器片（第499図 図版229の下）が18片出土した。なお本址の北2mに有頭石棒の頭部断片が出土した。本配石帯遺構とは、時期的に異なる性格を持つ集石址と思われる。



第497図 第20号配石址
実測図
(S = 1/40)

第498図 第1号土壤実測図 (S = 1/40)

5) 第1号土壙 (第498図 図版227の下・228の下)

第II配石帯の中央部に位置する第15号盤状配石址の真下に埋存されていた土壙である。平面プランは、ほぼ配石址と同じ規模で、隅丸長方形を呈し、南北に2.8m、東西220mを測る。第5号の配石下面から約20cmの深さに掘りあけた竪穴状土壙である。底面はほぼ底平で、中央部から西壁にかけて4箇所に6個の石を配し、これを中心に遺物が出土した。底面近くの層位からは、石斧が石に立てかけられた状態で3箇所から5点、周辺の底面から単体で3点が出土した。また断欠品ながら砥石、磨石、凹石、横刃、石鎌が各1点出土している。土器は破片ながら11個体分が出土したが、原況は、半完品が各石に打ちつけられた状態であったと思われ、底面より10cm~15cm上の土層中から出土した。土壙中心部から西壁、北壁にかけて密集した状態であった。焼土や有機質腐植土等は全く見られなかった。(図版227の下)

以上のことから、4箇所に配置された石の周囲に、石斧等の石器が置かれて埋納され、その上に土器が置かれ更に地平まで埋納され、その上に第15号配石址が構築されたものと看ることができる。埋納の主体は不詳であるが、石斧とその製作用具が主体であったかも知れない。なお遺物の詳細は、別項に述べる。

5 遺物

1) 配石址出土遺物

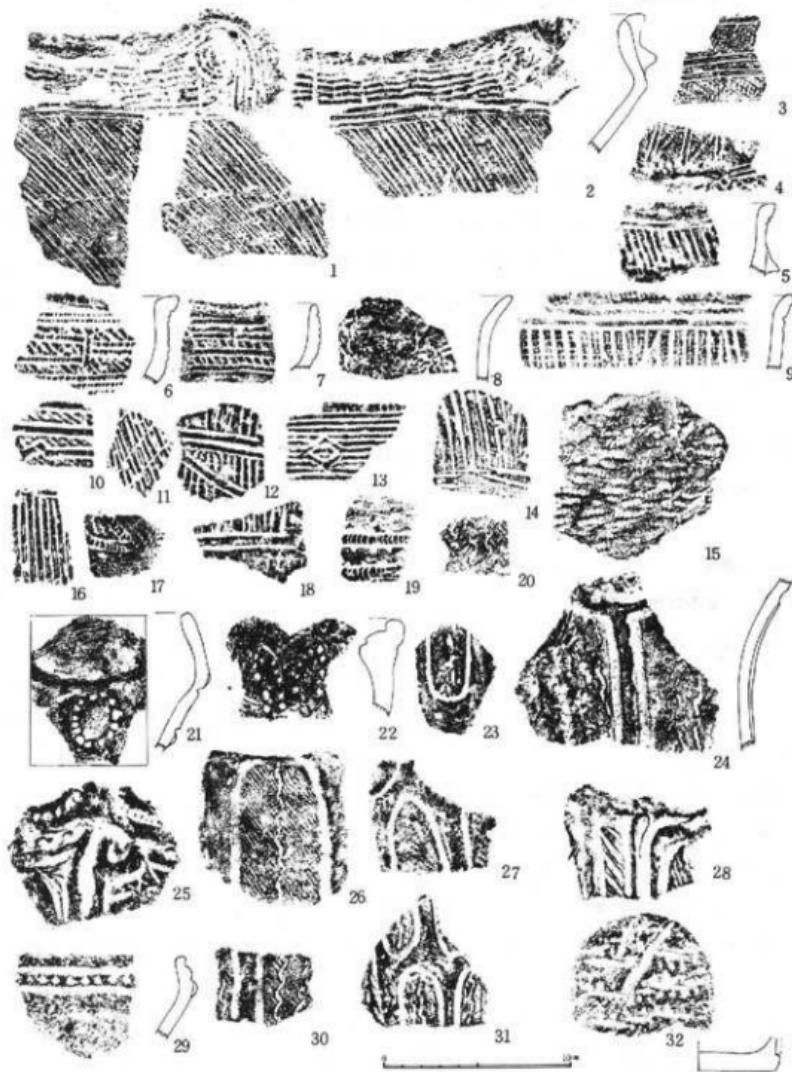
(1) 土器 配石造構の全域にわたって出土した土器片は厚さ40cm内外のクロボク質黒土層の中位に包含される配石址の内外から出土した。ほとんどが小破片で平均で切餅より小さな破片である。

その総数1,365片を数えた。所属時期から分類すると次のようになる。磨滅甚しいもの560片は除く。

- 第1類 繩文前期末葉の時期に属するもの 11片
- 第2類 繩文中期初頭の時期に属するもの 685片
- 第3類 繩文中期中葉の時期に属するもの 10片
- 第4類 繩文中期後葉の時期に属するもの 320片
- 第5類 繩文晚期後葉の時期に属するもの 4片
- 第6類 中世及び近世の土器、陶器類

以下、出土土器の代表的なものについて述べる。(第499図 図版229)

第1類 茶褐色の胴下部破片(17)で半截竹管による木の葉状文の平行沈線で沈線間に、同工具により、連續爪形文を施す。なお地文にR L繩文が付される。19は同じく底部に近い破片、17と同類であるが二条の平行沈線文間に連續三角文が付されるもの。繩文前期第5形式に比定できる。



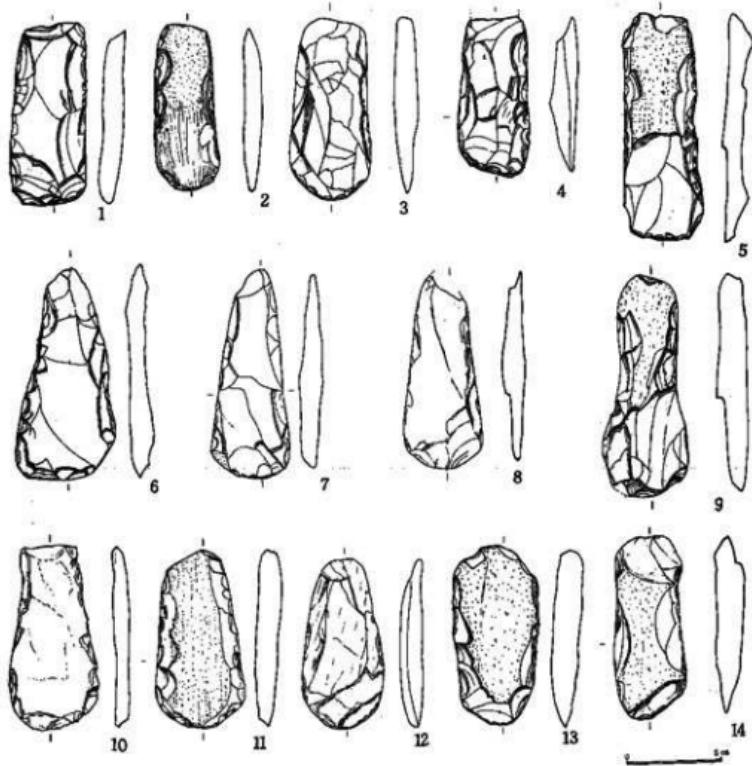
第499圖 配石道構出土土器拓影 (1 / 3)

第2類 縄文中期初頭の土器群である。(1~16・18・20)。口縁帯下から著しく内曲する。(1・2)、外反する(5・6・8・9)キャリバー形の土器で、淡褐色、やや薄手の焼成中位である。施文は、横帶区画で半截竹管の平行沈線文の横位、斜位連続施文(1)、格子目文(6・3・10)、斜格子目文(11)、縦位並列(9・16・14)があり、また、縄文地に平行沈線を横位、縦位に施すもの(3・4)もあり、単純な縄文帯を施すもの(8・20)がある。この場合は口縁上端から、幅5cmのRL、またはLRの縄文原体に結節を付して、縦位に回転施文したものである。縄文は胴部以下に施文される例(15)も多い。本類は、中期初頭を飾る梨久保式土器と同類であって(3・4・7・15・20)は、そのうち「縄文系土器」に属し、これ以外の(1・2・5・6・7・10・11・12・13・14・16)等は「沈線文系土器」に属するものと見られる。

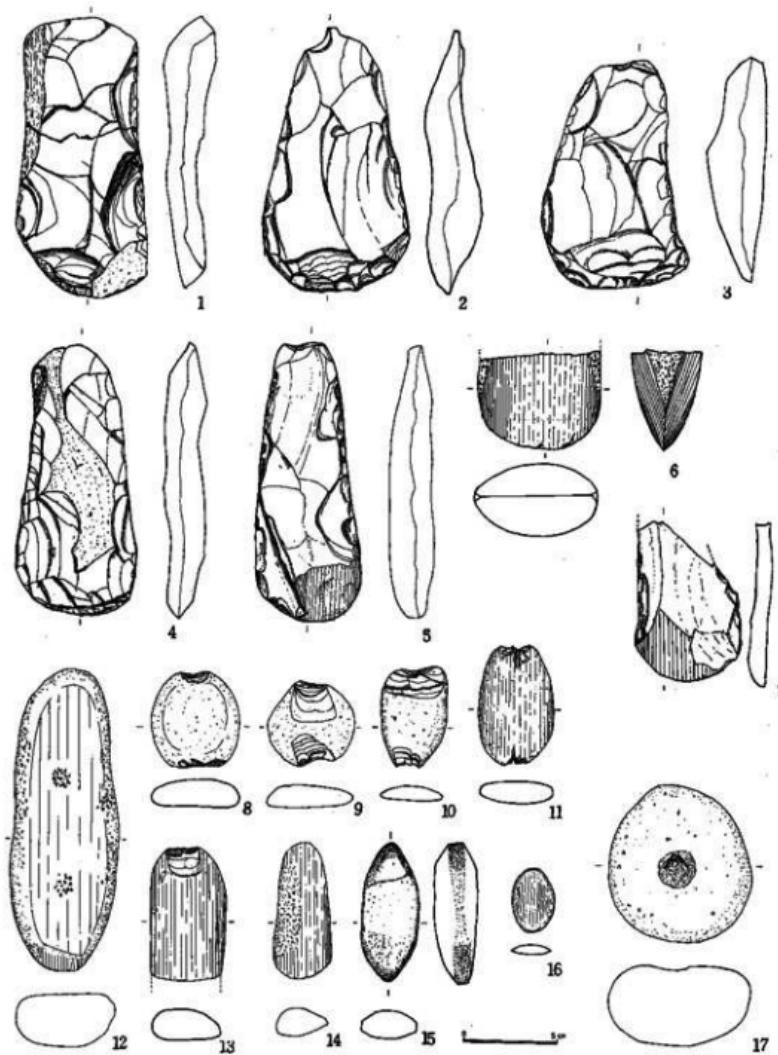
第3類 中期中葉に属する新道式土器片、藤内式土器片、各1片があるが磨滅が激しい。

第4類 中期後葉の土器群である。(21)(22)は大きな樽形土器の口縁部である。点列指突文で円形、木の葉形を表している。(25)は隆帯による渦巻と曲線文、隆帯間をへら描き短沈線で埋めている。(31)はへら書き沈線による並列横円文で内部に結節縄文を2条縦位に施している。以上は後葉第III期(長野県史編年)に属するものである。(23・24・26・27・30)は長横円、方形区画のへら書き沈線文帯の内部に結節縄文原体を縦位に施す。(24)は、キャリバー形深鉢の口縁部、他は同型の胴部施文である。いずれも、後葉第IV期に属するもので、諏訪郡の曾利式土器と趣きを異にし、加曾利E式に近く、伊那谷南部に盛行した後葉第III期、第IV期と類を同じくするものである。土器文化の伝播を考察する資料として重要である。

第5類 縄文晚期終末の土器が若干出土している(29・32、図版234の上)。29は胎土良好焼成中位の鉢形土器の口縁部で、やや内傾する口縁帯下部に、へら書き沈線を2条横走させ、その間を隆帯化し、刺突円文を連続施してある。飯山市山の神出土の佐野I B式に比定し得る。また愛知県吉胡貝塚晚期旧Aに類似している。次に、図版234に掲げた小破片は、第6配石址周辺から出土したものであるが、胎土焼成とともに良好堅緻な胴部破片(左)で器面に横位の条痕文を密接横走させている。恐らく、晚期最終末の庄の畑式土器に比定することができる。(右)は口縁端に薄い隆帯を付した鉢形土器の口縁部であるが、口縁内面に粗粒の圧痕が施されている。胎土微細な明るい灰褐色を呈しているが外面はやや摩滅度が激しい。(32)は土器底面であるが、綱代痕が付されている。粗い綱代で「1越え1潜り」の網み方である。恐らく晚期の粗製土器であろう。



第500図 配石遺構出土石器実測図（1）（1/3）



第501図 配石遺構出土石器実測図（2）（1/3）

(2) 石器 (第500~503図 図版230・231)

① 石斧 (第500・501図 図版230上)

出土した石斧総数は、53点を数えた。内18点が断欠品である。打製石斧46点、局部磨製石斧7点、敲磨製石斧1点がその内訳である。

形態的に分類すると、短冊形29点、橢形17点、その中間形7点である。前述の断欠品18点は短冊型が大部分を占め、全体の35%が破損している。

大きさから見て、大型13点、中型36点、小型23点で中型が70%を占めている。以下、代表的なものを第500・501図に示した。

イ、中形石斧。出土石斧総数の68%を占める。長さ9cm内外、幅4cm内外の大きさである。硬砂岩の表皮を残し調整されているものが多い。

a. 短冊形。(第500図 上列)両辺並行する円基形で、刃部は直刃(1)(5)、円刃(2)(3)、斜刃(4)がある。

b. 橢形。素材の断片を、尖基の橢形に整え、拡がる下端部に付刃したもので、刃形には、直刃(6)、円刃(7)(8)(9)がある。

c. 折衷形。最大幅が橢形と異なり、刃部ではなく、体部にあるもので、a、b両形の折衷になる石斧である。基部は円基に一様に整えられ、刃部形態は、カーブの強い円刃が多いが、付刃部分を観察すると、両側斜刃のもの(10, 11, 12, 13)が多い。石質は他の形態にくらべ縫泥片岩のもの(1)(2)(4)(9)(13)が比較的多い。他はすべて他の形態と同様に硬砂岩である。これらの自然石は、三峰川渓谷産出のもので、天竜川、三峰川合流地点に多く本遺跡西方1.5kmの天竜川において容易に求めることができる。

ロ、大型石斧 石斧総数の25%で、比較的に少ない。材質は中形石斧と同様硬砂岩と縫泥片岩が使われている。形態的にも、短冊形3点、橢形3点、折衷形5点を数え、すべて打製である。磨製石斧は2点で(6)は定角式、棒状磨製石斧の刃部のみの断片である。

② 横刃 (第502図 図版230下)

配石遺構区から出土した横刃は総計55点を数えた。大きさも形態も多様である。その原因は、製作技法に由来する。即ち、挙大の転轍の扁平なものを選択し、打剥により薄く広い剥片の縁辺をわずか調整し刃溝し加工と付刃加工を加えたもので、形態が多様になるが刃部を見る時、引き切る、削る機能を目的としたものが多い。本出土品を分類すると下記のようになる。

[類] [形態] [分類] [数] [実測図番号と刃部形態]

a. 楕円形を呈するもの (1)横広形 11点 4—円刃。 5—直刃。 6—回刃
(2)縦広形 10点 6—回刃。

- b. 半円形を呈するもの (1) 半円形 9点 7一直刃。 8一直刃。 9一湾刃
 (2) 三ヶ月形 11点 1一円刃。 2一直刃。 3一湾刃
- c. 方形を呈するもの (1) 長方形 8点 10一斜刃。 12一抉刃。
 (2) 台形 4点 3一直刃。
- d. 多角形を呈するもの (1) 五角形 5点 15一抉刃。 16一直刃。

粗材は、石斧と同様、三峰川渓谷産出の硬砂岩が大部分使用され、縫泥片岩は出土総数の7%に過ぎない。製作技法から見る時、b類が最も丹念に調整されていて、穂刈りの機能を持つ。

③ その他の石器 (第501図 図版231)

イ、石錐 4点が出土した。(8)、(9)、(10)は、縄文時代中期に普遍的に伴うものと同形であるが、(11)は両端の凹部の調整が、打剥に加えて、磨り切り技法により鋭い縫掛け溝が作出されており、栗久保遺跡の中期初頭に伴う石錐と同じ特徴を持つ点、留意したい。

ロ、磨石 2点で (12)は硬砂岩製の長い河床点礫の一面を低平に磨いたもので、研磨面の中軸の2箇所に打痕が認められる。(14)は長さ7cmの縫泥片岩で全面が研磨され、平らな一面にのみ打痕が認められる。(10)は縫泥片岩の棒状の自然石の半折品であるが、左側侧面が直線状に研磨されている。いずれも石器加工工具と思われる。

ハ、敲石 2点で (15)は砂岩製の転轍を紡錘形に研磨調整したもので両側面に打痕があり、両端の圭角状面は打痕により作出されている。(14)は黒色砂岩の転轍の一端を打剥し、その面に無数の打痕が認められる。いずれも小石器打剥のハンマーの機能をもつと思われる。

ニ、凹石 (17)他1点がある。球状の泥岩転轍の両面を研磨し、扁平な形として両角の中央に小剥離を加え、径2cmの凹部を作出したものである。他に棒状砂岩の自然石の両角に凹部を作出したものがある。

ホ、石棒 1点。小規模な集石第20号址の北1mの位置に単独で出土した有頭石棒頭部の断片がある。また、砂岩製石皿の断片が、第10号址外側から出土しているが省略する。

大形の花崗岩製凹石の断片1点が第9号址から出土しているが省略。

④ 小形石器 (第503図 図版231上)

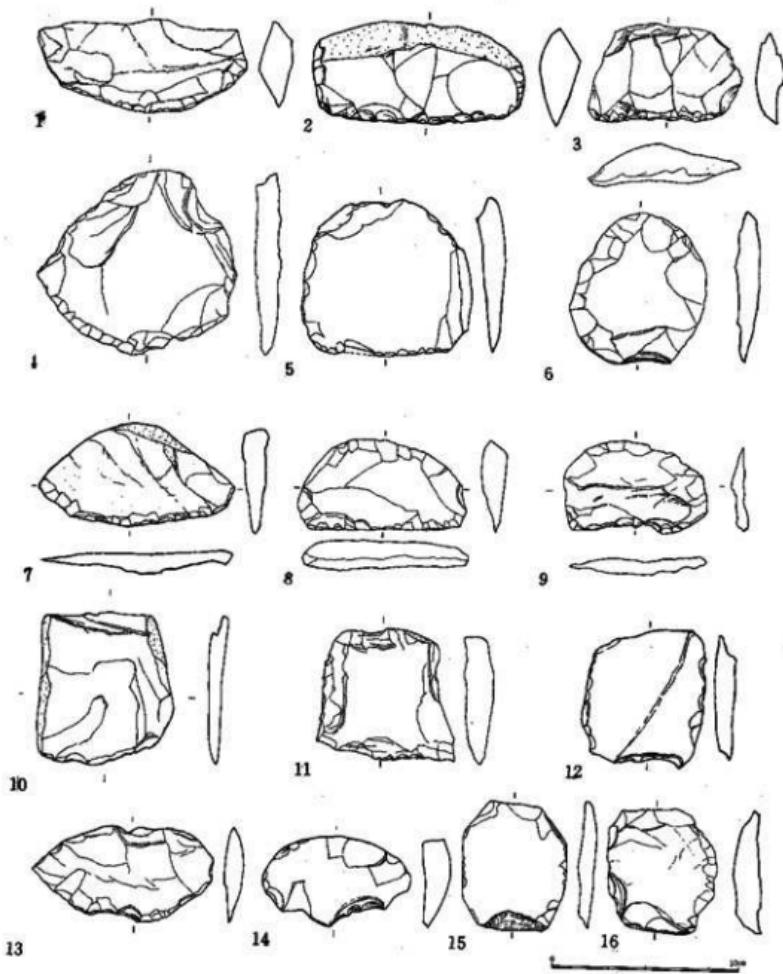
黒耀石等を素材とする小形石器115点が出土した。その内訳は、石礫25点、石錐9点、搔器28点、石匙2点、不定形石器51点である。このうち珪石(チャート)製は2点、頁岩製3点に過ぎず、大部分が黒耀石製である。なお黒耀石小剥片724片が出土している。

その一部代表的な石器を第503図、図版231に掲げたので表示番号を次に掲げる。

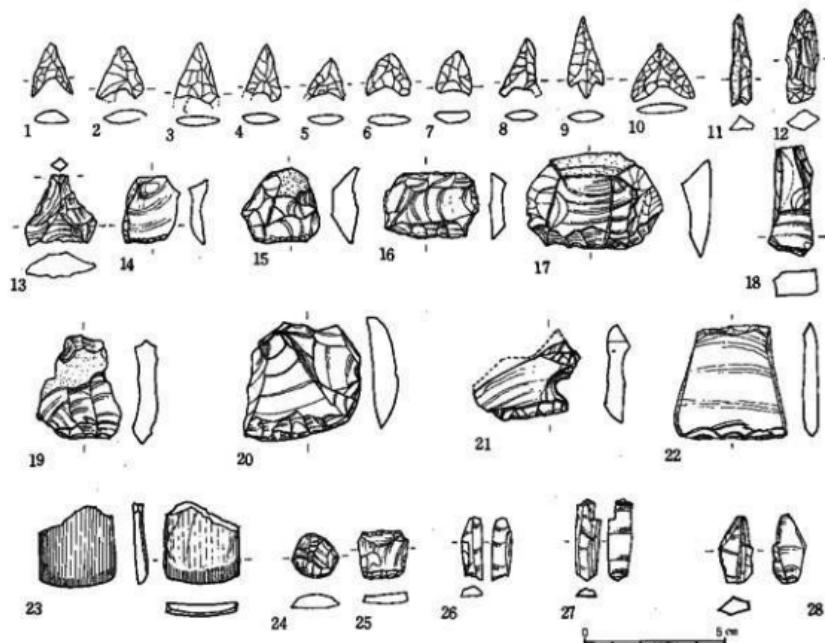
石礫。 1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 10は三角礫、9は有茎石礫。いずれも黒耀石製。

石錐。 11は断面三角形。12は断面菱形。13は撫み部を持つ。

搔器。 14. 15. 16. 17. 20は梢円もしくは長方形を呈するもの。18. 19は縦形である。



第502図 配石遺構出土石器（3）（1/3）



第503図 配石遺構出土石器（4）（1/3）

石匙。21は断欠品であるが出土はこの1点のみである。

整形磨製石斧。23は緑色岩を丹念に研磨し、刃部は丸整状に作出してある。小形挽形石斧。

横刃。22は砂岩の剥片を方形にトーリミングし、幅広い端部に両側から付刃した小形横刃である。

細石器状石器 24、25は拇指形搔器、26、27は細石刃状剥片、28は両極石器。

以上の石器中、石質別に見れば、16、17が赤色チャート。12、20、21が灰色の油母頁岩製である以外はすべて黒耀石製である。

所属時期については、縄文中期に属するものが大部分であるが、配石址に伴ったものは中期初頭の所産と思われる。

2) 第1号土壙出土の遺物

(1) 土器 (第504図 図版232の上、233)

土壙内から出土した土器は、殆ど破片で比較的多量であるが、口縁部破片による個体判別では、計11個体である。但し底部は皆無であった。第504図にその代表的なものを掲げた。口縁下部から内湾する口縁帶、下部は底部に至るまでスムーズに収束する深鉢形土器である。施文は、横帯区画で各区画は、半截竹管工具による平行沈線による斜行文、綴列文(1)、横走線文(9)、格子目文(10、2、21)、連接横走爪形文(19)(20)、曲線隆帶上の爪形文(2)等で全器面が施文される。これらは、配石帯出土の第2類土器と同類土器であり、中期最初頭の梨久保式古式土器に比定でき得る。一括遺物としてその文様組成が重視される。

また12~14、16は、鉢形土器1個体の破片である。器壁は薄く厚さ4mmで黒褐色の胎土で金雲母が含まれる。器壁内面は褐色をヨコナデ痕が認められる。施文は地文に硬い纖維を素材とした縄文原体の回転により全面及び口縁内面施文され、口唇部は、直口に近くやや内傾し、口唇内面にハイガイ属の貝殻口縁による連接爪形文が施され、口縁下部に横走する微隆帶にも同様に施文されている。本品は、瀬戸内地方の中期初頭に盛行した船元1式土器(粒江船元貝塚)であり、中期初頭期の搬入品と思われる。(図版233の下)

また1片(7)だが、地文に細いR L縄文を施文しその上にソーメン状細隆帶を斜位に並行付加した土器がある。近畿地方の大歳山式土器でこれも搬入品と考えられる。(図版233の下)

以上の土器群は、本土擴が、配石造構とその造成時期を同じくすることを証するものでこの点極めて重要である。

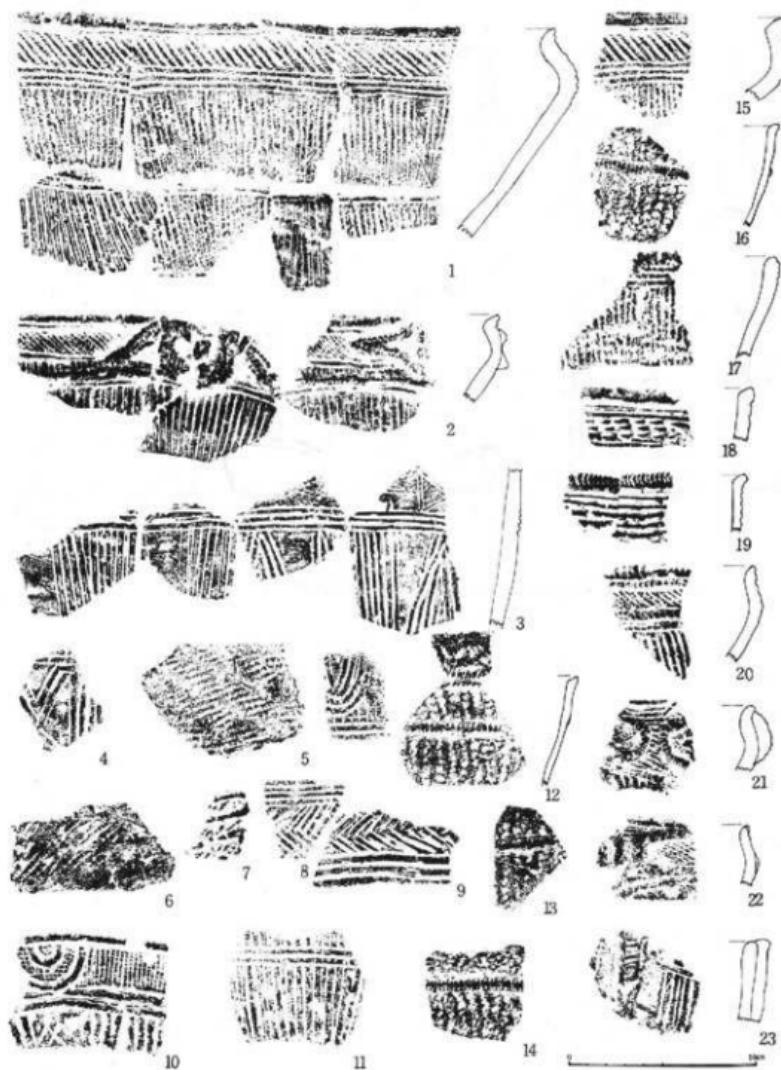
(2) 石器 (第505図 図版232の下)

土壙内部から群出した石斧は計9点である。打製石斧6点(1、2、5、6、7、8)。局部磨製石斧3点(3、4、9)。また(9)を除いてすべて中形品で、配石址出土と同じ傾向をもつ。

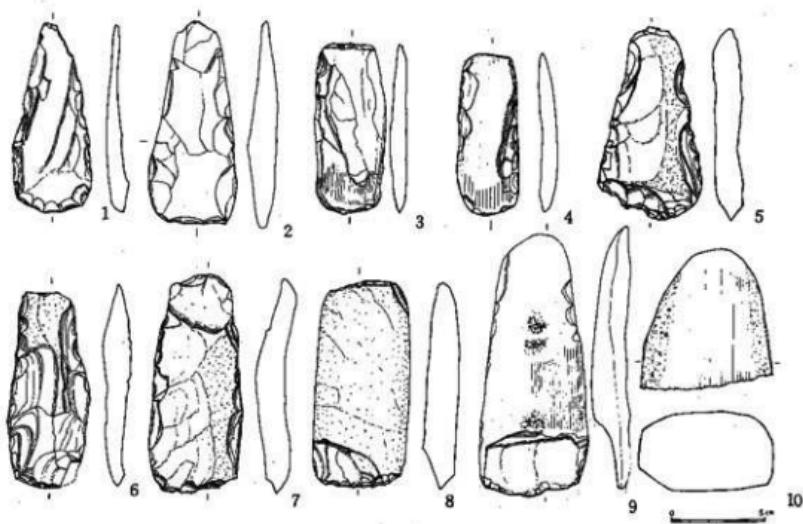
形態的に見ると撓型(1、2、5)の3点、短冊形は(3、4、8)の3点、折衷形(6、7、9)の3点で一括組成と見る時に、同数で興味深い。

刃形から見ると、直刃(2、7)の2点、円刃(1、3、4、6、8)の4点、斜刃(5)で前期3形態にその刃形が含まれ、石斧の機能推定に参考になる。大部分が三峰川渓谷の硬砂岩製であり、(2)(3)(4)が同地産の綠泥片岩である。

(10)は(5)の撓形石斧と共に縦位で出土した硬砂岩製特殊磨石の半欠品である。両側面に水平面があり敲打により調整されている。恐らくハンマーとしての機能を持つものであろう。また大形の砂岩製砥石も出土している。出土した黒羅石製石礫は第503図10に掲げた。横刃破片1点は半月形である。



第504図 第1号土壤出土土器拓影 (1/3)



第505図 第1号土壤出土石器実測図 (1 / 3)

6まとめ

天竜川の上流地域左岸にある支流新宮川渓谷の狭いラテス上に発見された配石遺構の発掘の詳細は、以上報告した通りであるが、終りに当たって、発掘時の所見をもとに、その特徴について述べ「まとめ」に替える。

1. 配石遺構の主体となるのは、平行する2条の直線状配石帯である。第Ⅰ配石帯は、幅約2m、長さ10mを測り、南北方向に展開する。第Ⅱ配石帯は、第Ⅰ配石帯の西側に幅6mの中間帯を置いて平行し、長さ16mに展開する。この特徴から「平行直列状配石帯遺構」と仮称する。

この類例は、現在の時点において、日本列島所在の配石遺構167遺跡中にはただ1例、静岡県富士宮市上条千居遺跡の縄文中期後葉の集落地に所属する大配石遺構が報告されているのみである。この配石遺構の中に、一辺40m内外のコの字を呈する配石帯がある。北側の7号配石は幅1m、長さ40m、の直線。並行する10号配石は弧状を呈し直線状配石は25m内外である。規模は小さいが本例においては、配石帯が二条並行する型で組織的に配置され、配石単位が明瞭な点が異なる。

2. 配石帯は、単位配石の連接からなり、形状は広義の環状配石であるが、本例は更に、二形式に分れ、「環状配石」と「盤状配石」とに分類され、前者は17基、後者は6基、総計23基で構成されている。

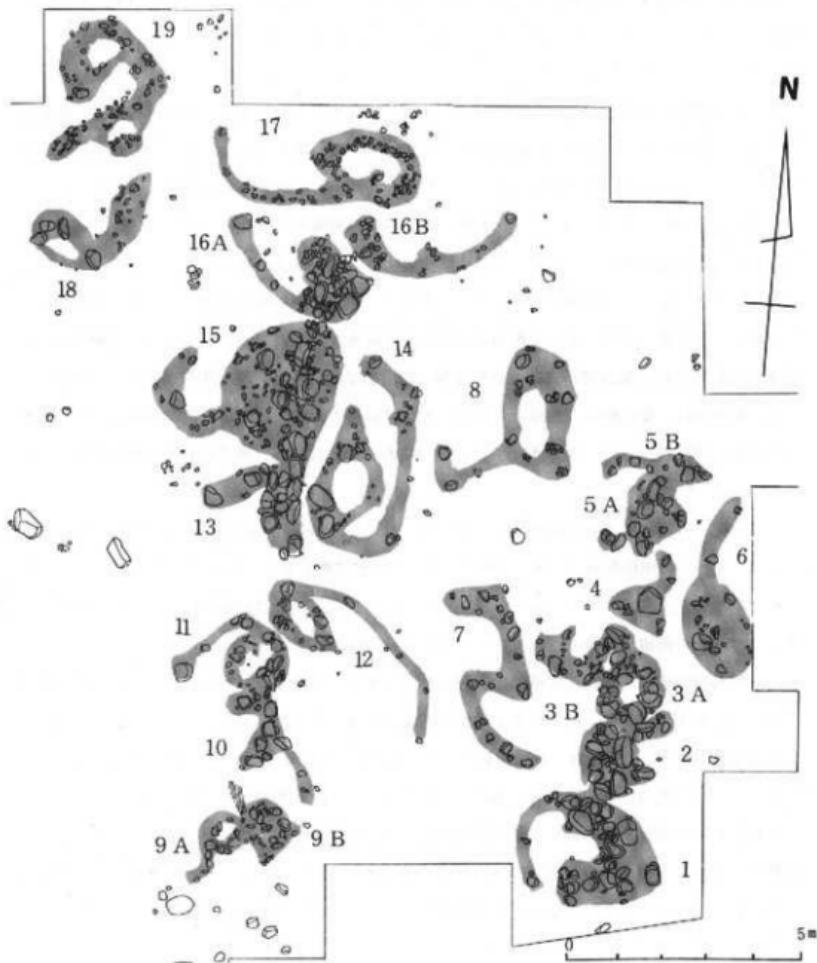
また、配石の素材により分類すると「配石址」は11基、「配礫址」は12基で組成される。

また、すべての単位配石に「尾」を伴うことから「巴文型」とし、本例における基本形とした。これは「左巻き」(L)と「右巻き」(R)がありLは計11基、Rは12基存在する。この組み合わせにより本配石帯遺構が構成されている。これを第506図に掲げた。

3. 配石帯遺構は、極めて組織的に配置され、全体形が整備されている。巴文形配石の配列からみると、第Ⅰ配石帯は、南端の1号址から北端第5号址に至るまで巴文形の、LR, L R, LR, L Rと6基が続き、やや後背に6号址Rを置き、南側前部に第7号址L、第8号址Rを並列し、これに対応する西側に第12号址R、第14号址Lを配置して4基が対立して配置されている。

第Ⅱ配石帯は南第9A号址から北端第17号址までLR, RL, LR, RL, Rと連接並列し、第Ⅱ配石帯の北端の南側の外庭には18号址L、19号址Rが南北方向に並列させてあり、隣接する単位配石は、RとLが一对の組み合わせをもち、従ってこの配置が計画性に富むことは明らかである。

また、「配石址」は第Ⅰ配石帯では第1～第5A址まで6基の連接、第Ⅱ配石帯では第10、11、13、15、16A、16Bと6基の連接で、各帶の中軸を形成し、中心部に位置するのに対して、「配礫址」は各帶の両端部に配置され(第5号址、第9号址、第16号址、第17号址)たり、配石帯の後背地(第6号址)、中間帯(第7、第8、第12、第14号址)外帶部(第18、第9号址)に配置され



第506図 小林遺跡配石帶構造図

ており、配石帯列の方向に直交する方向に配置されている点に留意したい。

4. 配石址と近接関係を持つ土壌施設は、本例においては、単位配石中最大規模を持つ配石第15号址直下に位置し、梨久保式土器と石器群を共伴しこの配石遺構の中心施設と思われる。加えてこれに東接し、極めて巨大な石斧状自然石が第14号址の中心を飾っている。これを第1配石帯の中央第3配石址から西方を見通す時、木曾山脈の空木岳(2864m)の偉容が天空にそびえているのを望むことができる。縄文配石址と、靈峯との関係は原始祭祀の一要素となるので重要と思われる。

5. 最後に、本配石址の処時期についてであるが、まず縄文時代中期初頭期の梨久保古期に相当するものと考えられる。この理由は、1. 本配石遺構と共に或は外周の全域の第Ⅲ層内から出土した土器片は、詳述したように、縄文中期初頭期のものが大半を占めていること。第4類とした縄文中期後葉の土器は1時期を隔てた後世であり、包含層位も梨久保式土器片より上位に包含されていたことなどである。また第15号配石址直下の土壌は梨久保式一括遺物を出土し、重要な傍證資料となった。

また、生活址との関係であるが、今回の発掘では、住居址は一軒も検出されず全く不明である。但し、本遺跡の南方250m、中沢丘陵上に所在する高見原、横山遺跡には縄文中期初頭期の集落址が、数ブロック存在し繁栄を示しているのでこれらとの関係も今後考察していきたい。

また本遺跡出土の縄文中期後葉の土器にかかる住居址は、本遺跡東接の上位段丘上に所在することが確認されていることを付記しておく。

6. 本配石遺構の性格についてであるが、配石施設が縄文時代においては、祭祀の場であったことは多く例記されている。祭祀活動は、埋葬を含めて多様である。本例の場合は、配石帯が二重構造であり、配石単位が多様であり、しかも配石が組織的である。共伴遺物に、横刃、石斧などが多量に伴い、土器は意識的に破碎されている点などから、生産用具として重要な石器信仰にかかる祭祀の場が、縄文中期初頭の部族社会の人々により構築された遺構と見做すことができる。

また、配石帯を構成する単位が、巴文型でしかも素材、形態、配置により各々二種類があり、それが対立する形式で位置する点に特徴が認められる。この現象は、当時の部族集団の内部構造や、性別集団の構成等の在り方を反映したものと理解したい。詳細な考究は今後に持ちたい。

以上 本配石址に直接かかる要件のみ述べたに過ぎない。伊那谷北半のこの地域には、縄文中期中葉以降、後期、晩期の配石遺構が他地域に較べ、質量共に多く検出されている。今後詳細な比較検討によりその性格を明らかにしたい。終わりに当たって、発掘作業の遂行に専念尽力された調査員や作業員の方々、文化財保護事業に当たられた、県教委、市教委の担当者の方々に厚く御礼を申しあげたい。

(小林遺跡発掘調査団団長 林 茂樹)

付 編 炭化材検出住居址について

今回の調査の中で、炭化材が良好な状態で検出され、上屋構造を知り得るものが2例ある。反目遺跡第35号住居址と遊光遺跡第9号住居址例である。

各遺構の中では詳細な説明を省いたので、ここで改めて上屋構造等にふれることとする。

反目遺跡第35号住居址

第35号住居址については前章にて詳細に述べられているので、ここでは遺存炭化材を中心として資料の検討を加えると共に若干復元を試みてみたい。

本址の炭化材の遺存状況は、住居内の北側に柱材がある程度の間隔の配分が可能な状態で検出された。南側には桁材を主にして一部梁かと考えられる炭化材が発見された。中側は後世の溝が設けられたことによって破壊されたようである。

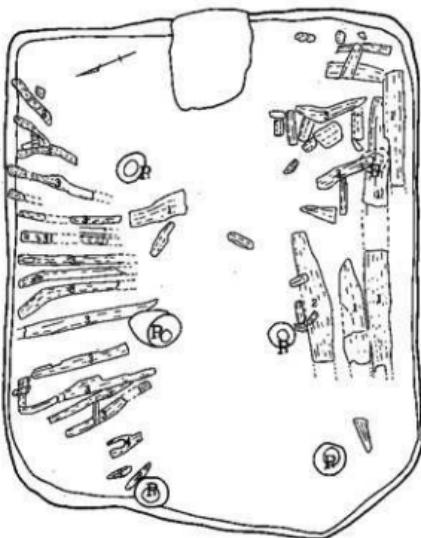
本址における用材の遺存状況は、用材個々のもつ価値ももちろんあるが、住居の時代のもつ建築構造上の問題を解決してくれる要素をもっている点で重要な意味がある。

本住居は火災によって用材の炭化した結果遺存したものであるが、中には完全に燃焼しなかつた部分もあり、長い年月の間に土地と化した部分もある点時十分考慮に入れて計測は行われた。この遺存用材のうち柱の遺存状況は一定の区間3m内に12本の柱の配列を確認することが出来た。このことは柱と柱の間隔が平均90cmとなる。

我々が古代住居の復元を試みる場合にいつも柱の間隔の明確の説明ができなかつたが、今回の発掘に於て数量的に説明できる資料が得られたことは、小さい点ではあるが貴重な問題の一つの解決となつたと考えている。また、柱の太さの問題であるが、現状では7~15cmを測るが、これよりやや太目であったろうと考えられる。材は栗が多くつた。

そのほか、南側に桁材の炭化物を検出した。桁材の長さは約3m、幅は20~24cmを測る、厚さは15cmを測る箇所もあったが、全体的には、明らかではなかった。そのほかに梁材と考えられる炭化材もわずか認められた程度であった。これらの材の材質は栗が多くつた。

以上の遺存炭化材より、柱は丸柱と考えられ、主柱はP₁、P₂、P₄、P₅の4本と考えたいが、P₃、P₆もその可能性がないではない。ここで柱の位置について注目しなければならないのは、柱の位置が西寄りに偏在していることである。このことは、上屋構造が切れ上がりの寄棟造りの屋根構造を考えなければならないことになる可能性が強い住宅形態であることである。こうした例は平出遺跡第25号址に類似がみられる。



①一板 ②梁 ③柱 ④穴を穿った材

第507図 反目遺跡第35号住居址炭化材検出状況図 (S = 1/60)

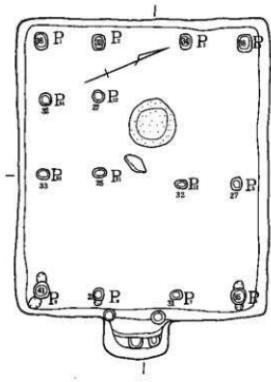
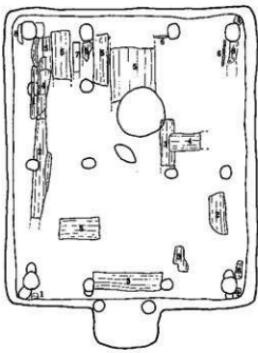
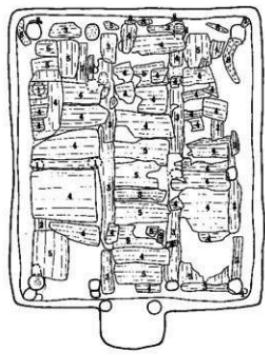
2 遊光遺跡第9号住居址

本址住居址に関する記述は、前章において詳細に述べられているので、ここでは省略し炭化材を中心とした面から建築に保わる諸点を述べ報告としたい。

本址は火災により放棄した形の住宅であるが、遺存した用材がかなり量が多いところから、当代の住宅復元上貴重な存在であると考えられる。よって、ここでは用材個々の性格を中心として検討する方向で調査を試みた。

① 炭化材の取扱いについては、長い年月を経過しているので材の焼焼せられなかった部分は、すでに土と化したことでも十分考慮に入れて計測を行った。遺存用材の主なものを記してみると、まず、柱であるがこの柱の大方は焼失し、根本の部分が遺存したのはP₄、P₆、P₉の3柱のみである。その残存率は柱の大きさに対して3分の1程度にすぎなかった。樹種は共に栗材であった。柱の大きさは12~23cm内外で大方が梢円形を呈しているところより、割材を使用したことが十分考えられる。柱の高さについては不明である。

② 桁材はP₁~P₉の通りとP₄~P₆の通りに検出された。P₁~P₉では長さ2.45m、幅は12cmを測るが、かなり焼焼と腐蝕されているようである。また、P₄~P₆の通りでは3箇所に検出され



①柱 ②桁 ③梁 ④天井板 ⑤板 ⑥壁板 ⑦梯 (?) ⑧茅

第508圖 避光遺跡第9號住居址實測圖 ($S = 1/60$)

40~115cmの長さで幅は12~20cm、厚さは11~14cmを測る。材質は栗材である。

③ 梁材はP₁~P₄の間に長さ56cm幅15cmと長さ47cm幅20cmの梁、P₆~P₇の間に長さ75cm幅15cm材P₈~P₇の通りでは長さ3.2m幅20cm内外の梁材が認められた。また、P₂~P₈通りにも長さ2.7m幅25cm内外の梁材が検出された。梁材は桁材よりかなり多く遺存されていた。

④ 敷板材も床面上にかなり多く遺存していた。長さは70~90cm内外で幅は35cm内外が多かった。敷板は簡単な根太を置いてその上に板を敷たようである。敷板の厚さは2~2.5cm内外であった。

⑤ 天井板、この天井板は桁や梁の上に折重なる状態で検出され、板の下側はかなり焼けていたが、板の上面は生焼の部分が所々に認められた。材の長さは1.0~1.3m内外が多く、幅は広いもので75cm内外狭いもので15cmを測る。板の厚さは2~3cmが多かった。材質は栗材が主で他に一部松材が認められた。また、天井板の上には20~30cm程の赤土で覆われていた。国立奈良文化財研究所の宮本技官は、この地方に陸屋根による建築手法が及んでいるのは興味深いことであると指摘された。

⑥ P₃、P₄の柱穴の内側に幅23~42cm厚さ1.5~2cm内外の板が床面下から直立して遺存していた。このことは、おそらく、各柱間に設けられていた壁板と解せられるものである。

⑦ P₁、P₃、P₄の柱穴付近に茅の炭化材がかなりまとまって発見された。この茅の遺存状態は板材の外側に多いところから、壁板の外側上壁との間を充填し壁の保護に使用されたものと思われるものである。

以上の炭化材資料から本址の建物を概観すると、桁行ではP₁~P₉通りのうちP₁~P₁₄の柱間は100cm、P₁₄~P₁₀の柱間は105cm、P₁₀~P₉の柱間は200cm、従ってP₁~P₉の桁行は402cmを測る。次にP₄~P₆の通りではP₄~P₅の柱間は206cm、P₅~P₆6柱間は194cm、従ってこの間の桁行は400cmとなる。

梁行ではP₁~P₂柱間は118cm、P₂~P₃では108cm、P₃~P₄では104cmの柱間隔は330cmの梁行となる。P₉~P₆の通りの梁行はP₉~P₈の柱間は100cm、P₈~P₇では120cm、P₇~P₆では95cm、従って梁行は315cmとなる。また、P₈~P₆の梁行の柱間は、P₂~P₁₃では107cm、P₁₃~P₁₁では107cm、P₁₁~P₈の柱間は200cm、従ってP₂~P₈の梁間は414mとなる。P₈~P₁₂の柱間は213cm、P₁₂~P₁₇の柱間隔は197cm従ってP₃~P₇の梁行は410cmとなる。そのうちP₁₃~P₁₄は支柱と考えられるものである。以上の計測から本住居址は東西4.02m、南北3.20mを測る。その面積は12.85m²。建物の周囲には板壁と窓をめぐらした。陸屋根型式を備えた堅穴式住宅である。

(調査団長 友野良一)



第4図 反日遺跡遺構合併図

**反目・遊光・殿村・小林遺跡
(本文編)**

—緊急発掘調査報告書—

平成2年3月10日発行

発行 上伊那地方事務所
駒ヶ根市教育委員会
印刷 伊那市美守下川手
株小松総合印刷所